

熊本県文化財調査報告

第129集

御幸木部古屋敷遺跡 I

—加勢川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

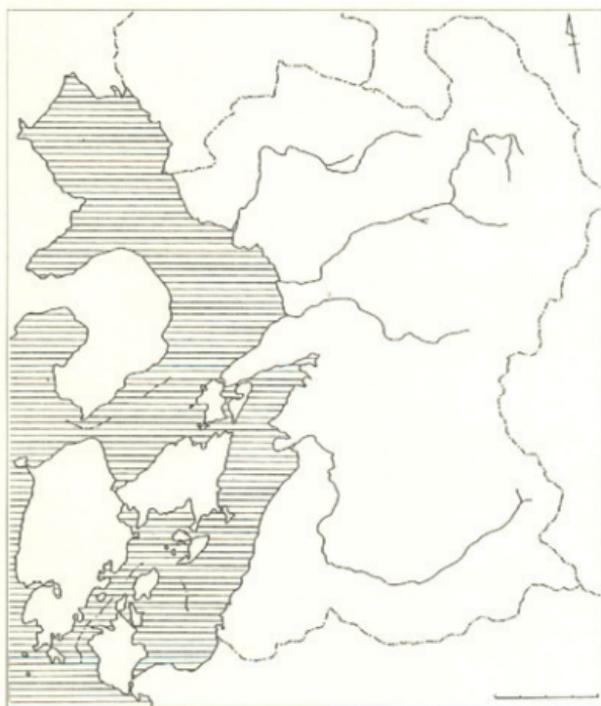


1993. 3

熊本県教育委員会

御幸木部古屋敷遺跡 I

—加勢川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—





御幸木部古屋敷遺跡航空写真（西上空より）



白磁皿

序 文

熊本県教育委員会では、建設省の委託を受け加勢川河川改修の建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。

御幸木部古屋敷遺跡は、緑川、加勢川に挟まれた低地にあり、御幸木部遺跡群の一角をなす重要な遺跡として知られています。

今回の調査ではそれを裏付けるように、中世の青磁・白磁をはじめとして、瓦質土器、土師質土器、鉄・銅製品などの出土遺物や遺構も多く、古くは弥生時代の遺物も確認することができました。

これら掘り出された遺物から往時の我々の祖先の生活ぶりを偲ぶ時、また感慨深いものがあります。

このたび、御幸木部古屋敷遺跡Ⅰの報告書を刊行することになりましたが、本報告書が埋蔵文化財に対する認識と理解を深め、さらに学術研究の進展にいささかでも寄与するところがあれば、誠に喜びに堪えません。

なお、本調査を実施するにあたり、文化財保護の観点から多大の御協力を惜しまれなかつた建設省九州地方建設局熊本工事事務所並びに御指導御助言をいただきました各位に深く感謝申し上げます。

平成5年3月31日

熊本県教育長 道 越 温

例 言

1. 本書は、加勢川河川改修の建設事業に関連して、平成2年度に発掘調査を実施した熊本市御幸木部町古屋敷にある「御幸木部古屋敷遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は、建設省九州地方建設局熊本工事事務所の委託を受けて、熊本県教育委員会が実施した。
3. 現地での調査は、磯野雄二、中川裕二がこれを行った。
4. 遺物の整理、実測および写真撮影は熊本県文化財収蔵庫で実施し、磯野、六田育子、植野治代、白石巖がこれにあたった。
5. 整理後の遺物は、熊本県文化財収蔵庫（熊本市渡鹿3-15-12）に保管している。
6. 方位の北は磁北をもちいた。
7. 本書の執筆および編集は磯野が行い、第I章第1節1・2は島津義昭が、第II章第3節は管房行、北川賢次郎、磯野が行った。第III章は島津、高木正文の指導助言をえた。

本文目次

序文	
例言	
第1章 序説	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査組織	1
3 調査の経過	2
第2節 遺跡の位置と環境	5
1 遺跡の位置	5
2 遺跡の歴史的環境	5
第3節 発掘調査の概要	8
1 調査方法および調査区の設定	8
2 遺跡の基本層位	10
3 出土状況	11
第2章 遺構・遺物	17
第1節 古代の遺物	17
1 土師器	17
2 須恵器	18
第2節 中世の遺構・遺物	20
1 遺構とそれに伴う遺物	20
2 青磁・白磁	26
3 須恵質土器・土師質土器	37
(1) 須恵質土器	37
(2) 土師質土器	38
4 瓦質土器	47
(1) 瓦質土器・碗	47
(2) 瓦質土器	48
5 土鏝	55
6 鉄・銅製品	65
7 銅銭	72

8	その他の遺物	74
	(1) その他の中世遺物	74
	(2) その他の遺物	75
第3節	金石関係	76
第Ⅲ章	調査のまとめ	81
	(1) 遺構について	81
	(2) 遺物について	81
	(3) 遺跡の性格	82

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	4
第2図	御幸木部古屋敷遺跡の周辺遺跡分布図	6
第3図	遺跡図・グリット図	9
第4図	基本層位図	10
第5図	遺構配置図(1)	13~14
第6図	遺構配置図(2)	15~16
第7図	土師器実測図	17
第8図	須恵器実測図	18
第9図	C16区井戸実測図	20
第10図	F34区1号墓域・遺物実測図	21
第11図	E27区1号土坑・遺物実測図	22
第12図	E30区1号・2号・3号土坑、C25区1号集石土坑実測図	23

第13図	C27区1号土坑、D26区1号土坑 D28区1号・2号土坑、D29区1号土坑 E29区1号・2号・3号土坑実測図……………	24
第14図	2号・3号・4号溝、C22区2ピット C24区1ピット、E27区3ピット出土遺物実測図……………	25
第15図	青磁・白磁実測図(1)……………	27
第16図	青磁・白磁実測図(2)……………	28
第17図	青磁・白磁実測図(3)……………	30
第18図	青磁・白磁実測図(4)……………	31
第19図	青磁・白磁実測図(5)……………	33
第20図	須恵質土器実測図……………	37
第21図	土師質土器実測図(1)……………	39
第22図	土師質土器実測図(2)……………	40
第23図	土師質土器実測図(3)……………	42
第24図	土師質土器実測図(4)……………	43
第25図	瓦質土器実測図(1)……………	47
第26図	瓦質土器実測図(2)……………	49
第27図	瓦質土器実測図(3)……………	50
第28図	土錘出土状況図……………	53～54
第29図	土錘実測図(1)……………	56
第30図	土錘実測図(2)……………	57
第31図	土錘実測図(3)……………	58
第32図	鉄製品・スラグ・銅銭出土状況図……………	63～64
第33図	鉄・銅製品実測図(1)……………	66
第34図	鉄・銅製品実測図(2)……………	67
第35図	鉄・銅製品実測図(3)……………	68
第36図	鉄・銅製品実測図(4)……………	69
第37図	銅銭拓影図……………	72
第38図	その他の中世遺物実測図……………	74
第39図	その他の遺物実測図……………	75
第40図	宝塔実測図……………	77～78
第41図	五輪塔実測図(1)……………	79
第42図	五輪塔実測図(2)……………	80

表 目 次

第1表	御幸木部古屋敷遺跡周辺遺跡一覧	7
第2表	土師器一覧	18
第3表	須恵器一覧	19
第4表	青磁・白磁一覧(1)	35
第5表	青磁・白磁一覧(2)	36
第6表	土師質土器法量表(1)	38
第7表	土師質土器法量表(2)	41
第8表	土師質土器一覧(1)	45
第9表	土師質土器一覧(2)	46
第10表	瓦質土器・碗一覧	48
第11表	土錘法量表	55
第12表	土錘一覧(1)	59
第13表	土錘一覧(2)	60
第14表	土錘一覧(3)	61
第15表	土錘一覧(4)	62
第16表	鉄製品一覧(1)	70
第17表	鉄製品一覧(2)	71
第18表	銅銭一覧	73

図 版 目 次

図版 1	調査地風景	図版15	瓦質土器
図版 2	遺構状況	図版16	土錘
図版 3	遺構状況	図版17	土錘
図版 4	土師器	図版18	土錘
図版 5	須恵器	図版19	鉄・銅製品
図版 6	須恵器	図版20	鉄・銅製品
図版 7	青磁・白磁	図版21	鉄・銅製品
図版 8	青磁・白磁	図版22	鉄・銅製品
図版 9	須恵質土器	図版23	鉄・銅製品
図版10	土師質土器・皿	図版24	銅銭
図版11	土師質土器・坏	図版25	その他の中世遺物
図版12	土師質土器・大型坏	図版26	その他の遺物
図版13	瓦質土器・碗	図版27	宝塔
図版14	瓦質土器	図版28	五輪塔

第 I 章 序 説

第 1 節 調査に至る経緯と経過

1. 調査に至る経緯

熊本市と上益城郡嘉島町の境界をなす、加勢川の一带は御幸木部遺跡群として古くから有名であった。遺跡の正式な発掘調査は実施されたことはないものの、弥生時代から中世期の遺物が出土しており、周辺が大規模遺跡群である可能性が指摘されていた。いっぽう、この一帯は熊本平野の最低湿地をなし、雨季には洪水の恐れがたびたびであった。この事態を忌避すべく九州地方建設局熊本工事事務所では加勢川の河川改修事業を計画した。昭和63年(1988年)、新河川の河道の掘削が行われ、中世時代の遺物包含層が露出し、夥しい遺物が採集されたが、この折りには事前調査はおこなわれなかった。遺物包含層の中心域はこの工事により削平されたとみられたが、新河川の河道の南側には包含層が幾分かつづいており、この部分については、工事着工前に発掘調査をおこなうこととなった。発掘調査は平成2年5月から平成3年2月までおこなわれた。

2. 調査組織

調査主体	熊本県教育委員会	
調査責任者	熊本県文化課長	江崎 正
"	教育審議員	隈 昭志
"	教育審議員	中川 義孝
調査総括	文化課調査第2係長	桑原 憲彰
"	参 事	島津 義昭
調査担当者	文化財保護主事	磯野 雄二
"	嘱 託	中川 裕二
調査事務	文化課経理係長	上村 忠道
"	主任主事	大広美枝子

平成4年度に報告書を刊行するため、調査を担当した磯野雄二を中心に遺物整理を、熊本県文化財収蔵庫で開始した。報告書作成にあたっては以下の者がこれをおこなった。

整理主体	熊本県教育委員会	
整理責任者	熊本県文化課長	大塚 正信
"	教育審議員	隈 昭志
"	課長補佐	松崎 厚生

整理総括	文化課調査第2係長	松本 健郎
整理担当者	文化財保護主事	磯野 雄二
整理事務	文化課経理主幹	木下 英治
〃	参事	高浜 保子
整理作業	嘱託	六田 育子
〃	〃	植野 治代
整理作業補助		田代 崇子
〃		古閑 征一

3. 調査の経過（調査日誌抄録）

5/16（水） 調査準備 現場仮設事務所の設置、表土剥ぎ作業→5/18（金）

5/17（木） 調査準備 調査区内整備、草刈り

5/19（金） 調査準備 調査区内整備

5/22（月） 調査準備 グリット杭打ち作業→5/23（火）

5/24（水） グリット毎に掘り下げを行う。→5/31（水）

6月・7月は調査中止（梅雨の為作業に支障をきたすため、また、危険を伴うために）

7/25（水） 調査再開 作業員を増員

各グリット毎に掘り下げ作業を行うが、乾燥をはげしく掘り進みにくし。

8/20（月） F30区より銅銭出土

8/24（金） 雨後の為、掘り下げやすく作業進む。

9/4（火） B4区より銅銭出土

9/10（月） 掘り下げ深度が深くなってきたため隣接の湿地より出水する。

9/11（火） B1区より銅銭出土

9/14（金） 新河川の水面と同レベルになり危険性があります。

9/17（月） マイナス区の表土剥ぎ作業→9/18、9/20

9/19（水） 台風のため作業中止

9/20（木） B-1区、C-1区、B-2区、C-2区より土鍬が多数出土。B0区より磨製石斧出土

9/26（水） 乙益重隆先生、桑原係長の案内で現地視察される。

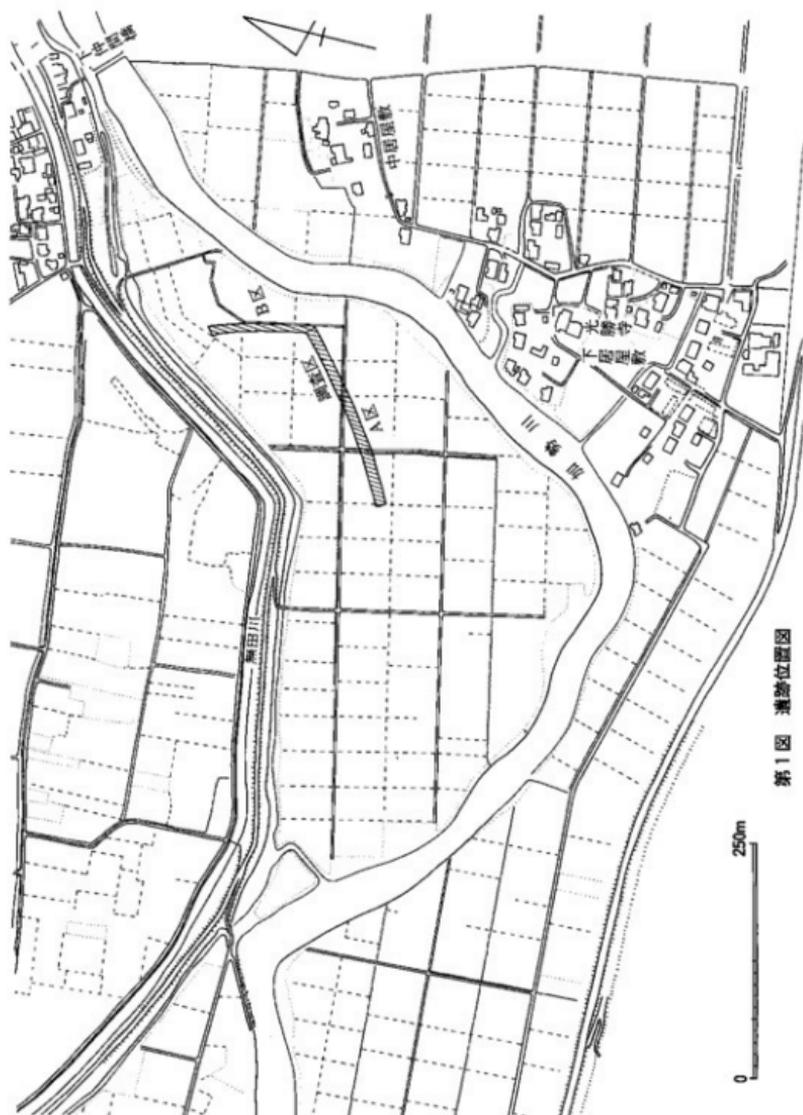
中世の遺跡としては、大変貴重であり、出土遺物もすばらしいとのことで、詳しく指導をうける。

馬門石で造られた宝塔（宝塔軸部）には、大変感動された。

数々の御指導心より感謝いたします。

- 10/2 (火) B1区にスラグ数点出土
- 10/5 (火) B-1区にスラグ数点出土
- 10/11 (木) B8区燃えのこりの灰多量に出土
掘り下げを続ける。
- 11/2 (金) B14区より銅銭出土
- 11/5 (月) C16区より灰多量に出土
- 11/6 (火) C16区井戸の調査
- 11/13 (火) B19区、C19区、D19区鉄、土師質土器などの遺物多し
- 11/15 (木) B地区の表土剥ぎ作業-11/19
C20区より獣足出土
- 11/16 (金) B-8区より青銅器出土
- 11/19 (月) B地区表土剥ぎ作業終了、B地区遺物少量確認
- 11/21 (木) B地区グリット杭うち作業、A地区の掘り下げ作業をすすめる。
- 11/28 (水) C23区遺物の出土多し
- 12/5 (水) 銅銭出土、C25区集石土坑の調査
- 12/7 (金) C24区に多量の土器片出土(土師質土器)
- 12/10 (月) D24区脚付坏(須恵器)出土
- 12/11 (火) D24区より刀子出土(全長21cm、現存長さ)
- 12/12 (木) D25区より銅銭出土
- 12/17 (月) A-8区より銅銭出土
- 12/19 (水) C23区、C24区は道路部分を削って掘り下げる。
- 12/21 (金) D30区より銅銭出土
- 12/27 (木) D31区より刀子出土(全長23cm)
D31区より小刀出土(全長26cm)
- 1/9 (水) C26区、D26区ビット多数出土
- 1/10 (木) E31区より銅銭出土
- 1/14 (月) F34区の墓壇の調査 青磁、小刀(全長25cm)出土
小刀は死者の副葬品
- 1/18 (金) F40区より銅銭出土
- 1/31 (木) 掘り下げ作業終了
- 2/1 (金) 実測等の残務作業をおこなう。
- 2/15 (金) 調査終了

第1説 調査に至る経緯と経過



第2節 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置

熊本平野は四方を山に囲まれ、盆地状の地形をなす。気候は内陸性で、年間降水量1500～2500mm、夏冬の気温差は激しく、また、昼夜の寒暖の差も大きい。平野は熊本市の東部の洪積台地と白川・緑川を中心とした河川堆積によって形成された沖積低地に二分される。熊本市街の占地も、白川の扇状地の砂堆上にある。

御幸木部遺跡群は、熊本市の最南部に位置し、緑川と加勢川と無田川が近接するところで、海拔4m前後という低地の水田地帯にある。所在地は熊本市御幸木部町古屋敷である。

御幸木部古屋敷遺跡はこの一部分で、しかも加勢川の蛇行に囲まれた部分にある。この加勢川は熊本平野の中央部を流れる1級河川である。熊本市の唯一の湧水地帯である水前寺、江津湖の水をあつめ木山川と合流し熊本市と嘉島町の境界を西進し、熊本市川尻町を経て熊本市天明町で緑川と合流して有明海へと西進する。当遺跡周辺は標高5m前後と大変に低地にある。加勢川のやや上流でも標高6m前後と同じように低いために、毎年2～3回洪水がこの地区を襲っている。近年、最上流部で宅地開発の地上げ作業が行われたために、それがひどくなってきている。そのために河川改修が急務である。また、緑川の河口域での近世における干拓事業も河川の排水能力を大きく損なわせ洪水を発生させた一原因になるであろう。

2. 遺跡の歴史的環境

御幸木部古屋敷遺跡は御幸木部遺跡群の一角をなす遺跡で、この周辺には各時代の遺跡が集中的に分布しているが、本格的に調査された遺跡は少ない。詳しくは、「周辺遺跡分布図」および「周辺遺跡一覧」を参照されたい。ここではごく周辺の遺跡を簡単にまとめてみたい。

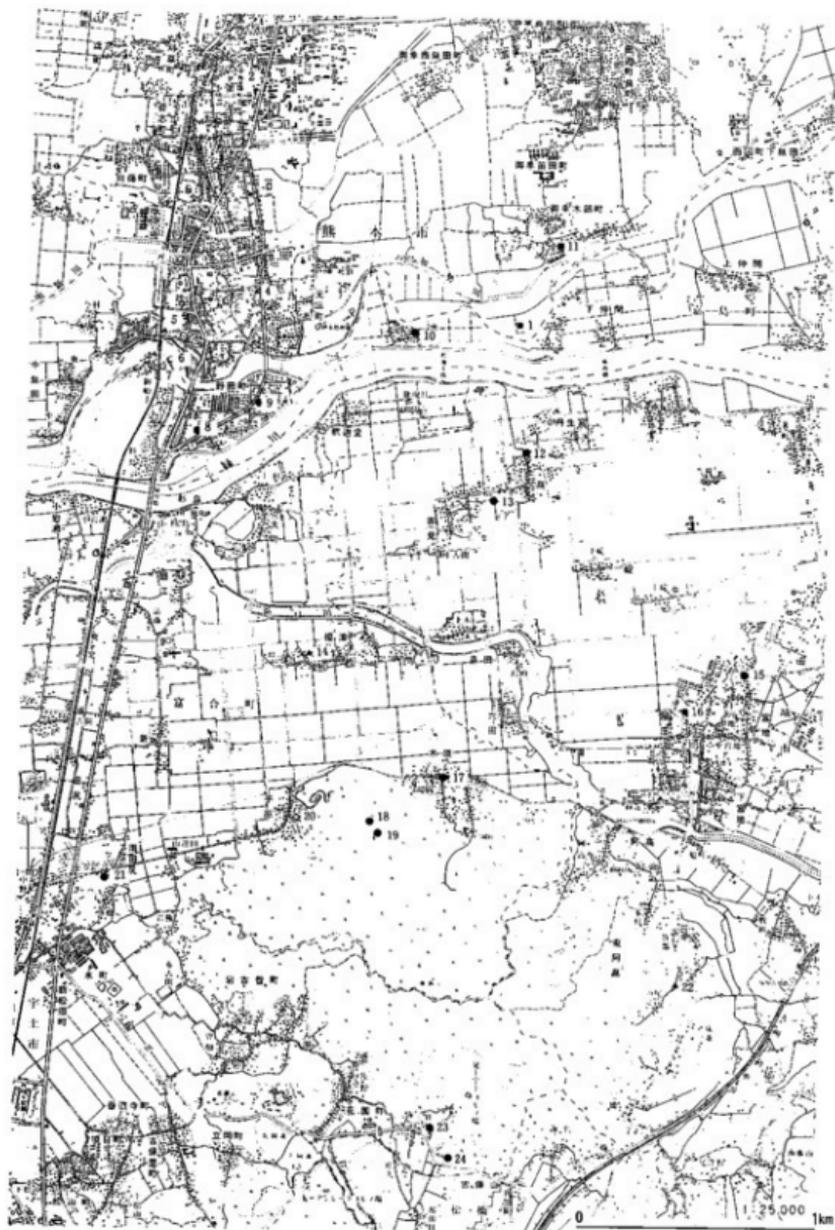
縄文時代は、緑川の南に阿高貝塚（縄文中期）、黒橋貝塚（縄文中・後期）、御領貝塚（縄文後期）などの有名な遺跡がある。九州の縄文土器の編年においても重要な位置をしめる。

弥生時代は、加勢川の上流の江津湖に江津湖苗代津遺跡（弥生前期）があり、板付Ⅰ式、板付Ⅱ式の出土をみ、江津中ノ島遺跡、御幸木部遺跡群の八万塚遺跡、久保遺跡でも弥生前期の土器の出土をみる。また、嘉島町北甘木の豆坂遺跡、飯田溝遺跡、二子塚遺跡には弥生中期の大甕棺群がある。弥生後期にはいと、御幸木部遺跡があり、また、二子塚遺跡という全長約300mの環壕に囲まれ約280基の住居跡を有する後期末期の大遺跡がある。

古墳時代は、装飾古墳の井寺古墳、上官塚古墳、東天神原古墳、大塚山古墳、そして県内最大の塚原古墳群がある。

古代は、嘉島町の条理制地名の残存、益城郡衙推定地、益城国府推定地、益城軍団推定地、陳内麿寺跡、長徳寺跡「今古我山学習院（学承院）」などがあり、当遺跡でも布目瓦の出土があ

第2節 遺跡の位置と環境



第2図 御幸木部古屋敷遺跡の周辺遺跡分布図

第3節 発掘調査の概要

1. 調査方法および調査区の設定

調査区は幅約10m、長さ約200mのA区と幅約8m、長さ約130mのB区の2区からなっている。表土剥ぎ作業および掘り下げ作業の結果、B区には遺構、遺物が見つからなかった。調査の中心対象はA区の約2000㎡である。

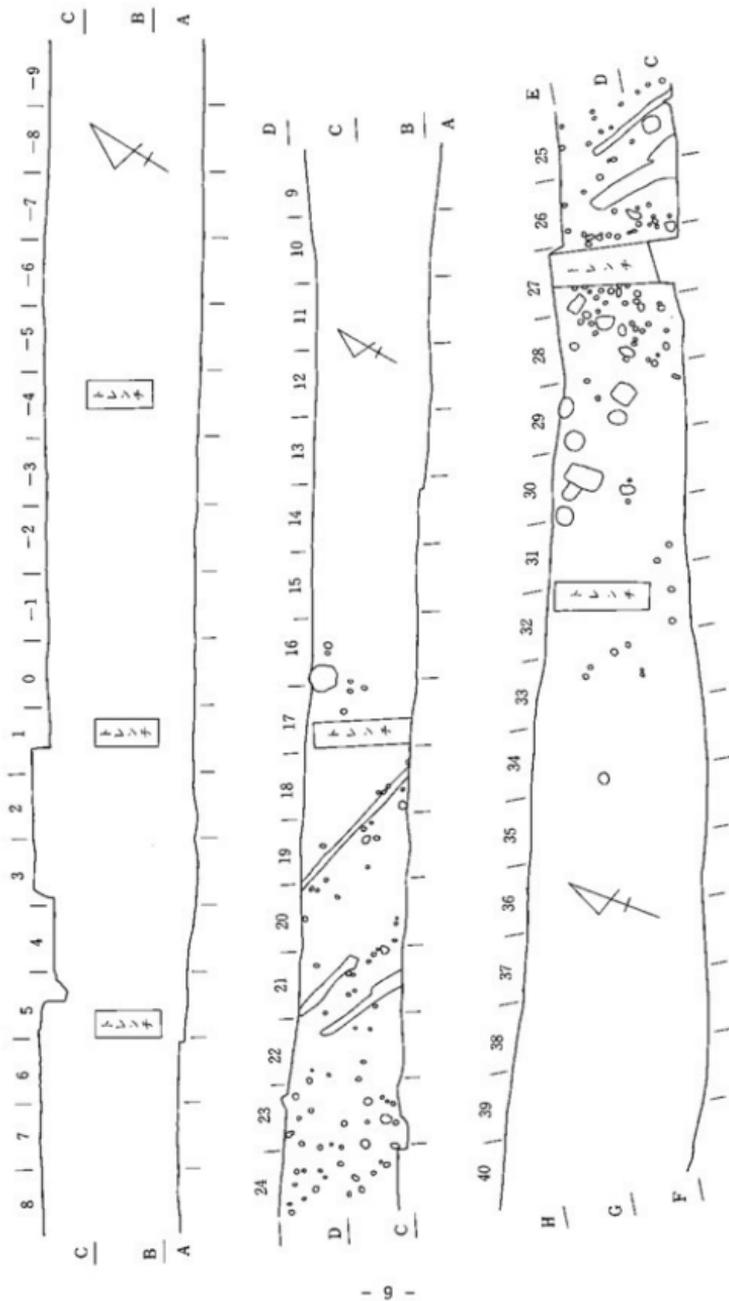
調査では、最初に重機で表土（第Ⅰ、第Ⅱa、b層）を剥いだあと新河川の新道に沿って4m四方のグリッド（調査区画）に分割した。グリッドの名称に関しては、新河川河道に沿う側をアルファベットで、直行する側を数字で表している。

さて発掘調査に関しては、トレンチ（深掘溝）を数カ所に設定して土層観察を適宜おこないながら、グリッド毎に一層づつ分層して掘り下げていく方法をとった。具体的には、中世包含層に達したところで清掃をおこない、遺構を確認しながら掘り下げていくことを繰り返す手順でおこなった。なお、トレンチは機械掘りをおこなった為、その部分のみ遺構の確認はできなかった。また、新河道は湧水のため掘り下げを進めていくにしたがって出水がひどくなり、C16区井戸での出水は特に激しく作業の危険性がたかまったので途中で中止した。そのために0.9mの掘り下げで止めた。

表探が最も多かった付近から調査をはじめグリッド番号を0とし西側へと進めていった。第Ⅲa層から手掘りで7cm前後づつ掘り下げていき近世の遺構・遺物の確認をおこなっていった。遺物は小片が数点出土したが、遺構の確認はできなかった。第Ⅲb層も同じようにおこなっていったが結果は同様であった。第Ⅳa層から中世時代の遺物が出土しはじめた。遺構の確認を第Ⅳb層からより注意深くおこなっていったが、土色が近似しているため中世遺構の掘り込みはわかりにくかった。また、最下部より古代、古墳時代の遺物が若干ながら出土した。第Ⅴa層になると中世の遺構もより明確に確認できるようになった。遺物も第Ⅳb層と同じぐらいの出土をみた。手掘りの掘り下げはこの層までおこない中世遺構の完全なる確認をおこなった。深度平均70cmの手掘りの掘り下げをおこなったことになる。

0区から作業をはじめ作業が進むにつれて-1区、-2区も調査を同時に進めていった。

調査期間中に雨季があり、作業に危険性がともなったり、調査区が冠水したりしてできにくくなったために、6月、7月は作業を中止した。そのため調査期間は、平成2年5月、8月から平成3年2月までの約8ヶ月間にわたっておこない、出土した遺物の整理および報告書の作成は、平成4年度に、熊本県文化財収蔵庫において実施した。



第3図 遺跡図・グリット図

2. 遺跡の基本層位

当遺跡調査区は、標高5m前後と低湿地にあり古来より水害が後をたたない地区である。過去の大洪水の跡が地層に表れていないかⅢ層より下部については特に観察をおこなってみたが確認はできなかった。江戸末期の有名な辰の年の大水害の痕跡も確認できなかった。

第4図は当調査区の基本層位図である。層は最上部層から番号をつけて、大きく5層に分層できた。また、各々の各層をa、bと細分することもできた。

第Ⅰ層 黒褐色土 表土層（耕作土）

第Ⅱa層 灰色土 砂泥質で、わずかながらに赤茶色の鉄分の堆積もみられた。

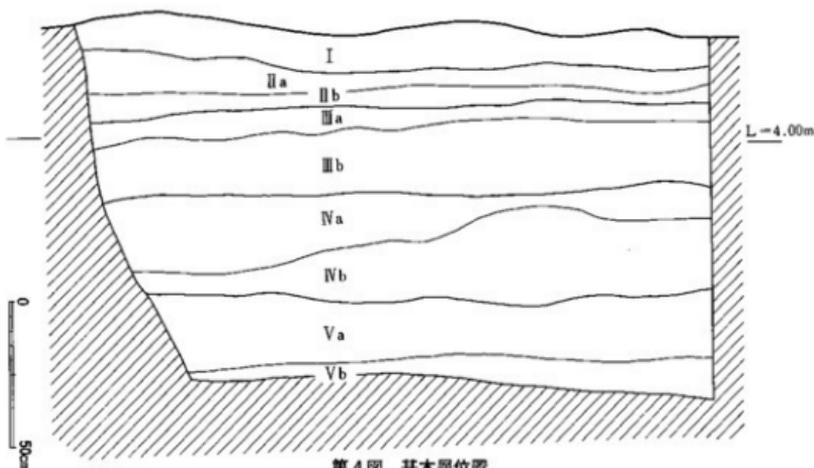
第Ⅱb層 褐灰色土 砂泥質で、赤茶色の鉄分を多量に含み錆びついた色の土が堆積している。この層は水田に供されたようである。

第Ⅲa層 暗褐灰色土 小礫を含む硬粘質土である。

第Ⅲb層 黒褐灰色土 第Ⅲa層と同じく小礫を含む硬粘質土であるが、やや黒色を呈した層である。また、この層は近世の遺物を包含している層である。陶磁器の小片が少量ながら出土した。

第Ⅳa層 黒灰色土 やや黒色を呈した泥炭質土の層であり、この層が中世遺物の包含層である。

第Ⅳb層 暗灰色土 泥炭質土である。この層の下部から古代、古墳時代の遺物も出土している。この層から中世遺構の掘り込みが確認できるが、不明確な土色の部分も多



第4図 基本層位置

く確認までには困難を要する。

第V a層 黄灰色土 やや黄色みを帯びた砂泥質土である。古墳時代、弥生時代の遺物がわずかに含まれていて、その出土をみた。

第V b層 青黄灰色土 第V a層より青みを帯びた層である。この層では遺物の確認はできなかった。

粘土質の多い土のため乾燥するとガチガチにかたくなって移植ゴテで掘っても遅々として進まず、雨が降ると水はけがわるく足も踏み入れられない状態になってしまう。また、新河道には常に水が満水のため地下からの出水に悩まされた。

3. 出土状況

御幸木部遺跡で出土した各時代毎の主要な遺構・遺物およびそれぞれの出土地点は次の通りである。出土地点については、第3図「遺跡図・グリット図」、第5図・第6図「遺構配置図」(1)、(2)を参照のこと。

「遺構」は、中世のもので第IV b層より下部に見つかった。それらは、第16区から第35区までのあいだに集中している。土坑12基、墓壇1基、集石土坑1基、井戸1基、溝5条、ピット(柱穴?)を多数発見した。

土坑は掘り込みが浅いものが多く、埋土もほぼ同じようである。E27区1号土坑から瓦質土器の体部口縁部残存1点が出土した。

墓壇はF34区とF35区にまたがっていたが、F34区とした。直径1mの円形をなし、掘り込み深度は0.3mである。遺物は、刀子茎片1点、白磁碗(玉縁)1点、小刀(25cm)1点が出土した。男性の下顎骨などの骨が出土した。

集石土坑はC25区から見つかった。直径1mの円をなし掘り込み深度は0.3mで、拳ふたにぎり大の角礫がみられた。埋土は灰が少し混じった土であった。

井戸はC16区から見つかった。遺物は青磁(蓮弁文)1点、角釘1点、五輪塔の地輪、火輪各1個出土した。井戸は直径1.6m、掘り込み深度0.9mであるが、井戸の位置が満水の新河道に突き出ており、掘り下げることによって出水がひどくなり危険性がでてきたので途中で中止した。

溝は5条見つかった。遺物は、2号溝から白磁碗1点、3号溝から銅製の装飾金具2点、5号溝から刀子茎片1点が出土した。

柱穴は多数見つかったが、建物を復元するまでにはいならなかった。遺物は、C22区P2とC24区P1より土師質土器が、E27区P3より土錘が見つかった。他の遺物は小片すぎて実測することができなかった。柱穴の出土は、第16区から第33区に集中する。

「弥生時代」の遺物は、4点出土した。磨製石斧1点、石製紡錘車1点、磨製石ノミ1点、白川水系壺型土器1点である。V a層からの出土である。

第3節 発掘調査の概要

「古墳時代・古代」は、土師器5点、須恵器14点が出土した。土師器の出土地点は第18区から第27区と限られている。坏2点、浅鉢1点、高台付碗1点、甕1点である。坏は底部にヘラ切りの跡が明確にでており、高台付碗は内外面ともに黒くヘラ磨きしており高台は貼り付けである。須恵器の出土地点は第18区から第34区で、しかも第18区から第25区に集中している。坏2点、高台付坏9点、蓋2点、脚付き坏1点である。高台付坏の出土が多いのが特徴である。土師器・須恵器出土地点は第18区から第25区と限定している。出土土層はIV b層の下部である。

「中世」の青磁・白磁は、個体数にして合計約120点の出土をみた。そのうち図にでき、掲載したのは青磁54点、白磁30点の合計84点で、青磁碗が最も多く48点、白磁碗16点、白磁皿14点、青磁皿・盤6点と続く。出土集中地点は、青磁が第一区から第五区と第30区から第32区、白磁が第31区から第34区で、青磁も白磁も集中しているのが、第31区第32区である。出土土層は、IV a層である。

須恵質土器・土師質土器は、出土点数が多い。特に、土師質土器の点数はおおく個体数は不明である。須恵質土器は5点、皿、高杯、すり鉢、甕、長胴壺各1点ずつの出土をみた。土師質土器は図にできた60点とその糸切り底の拓本をあわせて掲載した。出土地点は第0区、第1区と第31区から第34区が集中している。出土土層はIV a層、IV b層の一部である。

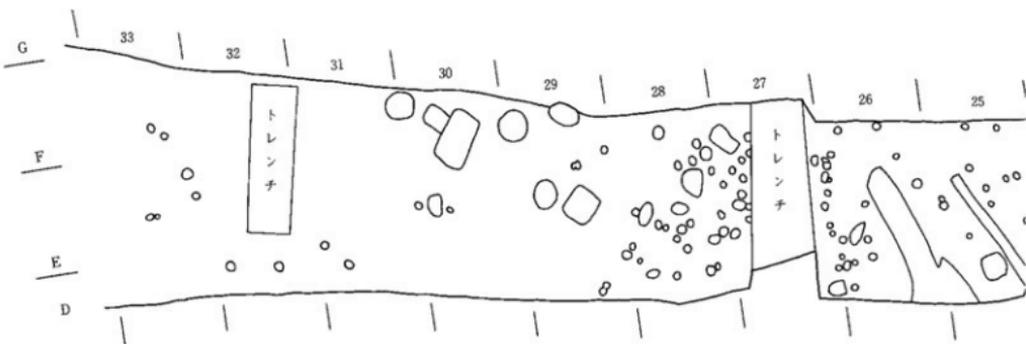
瓦質土器・碗は11点、瓦質土器24点を作図掲載した。瓦質土器・碗は第16区から第34区に出土している。瓦質土器は、すり鉢5点、こね鉢2点、湯釜4点、火舎9点、花瓶1点、浅鉢1点、甕2点の出土をみた。出土地点は、第3区8点、第8区3点、第一区2点、第5区2点と東側に集中している。出土土層はIV a層、IV b層の一部である。

土鍾は第一区から第0区に集中し、離れた第36区にわずかに出土している。165点程作図して、また、第28図に土鍾出土状況図を掲載している。形態は断面が長方形型、紡錘型がほとんどである。出土土層はIV a層である。

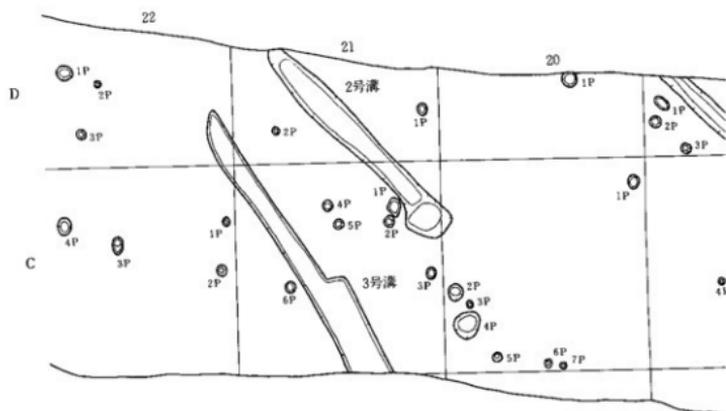
鉄・銅製品は角釘46点、棒状鉄製品18点合わせて64点で、全体の65%を占める。スラグの出土も多い。金メッキの銅装飾品、火打ち鉄、紡錘車の軸片、鉈などの出土をみた。出土土層はIV a層である。

銅銭は14枚の出土をみ、合子2点、瓦塔1点、鶴の羽口2点、獣足1点、備前焼すり鉢1点なども出土した。出土土層はいずれもIV a層である。

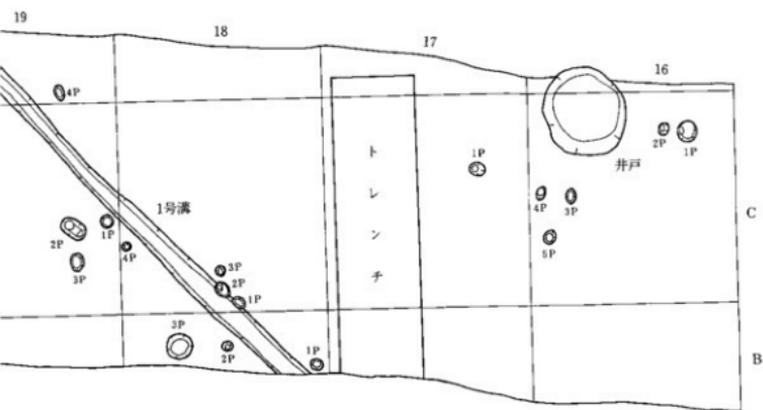
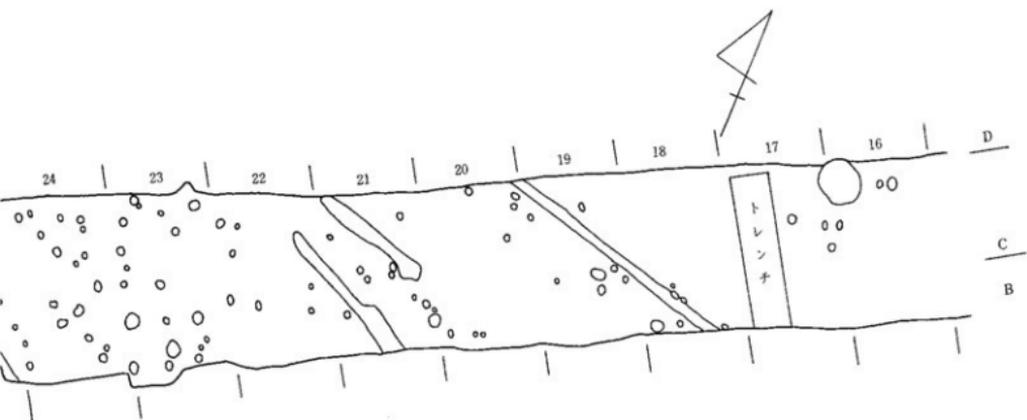
宝塔軸部は、表土剥ぎ時に出土した。五輪塔は、C16区井戸より2点、C18区より3点B-1区より1点、C2区より1点出土した。

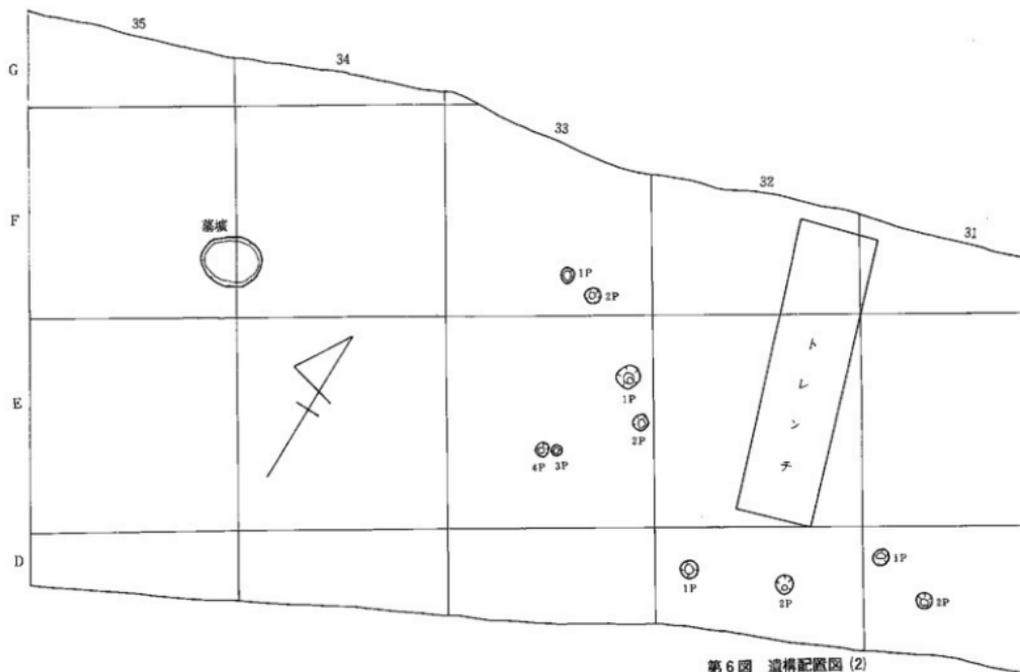


Pはピット

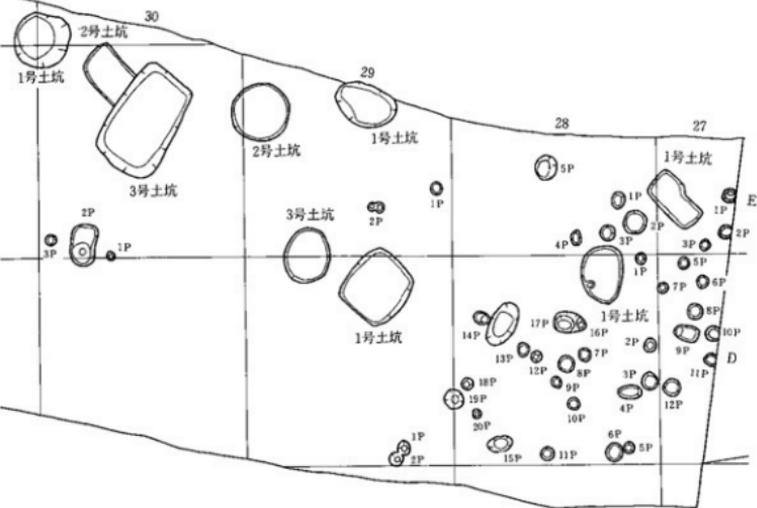
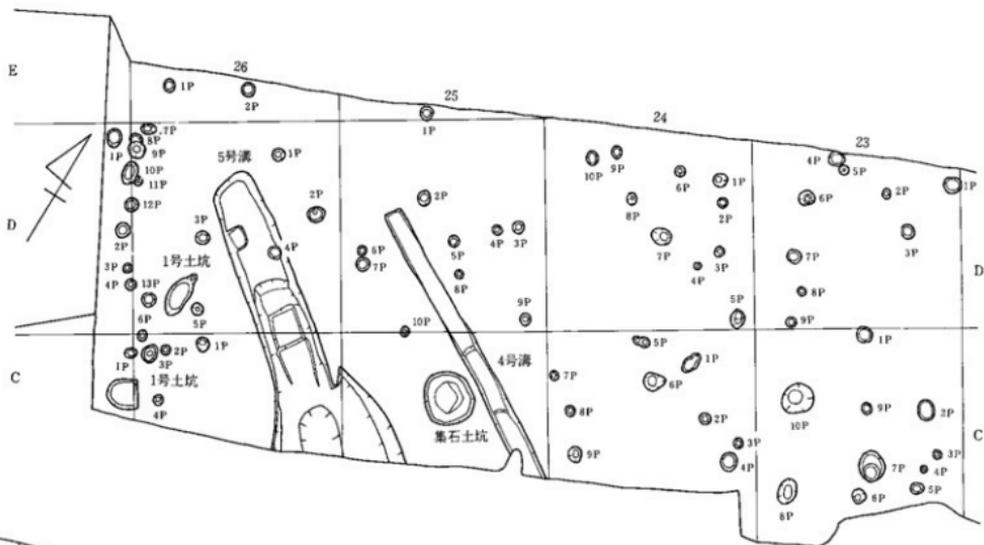


第5図 遺構配置図(1)





第6図 遺構配置図(2)



第Ⅱ章 遺構・遺物

第1節 古代の遺物

1. 土師器（第7図）

土師器は、数十点の出土をみたが図化掲載できるのは次の5点であった。出土土層は、IV b層（古墳時代、古代）であった。

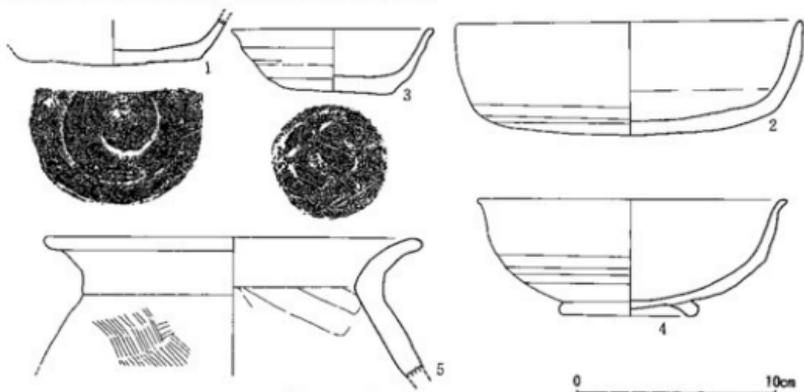
1は、坏の底部の残存で底径8.8cmを測る。体部は外傾して直線的に立ち上がる。底面は回転ヘラ切りをし、内外面ともにロクロ回転によるなで調整を行っている。胎土は密で焼成も良くされている。色調は内面赤褐色、外面灰褐色を呈し、内面に煤付着が見られる。

2は、浅鉢で口径17.4cm、底径13.7cmを測る。器壁は等厚で、体部は直立して立ち上がっていく。底面は回転ヘラ切りをし、内外面ともにロクロ回転によるなで調整を行っている。胎土は細砂粒を含む。色調は内面灰褐色、外面赤褐色を呈する。

3は、坏で口径10.2cm、底径5.9cmを測る。底部は肉厚く、体部は外傾しつつ立ち上がり口唇部で丸くとし、体部は肉薄くなる。底面はヘラ切りをした後に、ヘラ切痕を消している。内外面はなで調整をしている。胎土は細砂粒を若干含む。

4は、高台付碗で8世紀後半の黒色土器である。口径15.6cm、高台径6.6cmを測る。体部は外傾してゆるやかに立ち上がり、口唇部は大きく外反する。内外面ともよく研磨されていて、内面は黒く磨いている。高台は貼付高台で、断面長方形を呈する。胎土は密で、焼成も良くされている。色調は外面一部灰色を除いて黒色である。

5は、甕で口径19.2cmを測る。口縁部は横なで調整をし、内面はヘラ削り痕が見られる。外面は丹塗りで赤褐色をし、内面は灰褐色を呈する。

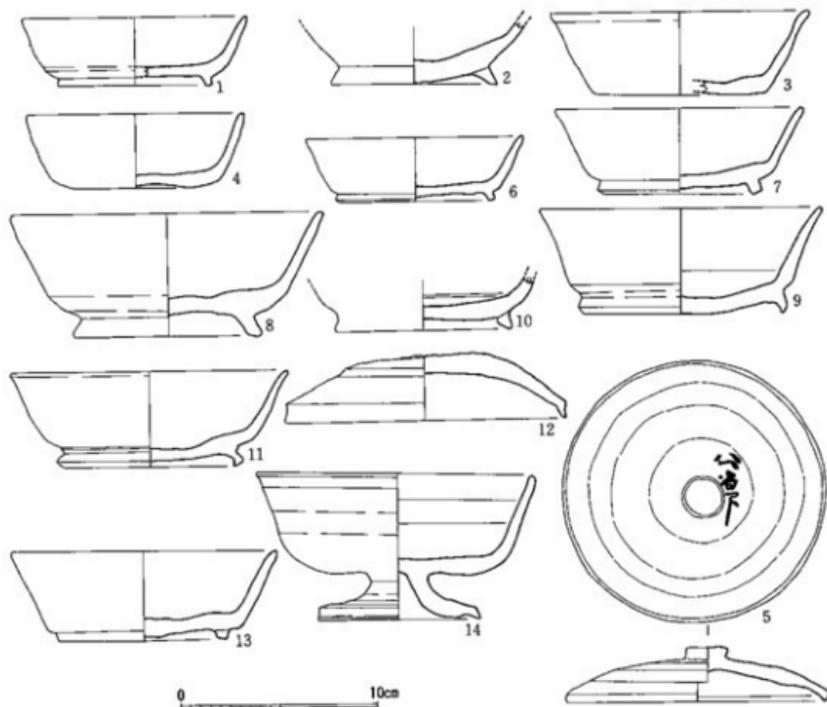


第7図 土師器実測図

第2表 土師器一覽

番号	出土地点	器種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	形 態 の 特 徴
			口径	底径	器高				
1	D、18	坏	—	8.8	—	精選	良	内面 赤褐色 外面 灰褐色	残存5/8底部は外反しつっ直線的に立上る。 即転へち切り
2	C、19	浅鉢	17.4	13.7	5.7	小粒砂含む	〃	内面 灰褐色 外面 赤褐色	残存5/8底部は凸レンズ状になり、体部は 内彎しつっ立上り尖りぎみにとじる
3	D、23	坏	10.2	5.9	3.3	〃	〃	内面 灰褐色 外面 赤褐色	完形底部肉厚く、体部ならかに立上り。 口唇部外反してとじる
4	D、27	高台付碗	15.6	—	5.9	精選	〃	内面 黒色 外面 黒色一部灰色	残存7/8高台高0.8cm断面長方形、体部内 彎して立上り、口唇部外反
5	D、25	甕	19.2	—	—	小粒砂含む	〃	内面 灰褐色 外面 丹ぬり	内面へラけずり底が明確にあり、口縁部 は緩かに外反する

2. 須 恵 器



第8図 須恵器実測図

須恵器は、数十点の出土をみたが図にでき掲載したのが14点であった。出土土層は、IV b層（古墳時代、古代）であった。

1、6、7は高台付坏である。高台畳付に特徴があり8世紀後半のものである。

2は、高台付坏で高台径8.4cmを測る。高台裏に自然の灰軸が厚くかかる。

3は、坏で器高4.2cmを測る。口唇部は外反して丸くとじる。底面はヘラ切りである。

4は、坏で器高3.8cmを測る。底面はヘラ切りした後、なで調整をしているが粗い。

5は、坏蓋の墨書土器である。口径12.8cm、器高2.8cm、宝珠柄み径2.1cmを測る。柄み横に墨書「公治印」と読める銘があるが不明確である。口唇部が尖ってとじる。

8は、高台付坏で内外面ロクロ回転によるなで調整をしている。8世紀前半のものである。

9、11は高台付坏で、口縁部で外反しつち立ち上がる。畳付が内傾して尖ってとじる。

10は、高台付坏で高台径8.7cmを測る。高台は外反し、畳付で尖ってとじる。

12は、坏蓋で口径14.3cm、器高3.4cmを測る。口縁部は直立し、口唇部で外反して丸くとじる。頂部は回転ヘラ削り、他はなで調整をしている。8世紀前半のものである。

13は、高台付坏で高台を貼付けている。内外面横なで調整をしている。

14は、脚つき坏で口径13.9cm、器高7.4cm、脚底径8.2cmを測る。全面的な調整がよく行われている。焼成時に坏部に歪みが生じている。部分的に自然軸がかかる。

第3表 須恵器一覽

番号	出土地点	器種	法 量 (cm)			胎土	焼成	色 調	形 態 の 特 徴
			口径	底径	器高				
1	C、18	高台付坏	11.2	7.8	3.5	精選	良	内面 黒灰色 外面 *	残存3/8高台高0.4cm。断面は長方形、体部内厚く、なだらかに立上る。
2	C、22	"	—	8.4	—	"	"	内面 灰色 外面 黒色	残存3/8高台高0.8cm。断面は尖台形、底部内厚く、体部はなだらかに立上る。
3	C、18	坏	12.8	8.6	4.2	"	"	内面 灰白色 外面 *	残存3/8口唇部が大きく外反し、丸味をもってとじる。
4	C、18	"	10.8	8.4	3.8	"	"	内面 灰黒色 外面 *	残存4/8全体に肉薄く、体部は直角に近く、急に立上り、底部に奥ゆきを感じる。
5	C、20	坏蓋	12.8	—	2.8	"	"	内面 灰黒色 外面 灰白色	完形つまみは、直径2cm、高さ0.6cm。扁平なつまみで、口唇部に小さなかえりあり。
6	C、21	高台付坏	11.0	8.0	3.2	"	"	内面 灰褐色 外面 *	残存4/8高台高0.3cm。断面は長方形、体部内厚く、口唇部やや外反してとじる。
7	D、23	"	13.0	9.0	4.3	"	"	内面 灰青色 外面 黒灰色	残存4/8高台高0.7cm。断面は長方形底部内厚く、体部は外反しつち立上る。
8	D、24	"	15.6	11.2	6.2	"	不良	内面 赤褐色 外面 *	残存7/8高台高1.0cm。断面平行四辺形、体部なめらかに直線的に立上る。
9	D、25	"	13.2	—	5.3	"	良	内面 灰青色 外面 *	残存6/8高台高0.5cm。高台内側を切り込み鬚鼻状にとじる。口唇部は外反する。
10	D、25	"	—	—	8.7	"	"	内面 乳灰色 外面 灰黒色	残存3/8高台高0.6cm。断面三角形、底部内厚く、なだらかに体部は立上る。
11	D、25	"	14.0	—	4.8	"	"	内面 灰青色 外面 乳白色	残存4/8高台高0.8cm。底部中央は、やや凹み体部は薄く、口唇部は外反する。
12	D、25	坏蓋	—	14.3	3.4	"	"	内面 灰黒色 外面 *	完形中央部は内厚く、口唇部のかえりは直角的に折曲し、丸味をもってとじる。
13	D、34	高台付坏	13.2	9.5	4.7	"	"	内面 灰黒色 外面 *	残存7/8高台高0.5cm断面は台形、体部は外反しつち直線的に立上る。
14	D、24	脚つき坏	13.9	8.2	7.4	"	"	内面 黒灰色 外面 *	完形脚高2.3cm、脚底8.2cm。坏部器高は高く重量感あり。

第2節 中世の遺構と遺物

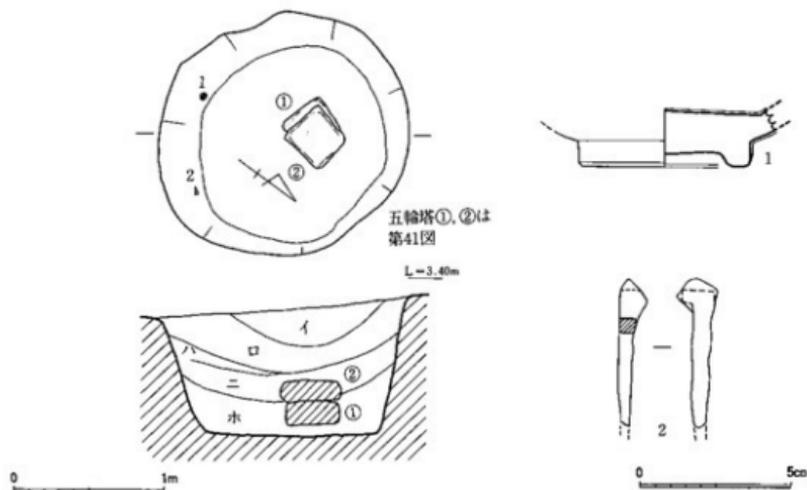
1. 遺構とそれに伴う遺物（第9図～第14図）

(1) 井戸（第9図）

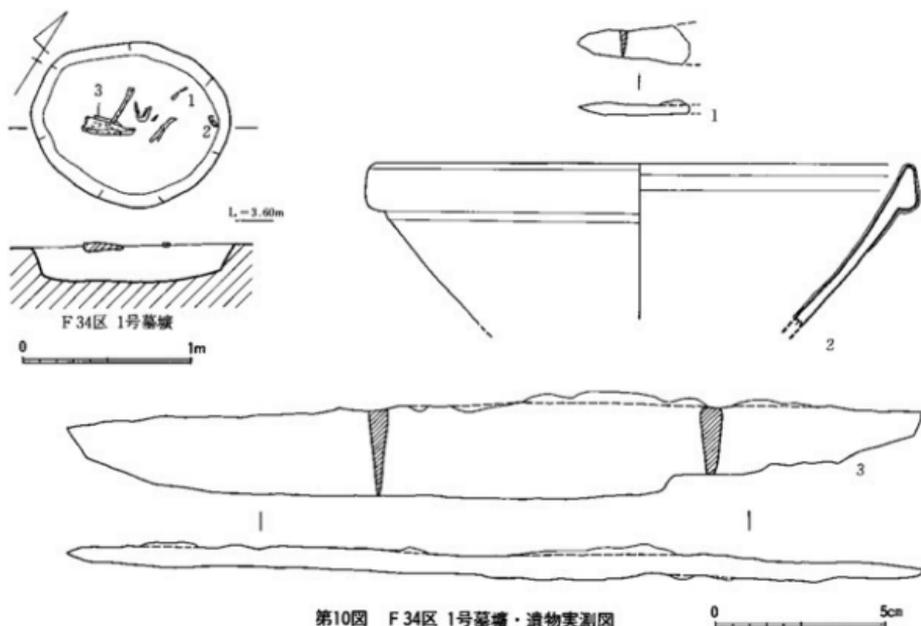
C16区の北端の新河道に突き出したように、大きなピットが発見され形態や内部の状況から井戸とみられた。

井戸はIVb層から掘り込まれているのが発見された。井戸掘方の上面は南北が1.7m、東西が1.6mを測り、平面形はほぼ円形をなす。掘り下げること新河道からの出水がひどくなり危険になってきたので0.9mを掘り下げた段階で中止した。そこを底面とする。底面の南北が1.3m、東西が1.2mを測り、平面形はほぼ円形をなす。半切して埋土の様子をみた。埋土は細かく5層に分層できた。イ、ロ、ハの層は第IV層（中世層）の全体的に黒っぽい灰色土の埋土層で、イの層はわずかに赤ブロック混じり、ロの層は青黒い色で、ハの層は青っぽい色を呈する。ニ、ホの層は第V層の土色と近似しているが、埋土層が、明青灰色を呈する。井戸の正確な深さは不明であるが、粘土質層まで掘りこんでおり、また、遺跡一帯は水位が高いためかなりの貯水能力があったものと思われる。井戸に木杵があった可能性もあるが確認できなかった。

井戸内から五輪塔の地輪1個、火輪1個（第41図）のほか青磁碗の高台部付近の破片と角釘などの中世の遺物が出土した。



第9図 C16区 井戸実測図



第9図の1、2は井戸から出土した遺物である。

1は、青磁碗（錦蓮弁文）で、高台部付近の破片である。高台高0.5cm、高台径5.7cm、高台脇にかすかに錦蓮弁文と解される文がのこる。軸葉は緑灰色を呈し、高台内以外は全面にかけられている。胎土は精選されているが、焼成がやや不十分である。13世紀～14世紀につくられている。

2は、長さ4.5cm、断面0.5cm方形の角釘である。

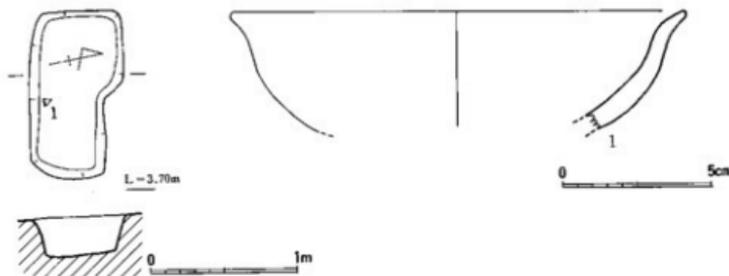
1、2ともに二層の出土である。

(2) 墓墳（第10図）

F34区からF35区にかけてピットが発見され、内部から人骨と副葬品が出土したために墓墳と断定した。

墓墳は、IV b層から掘り込まれていて、埋土はIV a層（中世層）に相当する土であった。墓墳掘方上面は、南北1.0m、東西1.2mで、底面は南北1.0m、東西0.8mを測り、平面形は上底面ともに楕円形をなす。深さは0.2mである。

人骨は下顎骨、大腿骨と骨盤部が出土した。男性の人骨で30代後半に怪我をして亡くなっている。副葬品は、刀子茎片1点、白磁碗1点、小刀1点が出土した。



第11図 E27区 1号土坑・遺物実測図

1は、現存長さ3.3cm、巾0.8cmの刀子茎片である。

2は、白磁碗（玉縁）で、体部から口縁部にかけて3/8残存している。

口径15.8cmを測り、軸葉は内面全面と外面は口縁から胴部中央部までかかり、淡灰色を呈する。胎土は精選されていて、焼成も十分であり、灰白色を呈する。口唇部外側面には下脹れ状断面をした玉縁がめぐり、玉縁下にはロクロ削りによる稜線がはいる。また、口唇内面には、わずかではあるがヘラ削り巾5mm程の凹線がある。

3は、小刀の完形品である。全長25.3cm、最大巾2.5cm、茎長さ7.4cmを測る。これらの出土遺物は、人骨と同じ高さから出土した。掘方上面と同じ高さである。

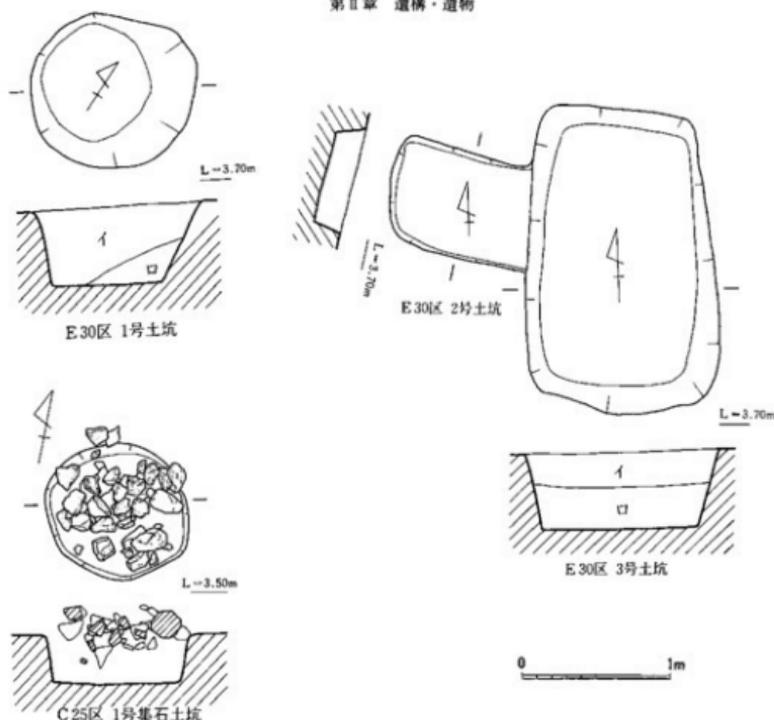
(3) 土坑および出土遺物（第11、12、13、14図）

土坑は13基あり、そのうち集石土坑1基が出土している。

E27区1号土坑（第11図）は、IVb層から掘り込まれていて、埋土はIVa層（中世層）に相当する土であった。掘方上面は、南北0.6m、東西1.1mで、底面は南北0.5m、東西1.0mを測り、平面形は長方形で北東部半分がややくぼみを呈する。深さは0.3mである。

床面から瓦質土器・碗が1点出土した。（第11図1）体部から口縁部にかけて1/8残存している。口径15.4cmをはかり、胎土は十分精選されている。体部は丸くふくらみをもたせ、内湾しつつ立ち上がり、口縁部で大きく外反する。口唇部ではゆるやかに丸みをもってとじる。器壁は全体的に厚く、口縁部で急に大きく外反するのを特徴としている。外面は灰黒色、内面は黒色を呈し、両面共にヘラ磨きが十分に施されている。

C25区1号集石土坑（第12図）は、IVb層から掘り込まれていて、埋土はIVa層（中世層）に、灰が少し混じった土である。掘方上面は、南北0.9m、東西1.0mで、底面は南北0.8m、東西0.9mを測り、平面形はほぼ円形を呈する。深さは0.4mである。礫は、拳ふたにぎり大で、同一面上に無造作に集積していた。遺物の出土はまったくなく、墓壇の疑いもあるが断定するに足るものがなく集石土坑とした。



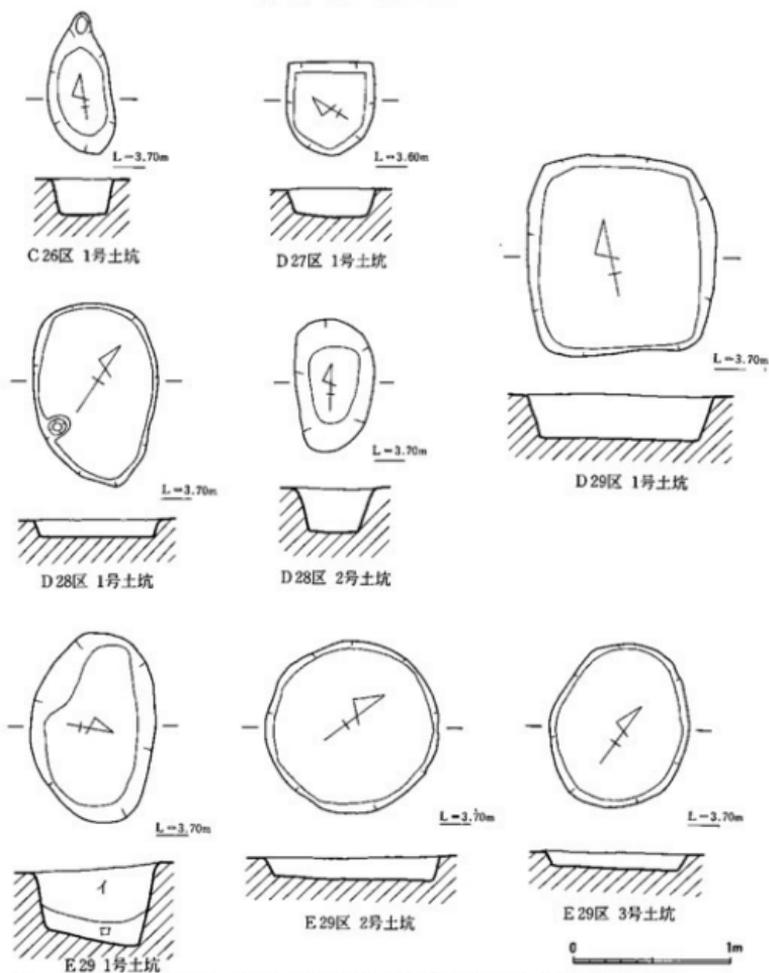
第12図 E30区 1号-2号-3号土坑, C25区 1号集石土坑実測図

E30区 1号土坑(第12図)は、IV b層から掘り込まれていて、埋土はIV a層(中世層)に相当するものである。イ層は黒灰色、ロ層は暗青灰色を呈する。掘方上面は、南北1.1m東西1.1mで、底面は南北0.8m東西0.7mを測り、平面形はほぼ円形を呈する。深さは、0.6mである。出土遺物はなし。

E30区 2号土坑(第12図)は、IV b層から掘り込まれていて、埋土はIV a層(中世層)に相当する。東部分を3号土坑に切られている。掘方上面は、南北0.7m、東西1.0mで底面は南北0.6m、東西0.95mを測り、平面形は長方形を呈する。深さは、0.2mである。出土遺物はなし。

E30区 3号土坑(第12図)は、IV b層から掘り込まれていて、埋土はIV a層(中世層)に相当するものである。イ層は黒灰色、ロ層は暗青灰色を呈する。掘方上面は、南北2.1m東西1.2mで、底面は南北1.7m、東西1.0mを測り、平面形は長方形を呈する。深さは0.5mで、イ層0.2m、ロ層0.3mである。3号土坑が2号土坑を切っており、わずかながら2号土坑が古いようである。出土遺物はなし。

第2節 中世の遺構と遺物



第13図 C26区 1号土坑, D27区 1号土坑, D28区 1号・2号土坑, D29区 1号土坑
E29区 1号・2号・3号土坑実測図

土坑8基(第13図)は、IVb層から掘り込まれていて、埋土はIVa層(中世層)に相当する。E29区1号土坑のみ2層に分層できる。土色はイ層は黒灰色、ロ層は暗青灰色を呈している。また、8基全ての土坑に遺物は発見されなかった。

C26区1号土坑は、南北0.9m、東西0.4mを測り、変形楕円をなす。北端に0.1m楕円の小穴を有する。深さ0.2mである。

D27区1号土坑は、南北0.6m、東西0.7mを測り、ホームベース形をなす。深さ0.2mである。

D28区1号土坑は、南北1.2m、東西0.8mを測り、楕円をなす。深さ0.1mである。南端に径0.1mの小穴を有する。

D28区2号土坑は、南北0.9m、東西0.5mを測り、楕円をなす。深さ0.3mである。

D29区1号土坑は、1.2mの方形をなす。深さ0.2mである。

E29区1号土坑は、南北0.8m、東西1.2mの楕円で、深さ0.5mである。

E29区2号土坑は、1.1mの円形をなす。深さ0.1mである。

E29区3号土坑は、南北1.1m、東西0.9mの楕円で、深さ0.1mである。

(第14図)は、遺構からの出土遺物である。

1は、2号溝から出土した白磁碗である。高台部付近のみの残存である。高台高0.2cm高台径7.3cmを測り、高台部分の成形が雑である。見込み中央部には、渦巻き状の小段差があり、器壁も厚い。釉薬は乳灰色を呈し、残存部分では内面のみ釉がかかっている。

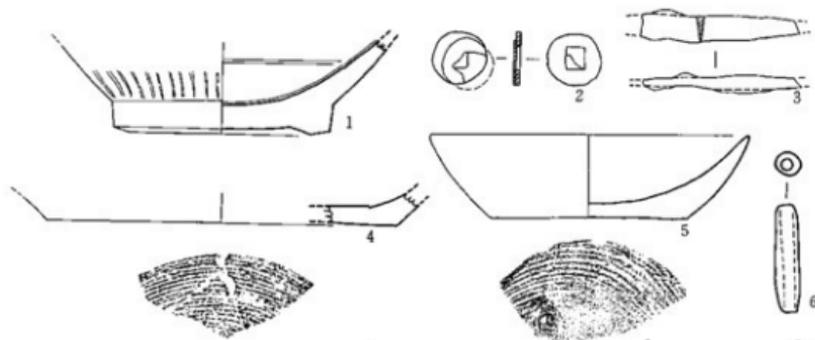
2は、3号溝から出土した鳩目鏡2点である。円径が1.7cm、孔径0.6cmの方形、厚さ0.1cmと0.05cmを測る。

3は、5号溝から出土した刀子茎片である。残存長さ5.3cmを測る。

4は、C22区P2から出土した土師質皿である。残存1/8で、底径11.8cmを測る。底部内面端部にわずかに段差をもうけている。美しい糸切り底である。

5は、C24区P1から出土した土師質皿である。残存1/4で、口径10.6cm、底径6.8cmを測る。体部は、ゆるやかに直線的に立ち上がる。口唇部はややとがりぎみにとじる。口唇内部にはロクロ回転による凹線が2条まわるが、図に表すほど明確ではない。底部中央の器壁は薄く、端部から立ち上がり部分にかけて肥厚している。

6は、E27区P3から出土した土師質の土鍾である。長さ3.75cm、最大外径1.1cm、孔径0.3cm、重量4.1gで灰褐色を呈する。



第14図 2号・3号・5号溝, C22区P2, C24区P1, E27区P3 出土遺物実測図

2. 青磁・白磁（第15図～第19図）

御幸木部遺跡から出土した青磁・白磁の完形および器片は、総数120点にのぼる。青磁は75点、白磁は45点の出土で、作図掲載したのは青磁54点、白磁30点の合計84点であった。青磁碗48点、青磁皿5点、青磁盤1点の54点。白磁碗16点、白磁皿14点の30点。IV a層（中世層）からの出土であった。

（第15図 1～7は青磁碗、8～10は青磁皿である。）

1は、高台径5.1cm、見込み内底端がヘラ彫りされ径4.8cmのテーブル状をなす。中央部分にやや凹みがみられる。内面に櫛描文とヘラ描文が施されていて、外面にも櫛彫り条文がみられる。緑灰色の透明釉で、高台、高台ぎわは露胎を呈する。同安窯系である。

2は、高台径5.2cm、見込み内底のテーブル直径4.4cmで、中央部分に凹みあり。内面に櫛描文とヘラ描文あり、青灰色の釉で、高台付近は露胎を呈する。焼成がやや不十分である。同安窯系である。

3は、高台径4.9cm、見込み内底のテーブル直径4.6cmで、中央部分に凹みあり。内面に櫛描文とヘラ描文、外面に6列の櫛彫り条文がある。高台部の成形が雑である。青灰色の透明釉である。高台付近は露胎を呈する。同安窯系である。

4は、高台径5.2cm、見込み内底のテーブル直径4.9cmで、中央部分にやや凹みあり。内面に櫛描文とヘラ描文、外面に櫛彫り条文がある。青緑色の釉で、大変に薄い。高台部は露胎を呈する。同安窯系である。

5は、高台径5.0cm、見込み内底中央部分は平坦である。内面に櫛描文とヘラ描文、外面に櫛彫り条文がある。青白色の透明釉で、高台は露胎を呈する。同安窯系である。

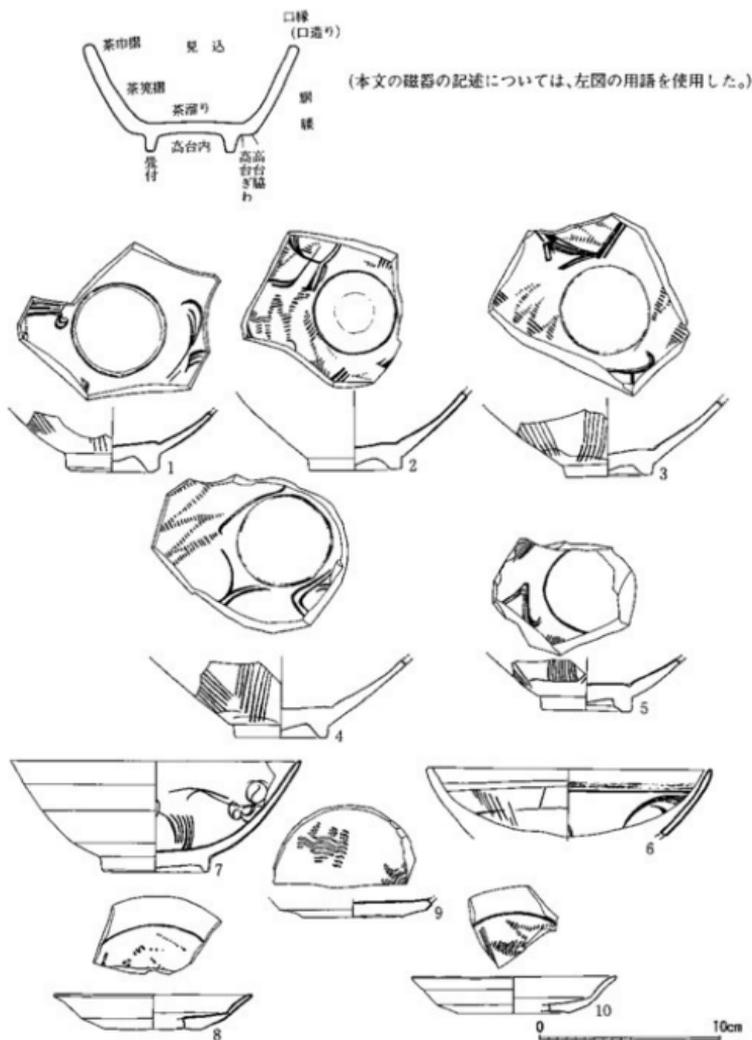
6は、口径15.8cm、内面にヘラ描文、外面に櫛彫り条文がある。口縁内側に一条の沈線がまわる。青緑色の透明釉である。同安窯系である。

7は、口径16.2cm、高台径6.0cmを測り、内面に櫛描文とヘラ描文がある。体部は、ゆるやかに直線的に立ち上がり尖りぎみにとじる。口唇部内面に一条の浅い凹線が回る。緑灰色の透明釉で、高台内は露胎を呈する。同安窯系である。

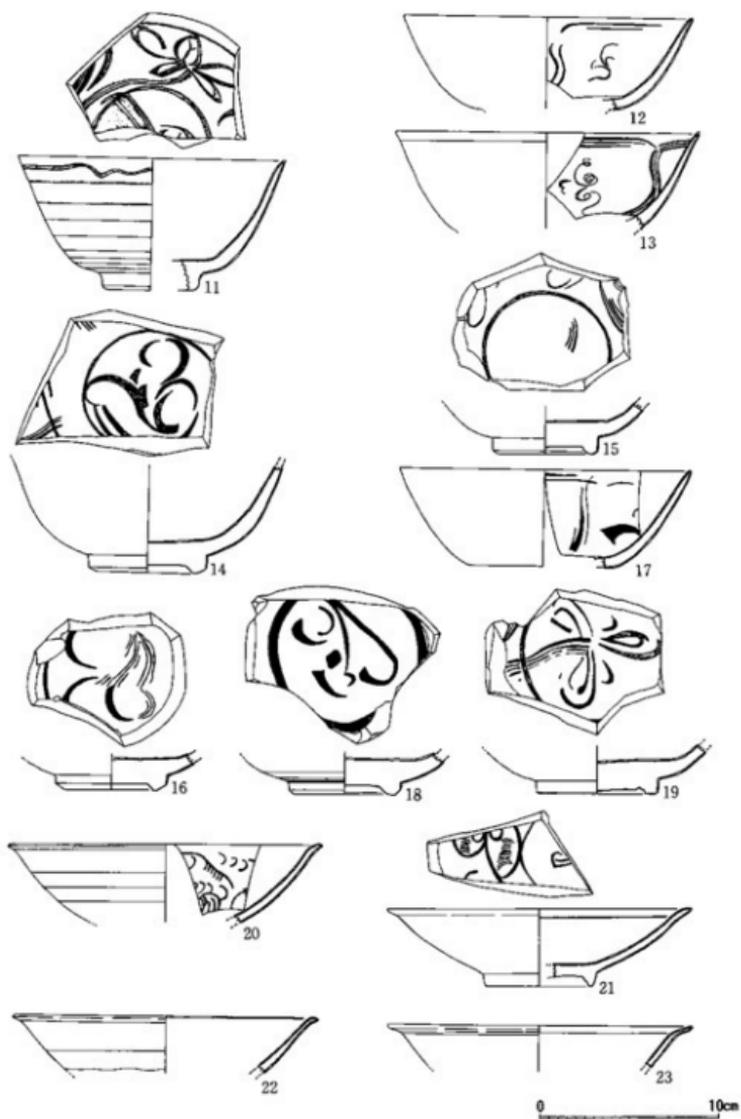
8は、口径11.0cm、底径5.4cmを測る平底青磁皿である。見込み内底には、櫛歯によるピンホール文様の櫛描文がある。緑乳灰色の不透明釉である。底部は、施軸後削り取り露胎を呈している。焼成は不十分である。同安窯系である。

9は、見込み内底に櫛描文がある。青緑色の透明釉である。底部は、施軸後削り取り、露胎を呈し、中央部はゆるやかな凸状曲線を描く。同安窯系である。

10は、口径11.4cm、底径6.2cmを測る平底青磁皿である。見込み内底に櫛描文とヘラ描文がある。緑灰色の透明釉である。底部は、施軸後削り取り、露胎を呈し、端に一条の沈線がまわる。



第15図 青磁・白磁実測図 (1)



第16図 青磁・白磁実測図(2)

同安窯系である。

(第16図 11～19は青磁碗、20～23は白磁碗である。)

11は、口径15.0cm、高台径5.4cmの青磁碗である。見込みには、ヘラ描きによる画花文がある。青白色の透明釉で、高台内以外は全面釉である。竜泉窯系である。

12は、口径16.2cmの青磁碗である。見込み側面にヘラ描きによる画花文がある。酸化気味のため黄灰色を呈し、全面に貫乳がはいっている。竜泉窯系である。

13は、口径17.0cmの青磁碗である。見込み側面にヘラ描きによる画花文がある。濃緑灰色の透明釉で、若干貫乳がはいる。竜泉窯系である。

14は、高台径6.5cm、見込み内底に片切彫りの画花文があり、側面にも面花文がみられる。緑灰色の釉で、若干貫乳がはいる。底部が肥厚している。竜泉窯系である。

15は、高台径5.8cm、見込み内底と側面にヘラ描きによる画花文がある。緑灰色の不透明な釉で、高台内以外は全面釉である。底部が肥厚している。竜泉窯系である。

16は、高台径6.1cm、ロクロを使用して高台を削りだしている。見込み内底には片切彫り、ヘラ描きの画花文がある。緑灰色の不透明な釉で、高台内以外は全面釉である。底部が肥厚している。竜泉窯系である。

17は、口径16.2cmの青磁碗である。見込み側面にヘラ描きの画花文があり、緑灰色の透明釉である。竜泉窯系である。

18は、高台径6.3cmの青磁碗である。見込み内底に片切彫りの画花文がある。見込み内底径は、8.4cmの水平面である。窯道具の跡がみられる。青白色の透明な釉で、高台内以外は全面釉である。竜泉窯系である。

19は、高台径6.3cmの青磁碗である。見込み内底に片切彫り、ヘラ描きの画花文がある。ロクロを使用して高台を削りだしている。高台内の端に0.2cmの削りがまわる。青灰色の透明釉で、高台内以外は全面釉である。竜泉窯系である。

20は、口径17.5cmの白磁碗である。体部は外傾して立ち上がり、口縁部で折れて外反する。見込み側面に櫛、ヘラを使用して線刻している。乳灰色の釉である。

21は、口径17.0cm、高台径6.0cmの白磁碗である。体部は外傾して口縁部で外に折れ口唇部で外反する。乳灰色の釉で、高台部以外は全面釉であり、焼成は不十分である。

22は、口径17.0cmの白磁碗である。口唇部が大きく外反する。乳白色の釉である。

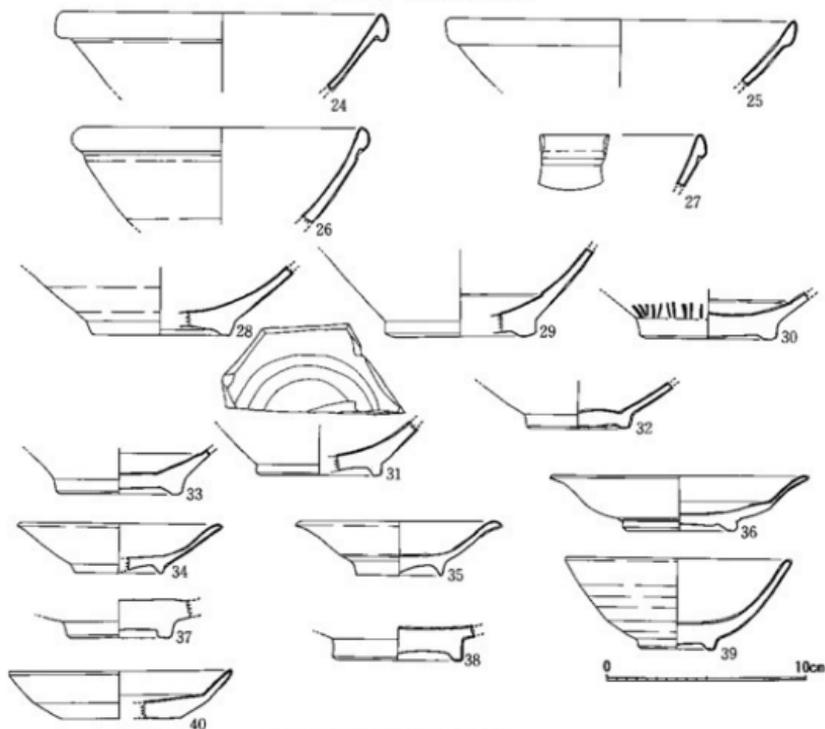
23は、白磁碗で、口縁部、口唇部が外に大きく折れて外反する。乳白色の釉である。

(第17図 24～32は白磁碗、33～36は白磁皿、37～39は青磁碗、40は青磁皿である。)

24は、口径16.0cmの白磁碗である。口唇部外側面には下脹れ状断面をした玉縁がめぐり、玉縁下にはロクロ削りによる稜線がはいる。緑灰色の透明釉である。

25は、口径17.4cmの白磁碗である。24と同じ玉縁がめぐるが、玉縁下のロクロ削りの稜線が

第2節 中世の遺構と遺物



第17図 青磁・白磁実測図(3)

不明確にはいる。乳白色の釉である。

26、27も同じ玉緑の白磁碗で、乳白色の釉である。

28は、高台径7.0cmの白磁碗で、体部はなめらかに外傾しながら立ち上がる。高台内は浅い。緑灰色の釉である。

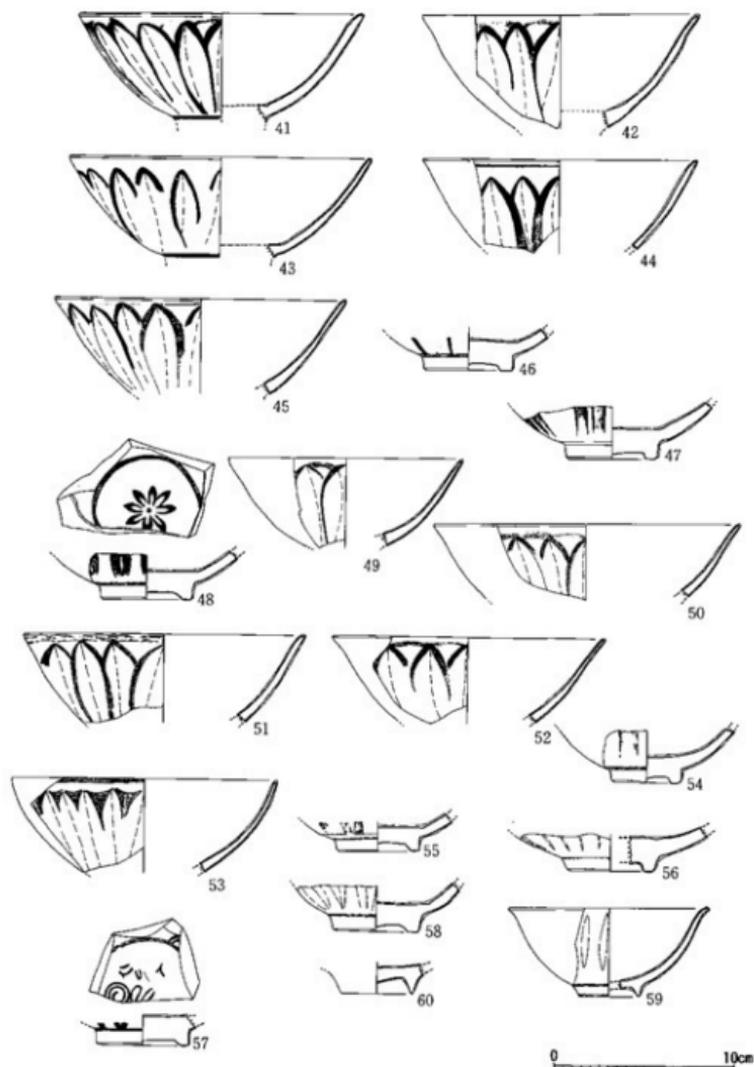
29、30は、底部残存の白磁碗である。30は、高台脇にヘラ刻目文がある。

31は、高台径6.2cmの白磁碗である。施釉後高台内底を輪状に削り取っている。ただ外輪は、焼成時に釉が溶け込んでいるために不明確である。窯道具の跡が若干みられる。

32は、全体的に器壁は薄い。見込み内底の茶溜り部は径4cmの凸状を呈する。乳灰色の不透明釉で、全面釉の白磁碗である。

33は、高台径6.3cm、緑灰色の透明釉の白磁皿である。

34、35は、口径10.0cmの白磁皿である。施釉後、見込み内面を輪状に削り取っている。体部は外傾し、口唇部で外反する。緑白色の不透明釉である。



第18図 青磁・白磁実測図(4)

36は、口径12.6cm、高台高0.5cmの還元気味の紺白色を呈する。見込み内底は輪状に削り取っている。高台は、削り出しが雑にされていて小段差がある。焼成は不十分。

37、38は、緑灰色の釉の青磁碗である。38は高台内に窯道具の跡がみられる。

39は、口径11.0cmで、緑白色の不透明釉が全面にかかる青磁碗である。

40は、口径11.0cm、底径6.0cmで、淡緑白色の透明釉の平底青磁皿である。底部は、施釉後削り取り、露胎を呈する。胎土は、小砂粒が混じる粗精選である。

(第18図 41～60は青磁碗)

41は、口径16.0cmで鑄が高い蓮弁文を有する青磁碗である。体部は内弯しつつ立ち上がり、口唇部で外反してとじる。酸化気味のため黄灰色を呈し、透明釉である。

42は、口径15.4cmで大変に鑄が高く断面図で一目瞭然である。釉は青緑色である

43は、口径16.8cmで鑄が高い蓮弁文を有する青磁碗である。釉は緑灰色である。

44は、口径15.2cmで鑄の低い蓮弁文を有する青磁碗である。体部は、内弯しつつ立ち上がる。口唇部外面がわずかに脹らむ。黄灰色の透明釉である。

45は、口径16.4cmで鑄が大変に高い蓮弁文で、口唇部外面がわずかに脹らむ。

46は、底部が大変に肥厚していて、削りだし高台は安定している。高台脇に蓮弁文が見られる青磁碗である。明青白色の透明釉で厚い。

47は、高台径5.21cmで底部は肥厚している。濃緑灰色の不透明釉である。

48は、見込み内底に美しい印花文がある。明青白色の透明釉で厚い。

49は、鑄は低いが鮮やかな蓮弁文である。暗黄灰色の釉で貫乳がはいる。

50は、鑄の高い蓮弁文で口唇部の外面に脹らみが見られる。黄灰色の不透明釉である。

51、52は、高い蓮弁文があり、口唇部外面がやや脹らむ。透明の美しい釉である。

53は、口径14.8cmで鑄の低い細蓮弁文である。体部は、大きく内弯しつつ口縁部で急に直立する。口唇部は、細く丸くとじる。黄灰色の不透明釉である。

54、55は、高台脇で蓮弁文が確認されるが、鑄は見られない。青白色の透明釉で高台内以外は釉がかかっている。高台内に窯道具の跡が見られる。54の底部は肥厚している。

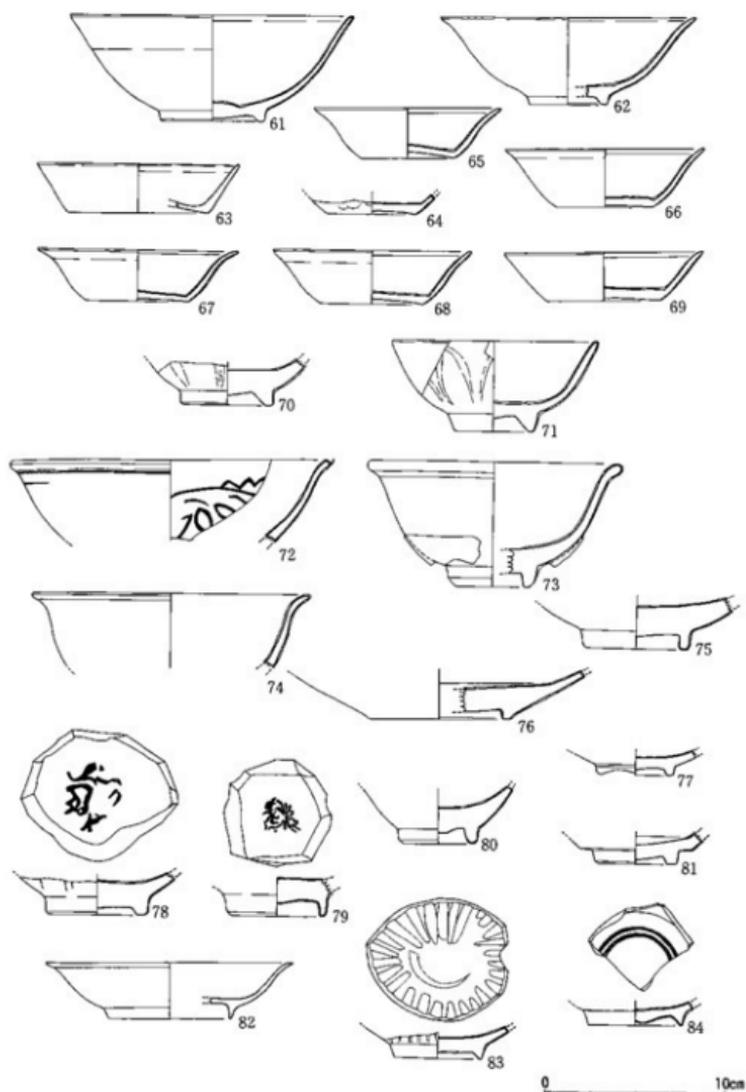
56は、高台脇まで鑄が明確にある。明黄灰色の透明釉である。

57は、削りだし高台で径5.2cmを測る。底部は肥厚していて、見込み内底に印花文がある。高台脇にかすかに蓮弁文が確認できる。青白色の透明釉である。

58は、鑄が高台脇まで明確で、高台内に窯道具の跡がある。明青白色の厚い釉である。

59は、口径11.0cm、高台径3.9cmを測る。器壁は薄い。体部は内弯しつつ、口縁部で外反する。全体に厚い釉がかかり、施釉後疊付のみ削り取り無釉である。

60は、高台径4.0cmの青磁碗である。明青白色の厚い釉がかかるが、貫乳がはいる。施釉後疊付のみ削り取り無釉である。焼成がやや不十分である。



第19図 青磁・白磁実測図 (5)

第2節 中世の遺構と遺物

(第19図 61・62白磁碗、63～69は白磁皿、70～75は青磁碗、76青磁盤、77白磁皿、78～80は青磁碗、81青磁皿、82・83白磁皿、84白磁碗)

61、62は、施釉後口唇部の内外面を削り取った口はげ碗である。器壁は全体的に薄く、体部は外傾しつつ立ち上がり、口縁部で外反する。乳白色で、62は全面釉である。

63は、施釉後口唇部の内外面を削り取った、口はげの平底白磁皿である。体部は直線的に立ち上がり、口唇部は角張ってとじる。白色の不透明釉である。全面釉である。

64は、底部のみ残存で、底径5.0cmの乳白色の平底白磁皿である。体部外面には、釉の溶解凝固がみられる。

65～69は、同形の口はげの平底白磁皿である。施釉後底部を削り取っているが、若干釉がかかる。67は、口縁部が大きく外反する。

70は、高台径4.9cmで、底部は肥厚している。高台脇には、ヘラ描きの連弁文がみられる。見込み内底を施釉後に4.6cmの円形に削り取っている。また、その部分に焼成時に上重ねた磁器の畳付の付着痕が見られる。青白色の透明釉である。

71は、口径11.2cmで、体部にヘラ描きの蓮弁文がみられる。高台内に深い削りがあり、窯道具痕がみられる。青白色の透明釉である。

72は、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反する。口唇部外面に断面半円の縁がまわり、その下をロクロ削りしている。見込み内面にヘラ描き文がはいる。

73は、口径14.0cmで器壁は厚い。高台脇に焼成時の隣接磁器の釉が付着している。見込み内底を施釉後削り取っている。濃緑灰色の厚い釉で貫乳がみられる。

74は、青緑色の厚い釉の無文青磁碗である。口縁部が大きく外反して、丸くとじる。

75は、肥厚した底部のみ残存しており、見込み内面に印花文をかすかに識別できる。

76は、緑灰色の透明釉の青磁盤である。焼成が不十分であり、貫乳がはいる。

77は、高台は削りだして4.3cmを測る。高台の4ヶ所をヘラ切りした切高台の白磁皿である。乳灰色の薄い釉がかかっている。

78は、見込み内底に印花文を有する青磁碗である。高台脇に蓮弁文が確認できる。

79は、見込み内底に印花文があり、高台が大変に高い。高台内に窯道具の付着の跡が見られる。緑灰色の透明釉で全面にかかる。胎土は粗い。

80は、図に表せないが、体部外面に剣先蓮弁文を確認できる。緑灰色の青磁碗である。

81は、綾花形の青磁皿である。施釉後見込み内底を円形に削り取っている。

82は、景德鎮、端反の白磁皿である。高台は高く、畳付は無釉である。器壁は薄い。体部は外傾しつつ口縁部で大きく外反する。鮮やかな白色の釉である。

83は、内外面にヘラ彫りの文様がある。緑灰色の白磁皿である。畳付部がやや尖る。

84は、見込み内底と高台脇に染め付の円線がはいる。福建省の染付白磁皿である。

第二章 遺構・遺物

第4表 青磁・白磁一覽(1)

遺物番番	出土地点	器 種	法 量 (cm)			胎 土	色 調	備 考
			口 徑	器高	底徑高台徑			
1	B、-3	青・碗	—	—	5.10	精選	綠灰色	12C~13C 阿安窯系
2	B、-2	"	—	—	5.20	"	青灰色	"
3	B、-2	"	—	—	4.90	"	"	(軸超薄)
4	C、2	"	—	—	5.20	"	青綠色	" ()
5	C、5	"	—	—	5.00	精選 炭化物少★濃	青白色	" ()
6	B、0	"	15.80	—	—	精選	青綠色	"
7	F、37	"	16.20	6.20	6.00	"	綠灰色	"
8	C、-3	青・皿	11.00	2.00	5.40	"	"	(燒成不良)
9	B、-1	"	—	—	5.70	"	青綠色	"
10	C、0	"	11.40	2.10	6.20	"	綠灰色	"
11	B、-2	青・碗	15.00	7.40	5.40	"	青白色	12C~13C 阿安窯系
12	B、-2	"	16.20	—	—	"	黃灰色	"
13	B、-1	"	17.00	—	—	"	濃綠灰色	"
14	B、0	"	—	—	6.50	粗精選	綠灰色	(重量感)
15	A、3	"	—	—	5.80	精選	"	()
16	B、3	"	—	—	6.10	"	"	()
17	B、4	"	16.20	—	—	"	"	"
18	B、5	"	—	—	6.30	"	青白色	(重量感)
19	D、31	"	—	—	6.30	"	青灰色	" ()
20	B、-1	白・碗	17.50	—	—	"	乳灰色	12C~13C (見込線則)
21	E、34	"	17.00	4.40	6.00	"	"	" ()
22	D、21	"	17.00	—	—	"	乳白色	(口縁外反急)
23	F、34	"	—	—	—	粗精選	"	12C~13C
24	C、8	"	16.00	—	—	"	綠灰色	12C~13C
25	D、31	"	17.40	—	—	特選	乳白色	12C~13C
26	E、33	"	14.00	—	—	粗精選	"	(軸超薄)
27	E、33	"	—	—	—	精選	"	"
28	D、31	"	—	—	7.00	粗精選	綠白色	12C~13C
29	E、31	"	—	—	7.80	"	乳白色	12C~13C (軸超薄)
30	F、33	"	—	—	6.80	"	綠白色	" ()
31	A、-3	"	—	—	6.20	精選	乳白色	12C~14C
32	D、31	"	—	—	5.20	粗精選	乳灰色	"
33	G、35	白・皿	—	—	6.30	"	綠白色	"
34	F、34	"	10.00	2.50	4.40	"	"	"
35	F、34	"	10.00	2.70	4.40	"	"	(完形)
36	一括	"	12.60	2.80	5.50	精選	紺白色	(燒成時変色大)
37	D、30	青・碗	—	—	6.10	"	綠灰色	12C~13C
38	B、-1	"	—	—	5.20	"	"	"
39	D、32	"	11.00	4.60	3.70	"	綠白色	"
40	E、32	青・皿	11.00	2.40	6.00	粗精選	淡綠白色	(軸超薄)
41	B、-3	青・碗	16.00	—	—	"	黃灰色	13C~14C (縁が明確)
42	B、-2	"	15.40	—	—	"	青綠色	" ()

第2節 中世の遺構と遺物

第5表 青磁・白磁一覽(2)

遺物 番号	出土地点	器 種	法 量 (cm)			胎 土	色 調	備 考
			口 径	器高	底径高台径			
43	B, -1	青・碗	16.80	—	—	精選	緑灰色	13C~14C (縁が明確)
44	B, 0	"	15.20	—	—	"	黄灰色	" (")
45	B, 2	"	16.40	—	—	"	青白色	" (")
46	C, 24	"	—	—	5.10	粗精選	明青白色	"
47	B, -3	"	—	—	5.20	"	濃緑灰色	" (重量感)
48	D, 31	"	—	—	5.10	精選	明青白色	" (見込に印花紋)
49	D, 28	"	13.20	—	—	"	暗黄灰色	" (縁が明確)
50	D, 31	"	17.00	—	—	"	黄灰色	" (")
51	D, 31	"	15.60	—	—	粗精選	明青白色	" (")
52	E, 31	"	15.20	—	—	精選	暗黄灰色	" (")
53	D, 32	"	14.80	—	—	"	黄灰色	" (")
54	B, -1	"	—	—	3.90	"	青白色	"
55	F, 38	"	—	—	4.70	"	明青白色	" (軸厚め)
56	C, 0	"	—	—	4.90	"	明黄灰色	" (縁が明確)
57	F, 33	"	—	—	5.20	粗精選	青白色	13C~14C (見込に印花紋)
58	G, 40	"	—	—	4.80	精選	明青白色	" (縁が明確・軸厚め)
59	D, 31	"	11.00	5.00	3.90	"	青白色	13C~14C半
60	B, 14	"	—	—	4.00	"	明青白色	14C頃
61	B, -1	白・碗	15.80	5.90	5.90	"	乳白色	13C~14C (口はげ)
62	B, 0	"	14.20	4.90	4.30	"	"	" (")
63	C, 0	白・皿	11.20	2.70	7.80	"	白色	" (口はげ・外側全面軸)
64	D, 31	"	—	—	5.00	"	乳白色	" (口はげ)
65	D, 31	"	10.40	2.80	5.70	"	"	" (口はげ・外側全面軸)
66	D, 31	"	11.20	3.30	5.30	"	乳灰色	" (口はげ)
67	D, 31	"	11.20	2.90	5.80	"	"	" (")
68	D, 31	"	11.00	3.00	5.80	粗精選	"	" (口はげ・外側全面軸)
69	E, 31	"	10.80	2.70	6.20	"	"	" (")
70	C, 4	青・碗	—	—	4.90	"	青白色	14C後~15C前 (底部中央無軸)
71	B, 3	"	11.20	5.10	4.40	"	"	"
72	B, 4	"	17.60	—	—	精選	青灰色	14C後~15C中
73	C, 5	"	14.00	7.00	4.40	粗精選	濃緑灰色	" (底部超厚)
74	一括	"	15.60	—	—	精選	明青緑色	" (軸超厚)
75	B, -1	"	—	—	5.80	粗精選	緑灰色	14C末~15C中 (底部超厚)
76	B, -8	青・ぼん	—	—	8.00	精選	"	" (")
77	B, 1	白・皿	—	—	4.30	粗精選	乳灰色	15C (切高台)
78	C, 20	青・碗	—	—	5.70	"	青灰色	14C後~15C中 (見込に印花紋)
79	B, -7	"	—	—	5.70	"	緑灰色	14C末~15C中
80	B, 7	"	—	—	4.30	"	"	15C後~16C中 (見込底部超厚)
81	一括	青・皿	—	—	4.60	精選	濃緑灰色	15C中~16C前
82	B, 7	白・皿	13.80	3.20	6.80	"	白色	16C (外側全面軸)
83	C, -6	"	—	—	4.90	"	緑白色	16C
84	C, 20	白・碗	—	—	5.20	粗精選	乳白色	16C中~16C末 (染付け全面軸)

3. 須恵質土器・土師質土器 (第20図～第24図)

(1) 須恵質土器 (第20図)

須恵質土器は5点の出土をみた。(皿1点、高杯1点、すり鉢1点、甕1点、長胴壺1点)

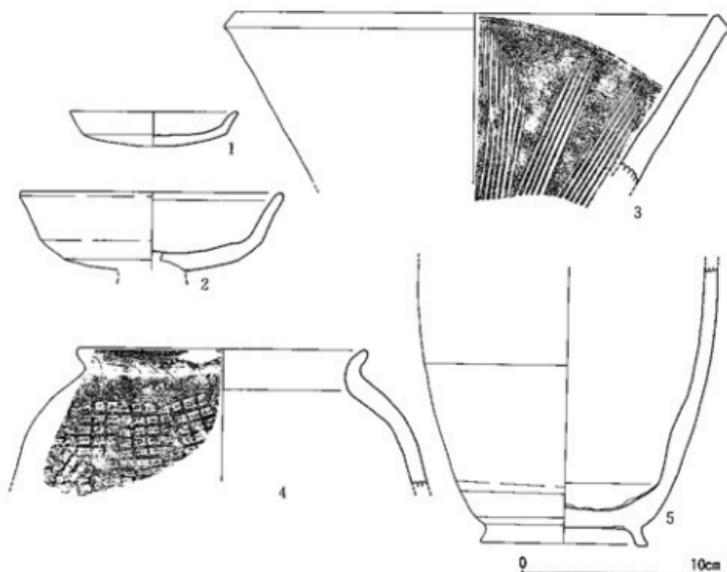
5点はIVa層(中世層)からの出土であった。

1は、口径9.4cm、器高1.9cmを測る。ひずみが大変にはげしく、平面形は、やや楕円を呈する。底部は成形が全くなく、内底は成形後へら削りしている。胎土は精選されているが、焼成がやや不十分である。色調は灰白色の須恵質皿である。

2は、口径14.7cmの脚部欠損の高杯である。坏部底部はロクロ回転のへら削りが顕著にみられる。体部は外反ぎみに立ち上がり口唇部で大きく丸くとじる。胎土は細砂粒を多く含む。焼成はやや不十分である。色調は、内外面ともに灰黒色を呈する。

3は、口径27.2cm、内面に6条の条痕がはしるすり鉢である。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良好である。色調は、内外面ともに黒灰色を呈する。

4は、口径16.2cmの口縁部残存の甕である。胎土は極細砂粒を含む。焼成は良好である。色調は内外面ともに灰黒色を呈する。口縁部から頭部にかけて煤が付着している。



第20図 須恵質土器実測図

第2節 中世の遺構と遺物

5は、残存高15.7cmの長胴壺である。胴部に2列、方形の圧痕がめぐる。胎土は細砂粒を含む。焼成は良好である。色調は、外面灰緑褐色、内面灰色を呈する。

(2) 土師質土器 (第21図～第24図)

多数の土師質土器の出土を見たが、底部が明確に糸切りされていて、作図掲載できたのが60点であった。これらの土器は、すべてIV a層(中世層)からの出土であった。

また、これらの土師質土器の法量を表にしたものが第6表・第7表である。一覧してみると大きく3形態に分類できる。皿、坏、大型坏である。

土器番号1～25は土師質皿、26～58は土師質坏、59は袖珍土器の壺、60は鉢である。

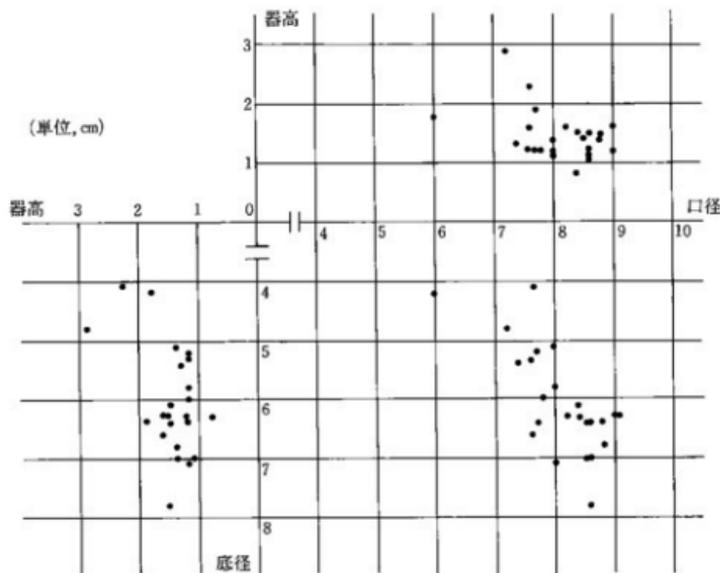
土師質皿の口径は6.0cm～9.0cm、底径は4.1cm～7.8cm、器高0.8cm～2.9cmの範囲にある。

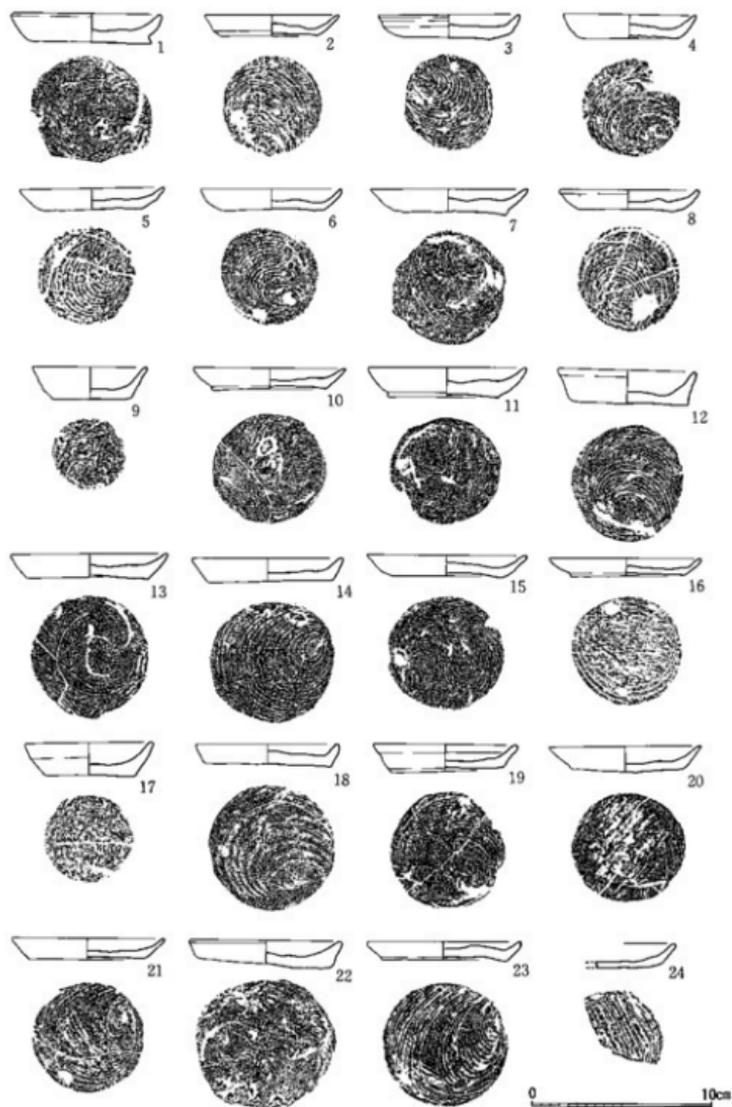
9は、口径6.0cm、底径4.2cm、器高1.8cmを測り、17は、口径7.2cm底径4.8cm、器高2.9cmを測る。また、25は、口径7.6cm、底径4.1cm、器高2.3cmを測る。この3点に共通していることは、他の土師質皿と比較すると底径が小さく器高がやや高いと言うことである。特に17の器高は2.9cmと高い。また、9と25の底径は小さい。これら3点の土器は、皿よりも小杯と考えられる。

22は、口径8.6cm、底径7.8cm、器高1.5cmを測り、底径が他の土師質皿よりも大きい。

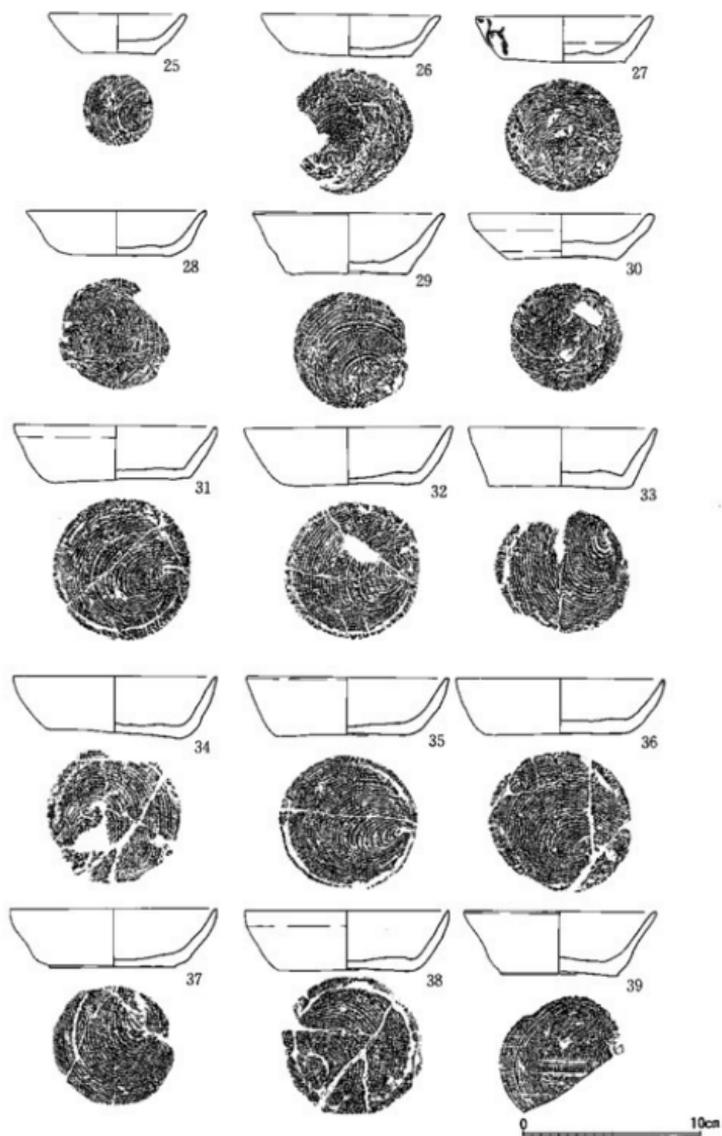
15、16、19、23の土師質皿は底部が著しく凸状になっているのが見られる。

第6表 土師質土器法量表(1)





第21圖 土師質土器実測圖(1)



第22図 土師質土器実測図(2)

土師質皿の13/25、約50%の皿の一部に煤の付着が見られ、灯明皿として使用されていたものではないかと考えられる。

20、21、24の底部には板目圧痕文がみられる。

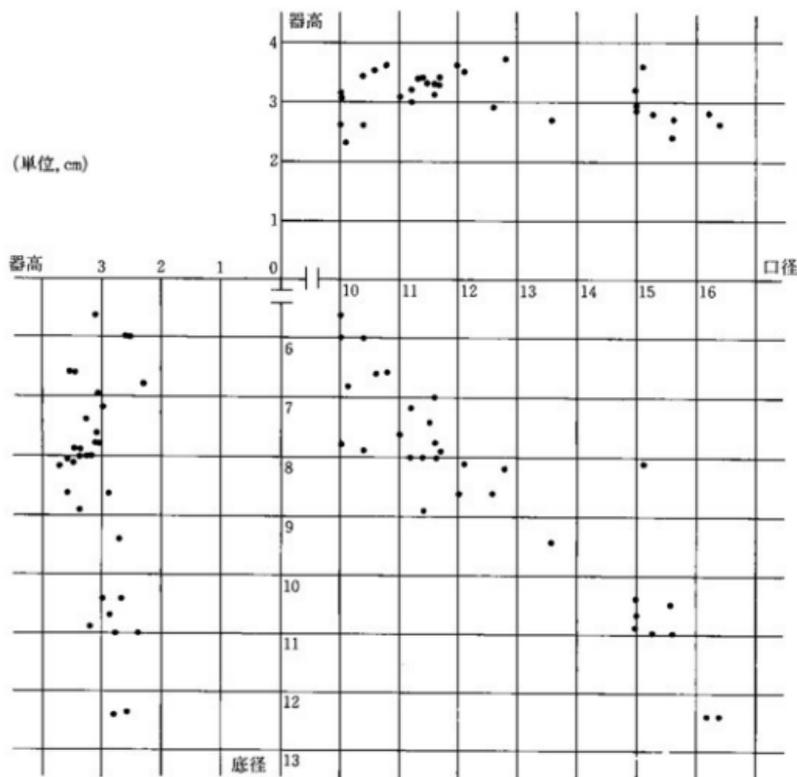
1、7、11、12、17、18、22の土師質皿の底部は肥厚して安定感をもっており、22は体部まで肥厚している。

1、10、13は、底部内面にロクロ回転による渦巻状の凸凹がはいっている。

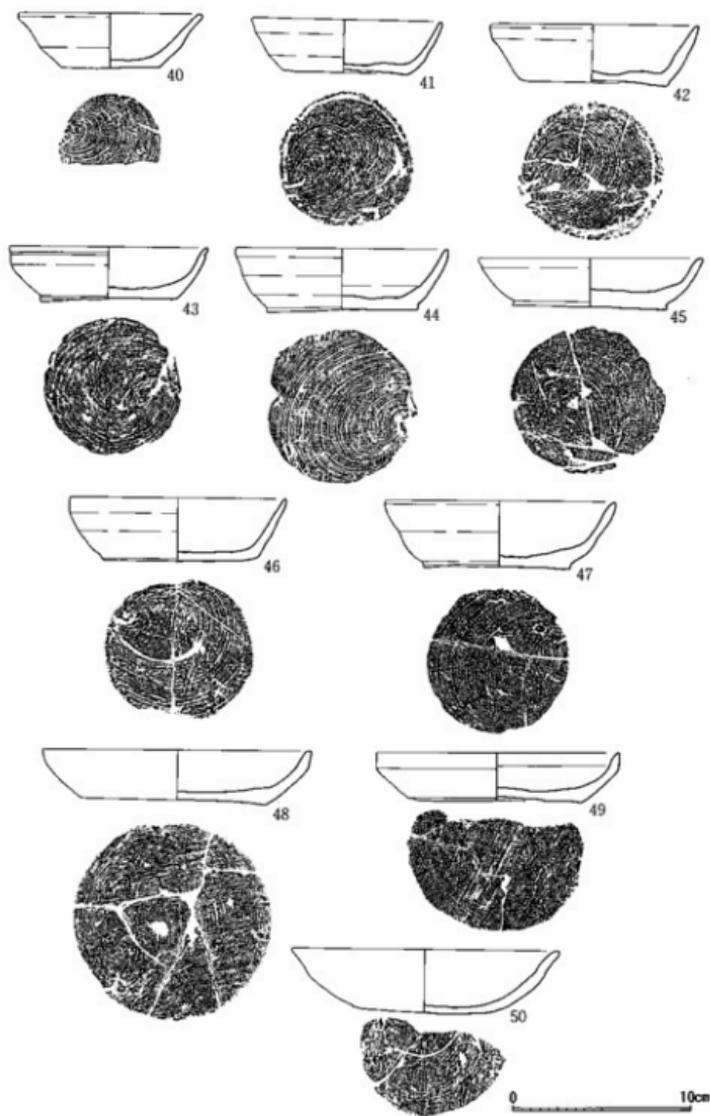
土師質土器法量表(2)では、法量にばらつきが見られるが、2つのまとまりが表から見てとれる。底径は上下限の差が著しい。

土師質坏26~58の口径は10.0cm~16.4cm、底径5.6cm~12.4cm器高2.3cm~3.7cmの範囲にあるが、その上下限のはばは大きい。そこで、この土師質坏を2分類して、坏と大型坏にした。

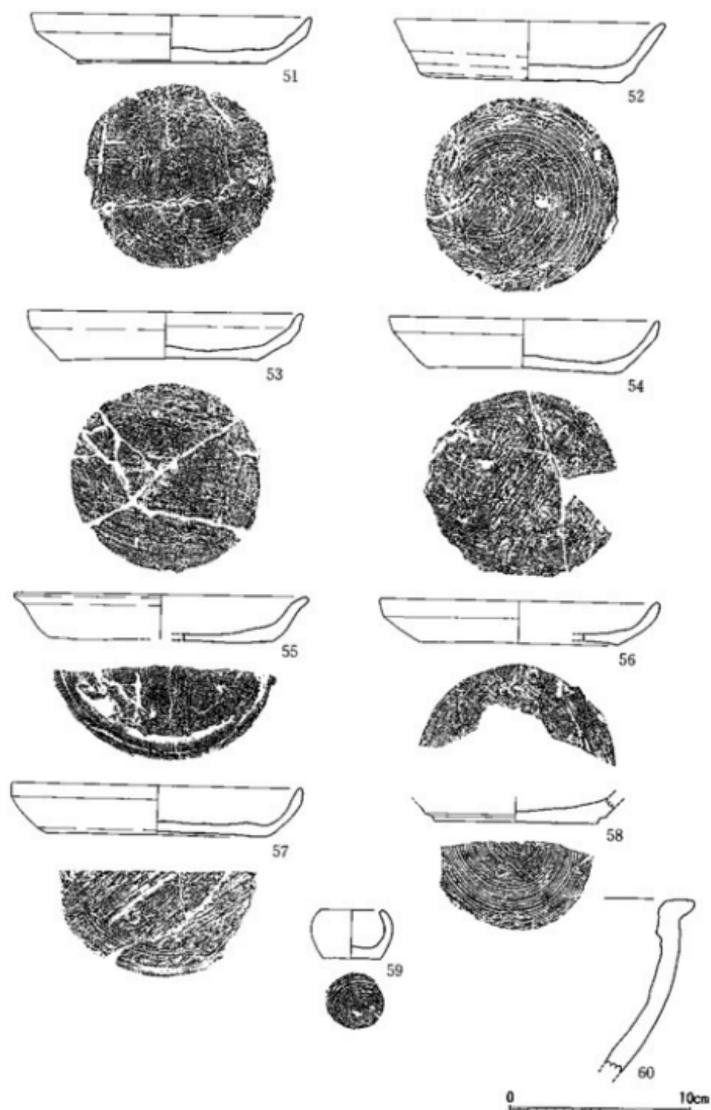
第7表 土師質土器法量表(2)



第2節 中世の遺構と遺物



第23図 土師質土器実測図(3)



第24図 土師質土器実測図(4)

大型坏は口径15.0cm以上の48、50、51、52、53、54、55、56、57の9点である。このなかでも55と57は口径16.0cm以上の特大坏である。

50は、大型坏のなかでも、口径15.1cm、底径8.1cm、器高3.6cmで底径が小さい。これは底面がゆるやかな碗状の曲線になっているために、底面径が小さくなっているのである。

49は、口径13.6cm、底径9.4cmと中間的な坏である。

55と57は、特大坏である。55は口径16.4cm、底径12.4cm、器高2.6cmを測る。57は口径16.2cm、底径12.4cm、器高2.8cmを測る。口径、底径が群を抜いて大きい。底径は大型坏より、1.5cmをこえる大きさである。

43は、口唇部外面に1mm深さの一条の浅めの凹線がめぐる。

48、49、53、54、57は、体部が外傾して立ち上がりつつ口唇部で急に直立して丸くとする。

28、55は、体部が外傾して立ち上がりつつ口唇部で外反するが、55は顕著である。

39、49の坏は底部が著しく凸状になっているのしが見られる。

26、28、31、34、35、36、38、39、40、42、46、58は、煤の付着している坏である。灯明用として用いられていたのかもしれない。

39、49、53、54、55、57の底部には板目圧痕文が見られる。

59は、袖珍土器の無頸壺である。口径3.4cm、底径3.3cm、器高2.7cmを測る。底部はやや肉厚く、体部は大きく内湾し、口縁部では内反して丸くとする。胎土は細砂粒を若干含む。色調は内外面ともに明赤褐色を呈する。焼成は十分である。糸きり離しである。

60は、土師質鉢である。体部から口縁部にかけての残存である。口唇部外面には断面三角形の凸帯がめぐっている。内外面ともにやや粗く調整をしている。外面全体に煤が付着している。胎土は1mm大の砂粒を多く含む。焼成は不十分である。

第8表 土師質土器一覽(1)

番号	出土地点	器種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	形 態 の 特 徴
			口径	底径	器高				
1	B、-1	甌	7.6	6.6	1.6	精選	良	外面淡黒褐色 内面明黄褐色	残存5/8底部体部肉厚く、口唇部大きく丸くとし
2	B、0	"	7.6	5.3	1.2	細砂粒多し	"	"	完形、底部厚く、体部大きく外反して立上る
3	B、0	"	8.0	5.1	1.4	細砂粒 小角閃石等	"	外面明黄褐色 内面淡赤褐色	完形、底部体部ともに肉厚
4	B、0	"	7.4	5.4	1.3	細砂粒少し	"	内外面淡黄褐色	残存5/8底部肉厚く、口唇部肉厚く尖りぎみにとし
5	B、0	"	8.0	5.8	1.2	細砂粒多し	"	内外面黄褐色	残存5/8体部大きく、外反して立上り口唇部は薄く丸くとし
6	B、0	"	7.8	6.0	1.2	"	"	外面明赤褐色 内面淡黄褐色	残存5/8体部肉薄く、外面全体内面一部に煤の付着あり
7	B、0	"	8.8	6.4	1.5	細砂粒少し	"	外面赤褐色 内面茶褐色	残存5/8全体的に肉厚く、底部、特に肥厚
8	B、1	"	7.7	5.2	1.2	"	"	内外面明淡赤褐色	残存7/8全体的に肉厚、器全体に煤の付着あり
9	B、5	"	6.0	4.2	1.8	細砂粒多し	"	外面明褐色 内面淡灰褐色	完形、器高高く、外面全体に煤の付着あり
10	C、22	"	8.6	6.4	1.2	細砂粒少し	"	内外面明赤褐色	完形全体的に肉薄く、体部は大きく外反し立上る
11	C、16	"	9.0	6.3	1.6	精選	"	"	完形底部体部ともに肉厚く、口唇部尖りぎみにとし
12	C、18	"	7.7	6.4	1.9	砂粒 角閃石少し	"	"	完形、全体的に肉薄く、体部は直角に立上る
13	C、22	"	8.8	6.8	1.4	砂粒 赤色粒少し	"	内外面淡黄褐色	完形、底部体部肉厚く、体部は大きく外反し、丸くとし
14	C、-2	"	8.5	7.0	1.4	角砂粒 角閃石多し	"	外面淡赤褐色 内面淡灰褐色	残存7/8底部薄く、体部肥厚して短く立上る
15	C、23	"	9.0	6.3	1.2	雲母等少し	"	内外面明赤褐色	残存7/8全体的肉薄く、底部中央部盛り上る
16	C、23	"	8.4	6.3	0.8	細砂粒少し	"	外面淡黒褐色 内面明黄褐色	残存7/8全体的肉薄く、体部短く立上る
17	D、28	"	7.2	4.8	2.9	細砂粒 雲母少し	"	内外面黄褐色	完形、全体的に肉厚く、口唇部大きく丸くとし
18	D、31	"	8.0	7.1	1.2	細砂粒多し	"	内外面淡赤褐色	完形、全体的に肉厚く、口唇部大きく丸くとし
19	F、36	"	8.2	6.3	1.6	細砂粒少し	"	内外面明黄褐色	完形、底部は肉厚の差が著しく、口唇部大きく丸くとし
20	E、34	"	8.4	6.1	1.5	細砂粒多し	"	内外面淡黄褐色	残存7/8体部なだらかに立上り、口唇部鋭くとじ
21	E、34	"	8.6	6.4	1.2	細砂粒少し	"	内外面明赤褐色	残存7/8全体的肉薄く、体部大きく外反して立上る
22	F、36	"	8.6	7.8	1.5	"	"	外面明赤褐色 内面白黄褐色	完形、全体的に肉厚、特に体部肥厚し、口唇部大きく丸くとし
23	D、31	"	8.6	7.0	1.1	精選	"	外面明黄褐色 内面明赤褐色	残存7/8、底部の一部は腫起し、体部は短く立上る
24	B、-1	"	—	—	—	"	"	外面黄褐色 内面淡灰褐色	残存2/8体部なだらかに立上り、口唇部丸くとし
25	C、25	"	7.6	4.1	2.3	微細砂粒	やや良	内外面明黄褐色	完形、器高高く、体部はなだらかに外反し、丸くとし
26	B、4	坏	10.1	6.8	2.3	細砂粒 雲母等	良	外面赤褐色 内面赤褐色	残存6/8全体的に肉薄く、体部なだらかに外反し立上る
27	B、-3	"	10.0	7.8	3.1	砂粒雲母 角閃石等	"	外面淡灰褐色 内面淡灰褐色	残存7/8器高高く体部肉厚く、内反しつ立上る
28	B、-6	"	10.0	6.0	2.6	細砂粒 雲母等	"	内外面明黄赤褐色	残存6/8全体的に肉薄く、体部はなだらかに立上る
29	B、3	"	10.6	6.6	3.5	細砂粒少し	"	内外面明淡赤褐色	残存6/8器高高く、口唇部は鋭くとじ
30	B、15	"	10.4	6.0	2.6	大砂粒 角閃石等多し	"	内外面淡明赤褐色	残存6/8全体的に肉厚く、口唇部は大きく丸くとし

第9表 土師質土器一覽(2)

番号	出土地点	器種	法 量 (cm)			胎 土	焼 成	色 調	形 態 の 特 徴
			口径	底径	器高				
31	B、1	坏	11.2	8.0	3.2	細砂粒 少し	良	内外面 明黄褐色	残存7/8器高高く、口唇部は内反しつゝ尖りぎみにとじる
32	B、1	#	11.6	8.0	3.3	#	#	#	残存7/8器高高く、体部は内湾しつゝ立上る底部中央内湾
33	C、1	#	10.4	7.9	3.4	#	#	内外面 黄褐色	残存5/8全体的に肉厚く、口唇部のみ薄く尖りぎみにとじる
34	C、1	#	11.4	8.9	3.4	#	#	内外面 明赤褐色	残存5/8体部の立上りが急である。
35	C、1	#	11.5	7.4	3.3	細砂粒 多し	#	外面黄褐色 内面白黄褐色	残存6/8底部中央内湾く、体部ならかに立上る
36	C、1	#	11.6	7.8	3.1	#	#	内外面 明赤褐色	残存7/8底部肉厚く、口唇部は内反して尖りぎみにとじる
37	C、1	#	11.6	7.0	3.3	#	#	外面黄褐色 内面白黄褐色	残存6/8体部内湾しつゝ鋭くとじる
38	B、1	#	11.4	8.0	3.4	#	#	内外面 淡黄褐色	残存6/8底部肉厚く、口唇部肉薄く尖りぎみにとじる
39	B、0	#	10.8	6.6	3.6	#	#	#	残存5/8底部肉厚く、体部薄く口唇部尖りぎみにとじる
40	C、18	#	10.0	5.6	3.1	精選	#	内外面 黄褐色	残存3/8全体的に肉薄く、体部やや外反しつゝ立上る
41	B、0	#	11.2	7.2	3.0	細砂粒 多し	やや良	外面黄褐色 内面淡明褐色	完全全体的に肉薄く、体部内湾しつゝ立上る
42	C、1	#	11.7	7.9	3.4	#	良	内外面 明赤褐色	残存7/8全体的に肉厚く、口唇部は薄く尖りぎみにとじる
43	C、15	#	11.0	7.6	3.1	細砂粒 少し	#	内外面 赤褐色	完全底部肉厚く、口唇部外面沈線が一途まわる
44	B、0	#	12.0	8.6	3.6	細砂粒 多し	#	外面明黄褐色 内面淡明褐色	完全、全体的に肉厚く、体部内湾しつゝ立上る
45	D、31	#	12.6	8.6	2.9	#	#	内外面 赤褐色	残存6/8底部肉厚く、体部短く立上る
46	B、0	#	12.1	8.1	3.5	細砂粒 少し	#	外面淡黄褐色 内面淡赤褐色	残存6/8全体肉薄く、体部は内湾しつゝ立上る
47	C、16	#	12.8	8.2	3.7	#	#	内外面 明赤褐色	残存6/8体部ならかに外反し、口唇部丸くとじる
48	E、34	#	15.0	10.4	3.0	細砂粒 多し	#	外面淡黄褐色 内面白黄褐色	完全、体部は外反しつゝ立上り、口唇部は内湾して丸くとじる
49	B、-2	#	13.6	9.4	2.7	精選	#	外面明黄褐色 内面淡黄褐色	残存5/8体部はならかに立上り、口唇部は直立に内反する
50	E、31	#	15.1	8.1	3.6	細砂粒 少し	#	外面淡明黄褐色 内面白黄褐色	残存5/8全体的に丸縁があり、口唇部は外反して丸くとじる
51	C、23	#	15.6	10.5	2.7	細砂粒 多し	#	外面白黄褐色 内面淡赤褐色	残存6/8底部肉厚く、体部ならかに立上り、口唇部は内湾する
52	E、34	#	15.0	10.9	3.2	精選	#	内外面 明黄褐色	残存7/8底部肉厚く、体部ならかに直線的に立上る
53	E、34	#	15.3	11.0	2.8	細砂粒 多し	#	外面白黄褐色 内面明赤褐色	残存7/8体部ならかに立上り、口唇部は大きく内湾する
54	D、25	#	15.0	10.7	2.9	細砂粒 雲母少し	#	内外面 明褐色	残存5/8体部ならかに直線的に立上る
55	C、26	#	16.4	12.4	2.6	細砂粒・角閃石雲母少し	#	内外面 淡黒褐色	残存4/8底部薄く、体部はならかに外反しつゝ立上る
56	C、23	#	15.6	11.0	2.4	細砂粒少し	#	内外面 明黄褐色	残存2/8底部薄く、体部はならかに内湾しつゝ立上る
57	C、23	#	16.2	12.4	2.8	細砂粒多し 雲母少し	#	内外面 淡明赤褐色	底部薄く、体部大きく内湾しつゝ立上り、口唇部は内反
58	B、-3	#	—	9.2	—	精選	#	#	残存2/8底部肥厚く、端部に設蓋あり
59	B、-6	つぼ	3.4	3.3	2.7	細砂粒 少し	#	内外面 明赤褐色	残存5/8体部内反しつゝ立上る
60	B、-1	鉢	—	—	—	小石粒多し	#	外面 黒色	口縁部が肥厚し、口唇部に突帯あり

4. 瓦質土器 (第25図～第27図)

(1) 瓦質土器・碗 (第25図)

瓦質土器・碗は、11点の出土をみた。IV a 層 (中世層) からの出土であった。

1は、高台径9.4cmの貼付高台で、断面は長方形を呈する。内面はへらで研磨し黒色を呈する。体部はゆるやかに内湾しつつ立ち上がる。底部の器壁は薄い。

2は、高台径6.4cmの貼付高台で、断面は三角形を呈する。内外面ともにへらで研磨している。高台は外へ張り出す。胎土は精選されているが、焼成が不十分である。

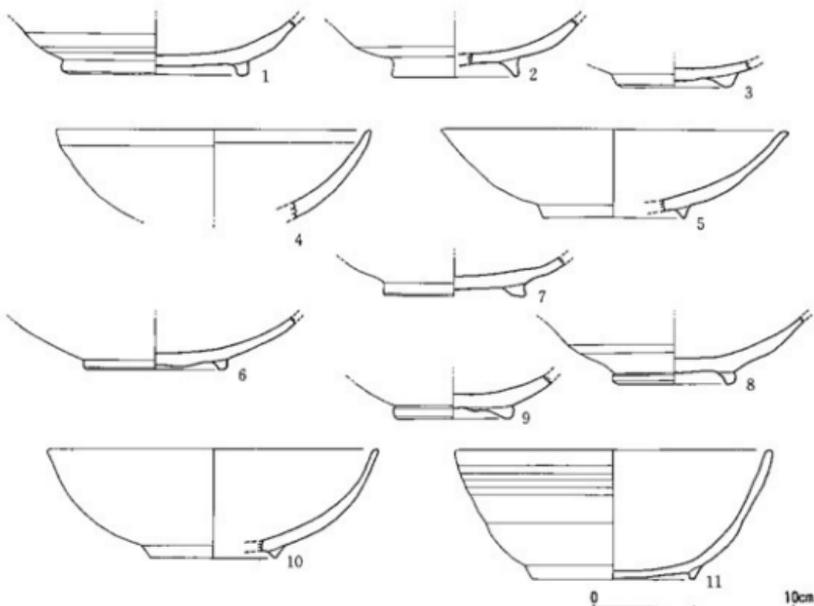
3は、高台径5.8cmで、台形状の貼付高台をなす。胎土に雲母が多量に含まれている。

4は、口径15.8cmで、内外面ともにへらで研磨されている。両面灰黒色を呈する。体部は内湾しつつ立ち上がり、口縁部で直立する。口唇部内面に浅い凹線が一条まわる。

5は、三角形の貼付高台を呈する。体部から器壁は薄くなる。内外面ともへら研磨である。

6は、台形状の貼付高台を呈する。底部は肉厚く、体部は直線的に立ち上がっていく。

7は、高台径7.2cmの台形状の貼付高台である。内面へら研磨され灰白色を呈する。



第25図 瓦質土器・碗実測図 (1)

8は、高台径6.0cmで外丸状の貼付高台を呈する。内外面ヘラで研磨し、内面は黒色を呈する。器壁は体部中位で薄くなり、内湾しつつ立ち上がる。

9は、高台径6.0cmを測り、高台を底部に全面的に貼付る。内外面ともにヘラでよく研磨されていて、内面は黒色を呈する。胎土は、細砂粒を少し含む。

10は、口径16.4cmをはかり、体部は内湾して立ち上がり、口縁部で直立する。器壁も口縁部で薄くなり、口唇部で丸くとする。内面は、暗文風のヘラ磨きが若干されている。

11は、口径16.0cmを測り、体部は直線的に内傾し、口縁部で丸くとする。器壁は体部中位で薄くなる。高台は低く底部中央部は床面に接地する。高台断面は細形台形をしている。口縁部外面と口唇部内面に煤が帯状に付着している。胎土は精選され、焼成も良である。

第10表 瓦質土器・碗一覽

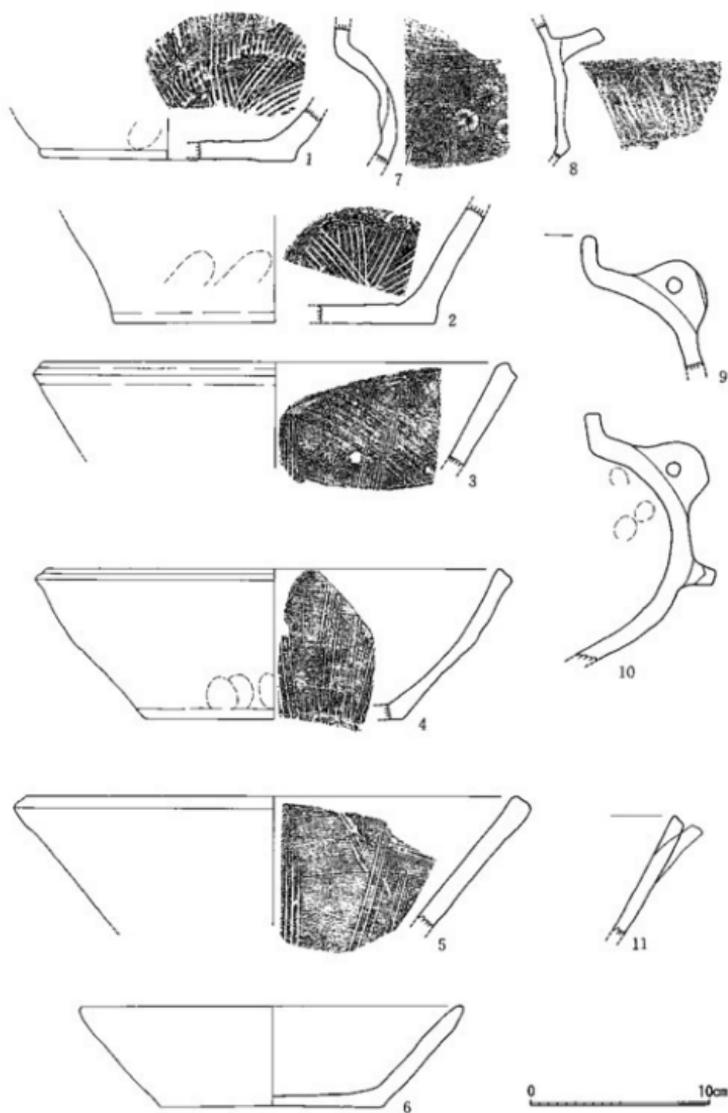
番号	出土地点	器種	法 量 (cm)			胎 土	焼 成	色 調	形 態 の 特 徴
			口径	器高	底径高台径				
1	B、19	碗	—	—	9.4	精選 細砂少混	良	内面黒色 外面黒灰白色	残存5/8高台高0.6cm。断面は長方形。体部はゆるやかな曲線をえがき、立上る
2	C、16	"	—	—	6.4	精選	"	内面黒色 外面灰白色	残存3/8高台高0.8cm。断面は三角形。先はまるくとする
3	C、16	"	—	—	5.8	精選 雲母混入	"	内面黒色 外面灰白色	底部のみ、残存、高台高0.5cm。断面は台形
4	C、17	"	15.8	—	—	精選 細砂少混	"	内面灰黒色 外面灰黒色	残存3/8体部は、内湾している。口唇部内面に0.3cmほどの沈線あり
5	C、17	"	17.4	4.4	7.2	精選	"	内面灰白色 外面黒灰色	残存3/8高台高0.5cm。断面は二等辺三角形なめらかに湾曲して体部は立上る
6	C、18	"	—	—	7.2	精選 細砂少混	"	内面黒灰白色 外面黒灰白色	残存3/8高台高0.4cm。断面は台形。底部器壁が内厚で体部は内湾する
7	D、27	"	—	—	7.2	精選	"	内面灰白色 外面黄褐色	残存3/8高台高0.6cm。断面、台形。底部はやや内厚く、体部はなだらかに立上る
8	D、27	"	—	—	6.0	精選 細砂少混	"	内面黒色 外面灰白色	残存4/8高台高0.6cm。断面台形。底部器壁はやや厚め
9	E、31	"	—	—	6.0	精選 細砂少混	"	内面黒色 外面黄白色	残存4/8高台高0.5cm。高台裏全面に貼りつける
10	F、34	"	16.4	5.6	6.2	精選	"	内面黒灰色 外面黒・黒灰色	残存3/8高台高0.4cm。断面三角形。体部は内湾し、口唇部は丸くとする
11	C、21	"	16.0	6.5	8.0	精選	"	内面黒灰色 外面黒・黒灰色	残存4/8高台高0.3cm。断面台形。口縁部がやや厚くなり、丸くとしている

(2) 瓦質土器 (第26図・第27図)

出土した瓦質土器のなかで作図掲載したのは24点であった。出土層はIV a層 (中世層) からである。1～5はすり鉢、6、11はこね鉢、7～10は湯釜、12～20は火舎、21は花瓶、22は瓦質土器、23、24は甕である。

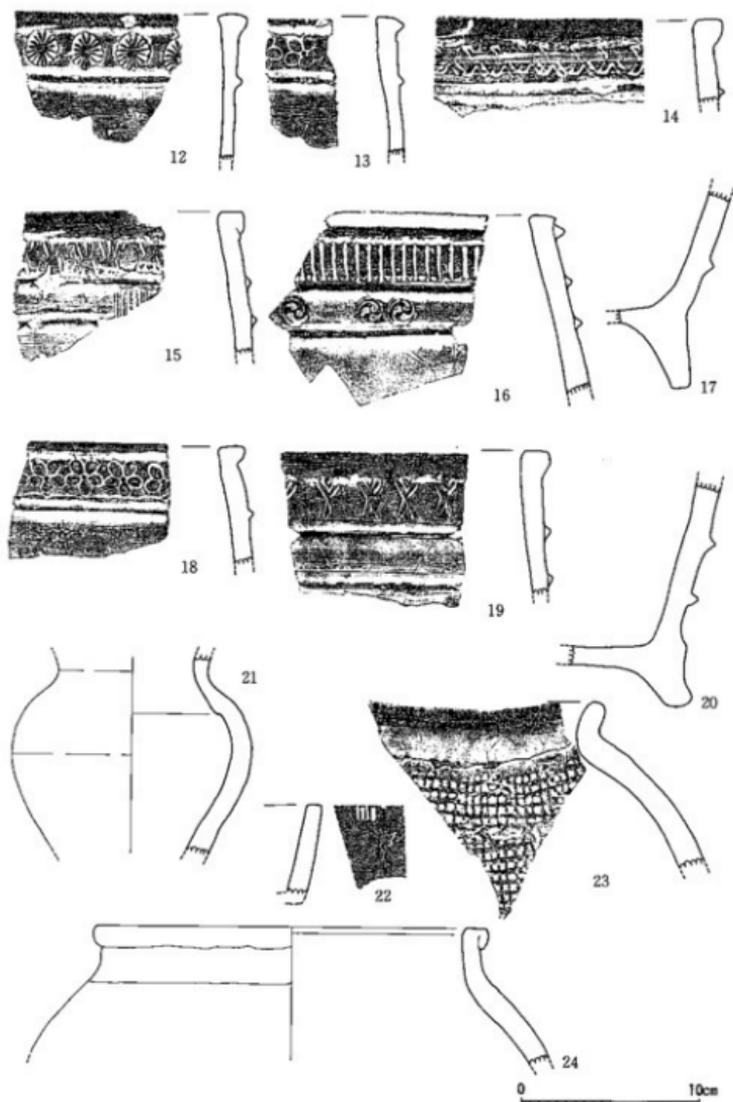
1は、底径10.8cmを測る。外面は製作時の指の圧痕による凸凹が残っており、底面端部はやや出っ張りがある。内面は内底も含めて5本単位の短い櫛目が隙間なくはいる。胎土には極細粒砂が若干含まれる。色調は内面灰色、外面黄褐色を呈する。

2は、底径18.2cmを測る。外面は製作時の指の圧痕による凸凹が残っている。内底面にのみ6本単位の短い櫛目が隙間なくはいる。外面下部と内面には帯状に煤が付着している。胎土には細粒砂が若干含まれる。色調は内面灰色、外面上部茶褐色、下部黒灰色を呈する。



第26圖 瓦質土器実測圖(2)

第2節 中世の遺構と遺物



第27図 瓦質土器実測図 (3)

3は、口径27.2cmを測る。外面は製作時の指の圧痕による凸凹が残っている。内面はハケ目調整が残っており、その上に4本単位の櫛目をいれている。細砂粒を若干含む。色調は内外面ともに灰色を呈する。

4は、口径26.8cmを測る。外面は製作時の指の圧痕による凸凹が残り下部は顕著に残る。内面はハケ目調整され6本単位の櫛目がはいる。内面下部に煤の付着が見られる。口縁部内外面ともに灰白色で、それ以外は黒灰色を呈する。

5は、口径27.0cmを測る。内面はハケ目調整が残っており、その上に7本単位の櫛目がはいる。外面上部にもハケ目調整が残る。

6は、口径21.6cm、底径12.6cmを測る。底部の器壁は薄く、胴部は厚みがあり口唇部はやや尖りぎみにとじる。内面はハケ目調整がよくされていて、外面は上部がハケ目調整、下部には製作時の指の圧痕による凸凹が残る。煤の付着が内外面ともに見られる。胎土には細砂粒が若干混じる。色調は茶褐色である。焼成は不十分である。

7は、肩部に菊花文のスタンプが押されている。色調は内外ともに灰色を呈する。

8は、胴部に巾2.5cmの鈎状凸帯破片で、胴部下部には短い櫛目がある。また、火をうけ変色もしている。

9は、肩部把手付近から口縁部の破片である。把手は高さ2.3cmで直径0.8cmの穴があいている。口縁部内外面ともよくハケ目調整されている。

10は、底部を欠く湯釜である。胴部はなだらかな曲線を描き、肩部には高さ2.3cmで直径0.8cmの穴があり、鈎状凸帯は欠損している。胴部下部は煤が多量に付着している。

11は、片口部付近の破片である。内面はハケ目調整され、外面はなで調整されている。片口巾は5.0cmである。胎土は細砂粒が若干含まれるぐらいで蜜である。

12は、口縁部が外側に肥厚し、口唇部から3.6cm下に一条の凸帯をめぐらしている。内面はハケ目調整されている。口縁部と凸帯の間には菊花文のスタンプが押されている。

13は、口唇部が外側に肥厚し、口唇部から3.6cm下に一条の凸帯をめぐらしている。口縁と凸帯の間には梅花文のスタンプが押されている。外面はハケ目調整されていて、内面はなで調整されている。胎土は細砂粒を含み、色調は内外面ともに灰白色を呈している。

14は、口唇部が外側に肥厚し、口唇部から4.0cm下に一条の凸帯をめぐらしている。口縁と凸帯の間にはX字のスタンプが連続して押されている。内面はなで調整のあと部分的にハケ目調整されている。胎土は細砂粒を含み、色調は灰色ぼさを呈している。

15は、口唇部が外側に肥厚し、口唇部から4.0cmと6.0cm下に各々一条の凸帯をめぐらしている。上段には蓮華花状文のスタンプが押し、下段には6本単位の櫛目をいれている。内面はなで調整のあと部分的にハケ目調整されている。胎土は密で、十分に焼成されている。色調は内外面ともに黒灰色を呈する。

16、口唇部が外側に突きだし口唇部から1.0cm、3.8cm、6.2cm下に各々一条の凸帯をめぐらしている。上段には0.5cm間隔の簾状文のスタンプが、下段には三巴のスタンプが押されている。胎土は細砂粒をふくみ、色調は灰色を呈する。

17は、火舎の脚付近の破片である。脚は、底面端から斜めに外方にむかってつけられている。胴部下部には凸帯が一条めぐっている。全面よくなでられている。胎土は密で、内面は灰褐色、外面は灰黒色を呈する。

18は、口唇部が外側に肥厚し、口唇部から4.0cm下に一条の凸帯がめぐる。口縁と凸帯の間には梅花文のスタンプがおさされている。内面はなで調整が十分にされている。胎土は良く精選されていて密であり、色調は内外面ともに黄灰色を呈する。

19は、口唇部は外側に肥厚し、口唇部から4.5cm、7.2cm下に各々一条の凸帯をめぐらしている。上段にはX字のスタンプが押されていて、下段にはスタンプをヘラで削り取った痕がある。胎土は細砂粒を含みやや粗めである。色調は内面灰黒色、外面黒色を呈する。

20は、火舎の脚付近の破片である。脚は、底部端から斜めに外方にむかってつけられている。外面下部に2条3.5cm間隔に凸帯をめぐらしている。内面下部に多量の炭化物が付着している。胎土は密で、焼成も十分なされている。色調は内外面ともに灰白色を呈する。

21は、瓦質の花瓶で、最大胴径は13.3cm、頸部径8.3cmを測る。内面は製作時の指の圧痕が残っているが、外面はなで調整されている。胴部の器壁は肥厚していて、頸部では肉薄くなる。胎土は細砂粒、雲母を若干含む。色調は外面赤茶褐色で内面灰白色を呈する。

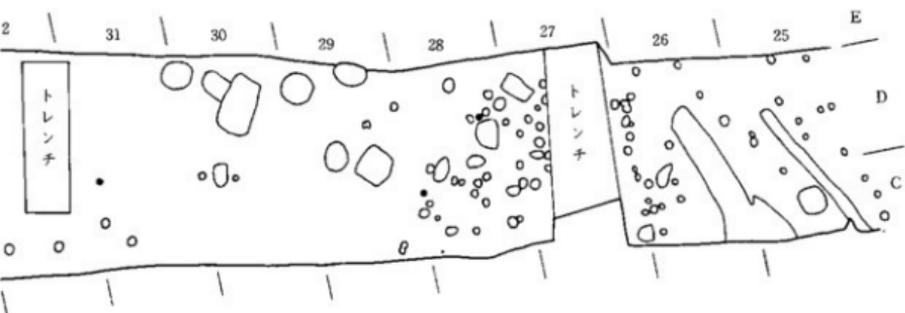
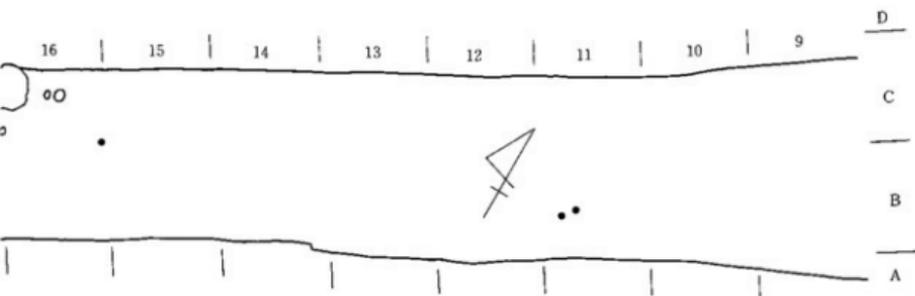
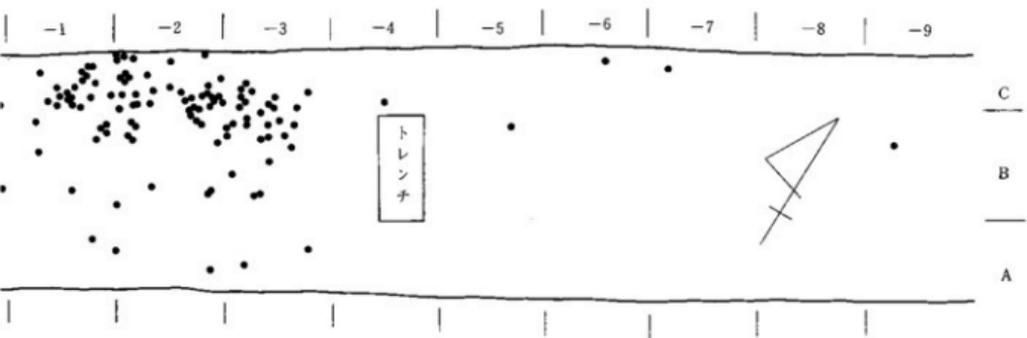
22は、器形は不明であるが、浅鉢の体部の一部とおもわれる。胎土は細砂粒を多く含み、焼成はやや不十分である。色調は内外面ともに赤褐色である。口縁外面に長さ0.8cmの4本の線刻がある。

23は、甕の口縁部付近の破片である。外面には格子叩き目文がみられる。内面はなで調整されている。胎土は密で、色調は内外面ともに灰黒色を呈する。

24は、甕の口縁部の破片である。口唇部外側を折り返して口縁にしている。口縁部下部をヘラで削り段をつけている。胎土は砂粒を含んでいる。内外面ともになで調整されている。色調は内面灰色、外面黄褐色を呈する。



第28図 土睡出土状況図



5. 土鍾 (第29、30、31図)

土鍾(管状土鍾)は多数の出土を見たが、図にでき掲載したのが165点であった。出土地点は—3区、—2区、—1区に集中的に出土し、他に0区、3区、4区、36区等からの出土もあった。出土土層は、IV a層、IV b層の最上層部(中世層)からであった。

—3区から32点、—2区から51点、—1区から29点、0区から13点で全体の75%を占める。また、36区の8点を加えると81%を占めることになる。これらの土鍾は、形態別に3タイプに分けることができる。

Aタイプは断面が長方形をなすもの。

Bタイプは胴部が曲線的に脹らみをもっている断面紡錘形をなすもの。

Cタイプは胴部中央がやや尖りをもっていて、断面三角形をなすもの。

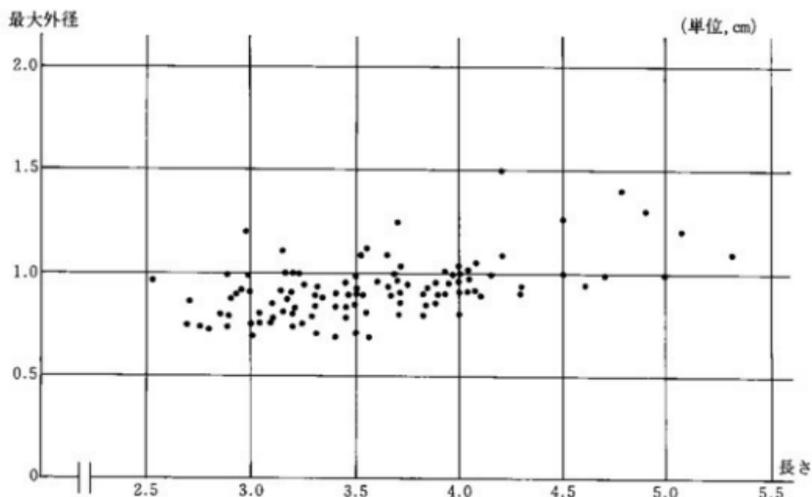
Aタイプは60点で37%、Bタイプは101点で61%、Cタイプは4点で2%の出土である。欠損があり不確かなタイプもあるが、推定であるがタイプごとに分けた。

表に掲載したのは完形品のみである。欠損品は見合わせた。

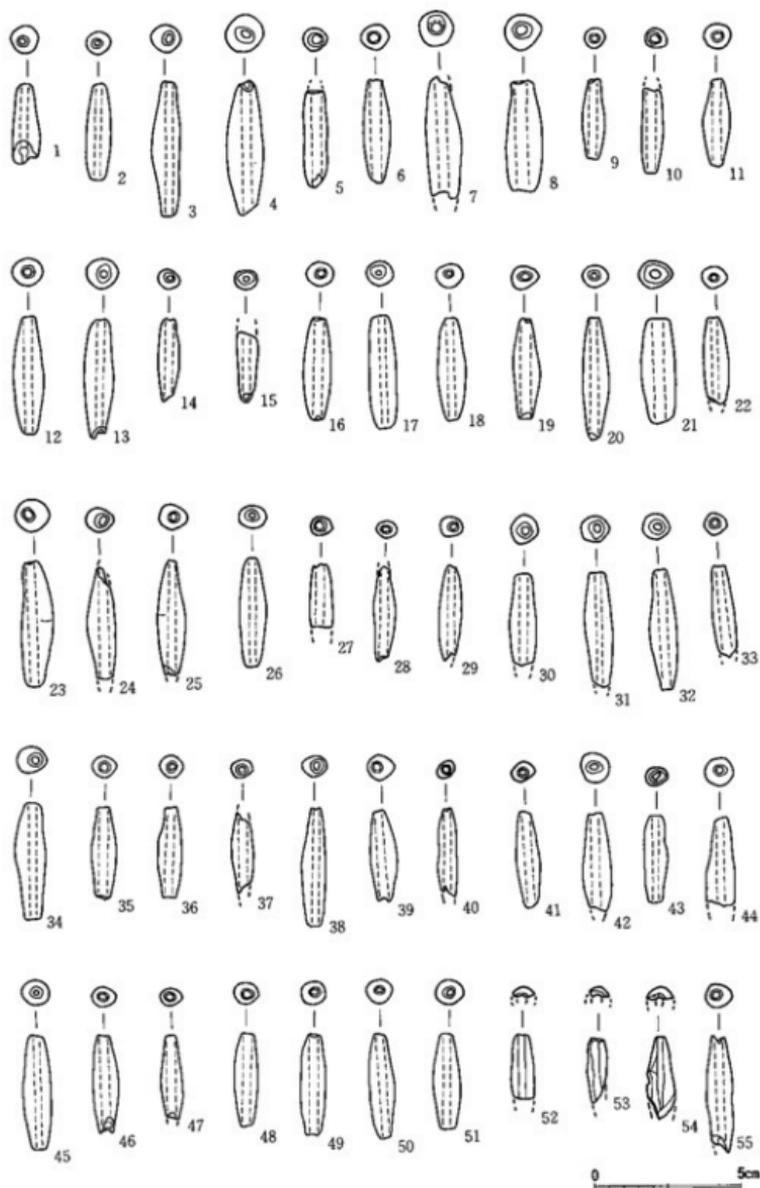
第12表に土鍾の法量を表にまとめてみた。最大外径については大きなばらつきはないが、長さについては上下限の差が激しい。最小が2.53cm、最大が5.30cmを測る。分類するのは大変難しいものがあるが、長さで3グループに分けてみた。

2.70cm~3.75cmを(ア)、3.80cm~4.30cmを(イ)、4.50cm~5.30cmを(ウ)とした。

第11表 土鍾法量表

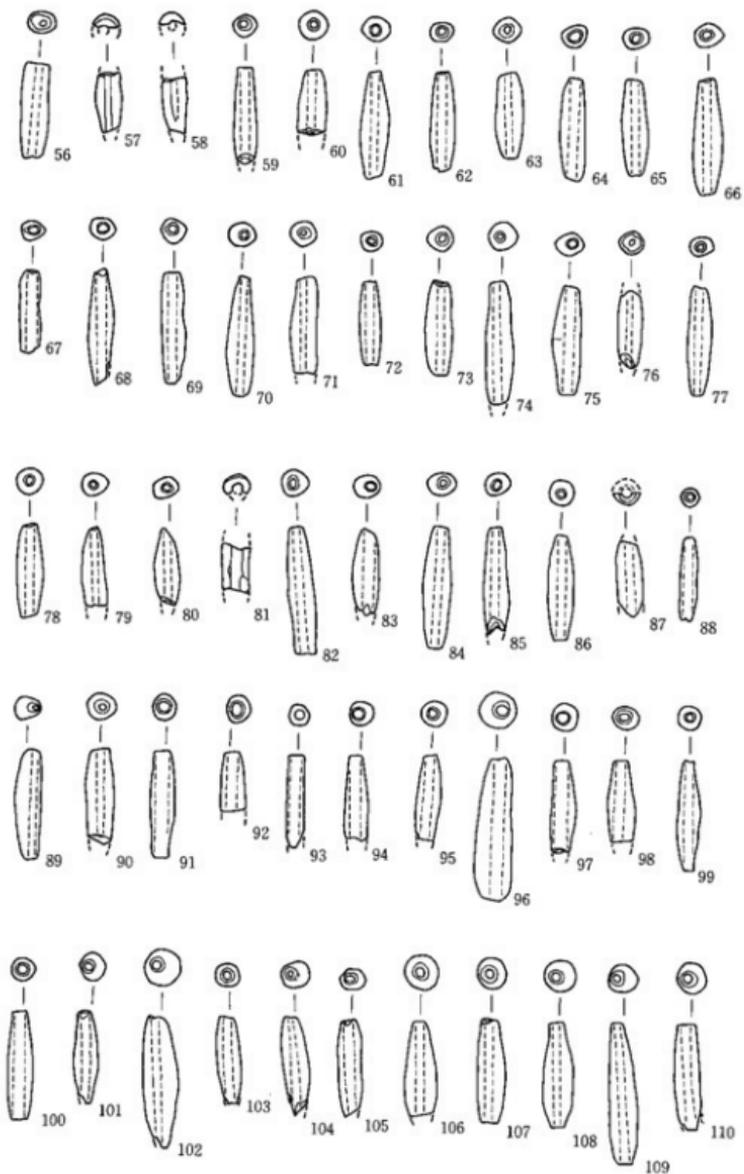


第2節 中世の遺構と遺物



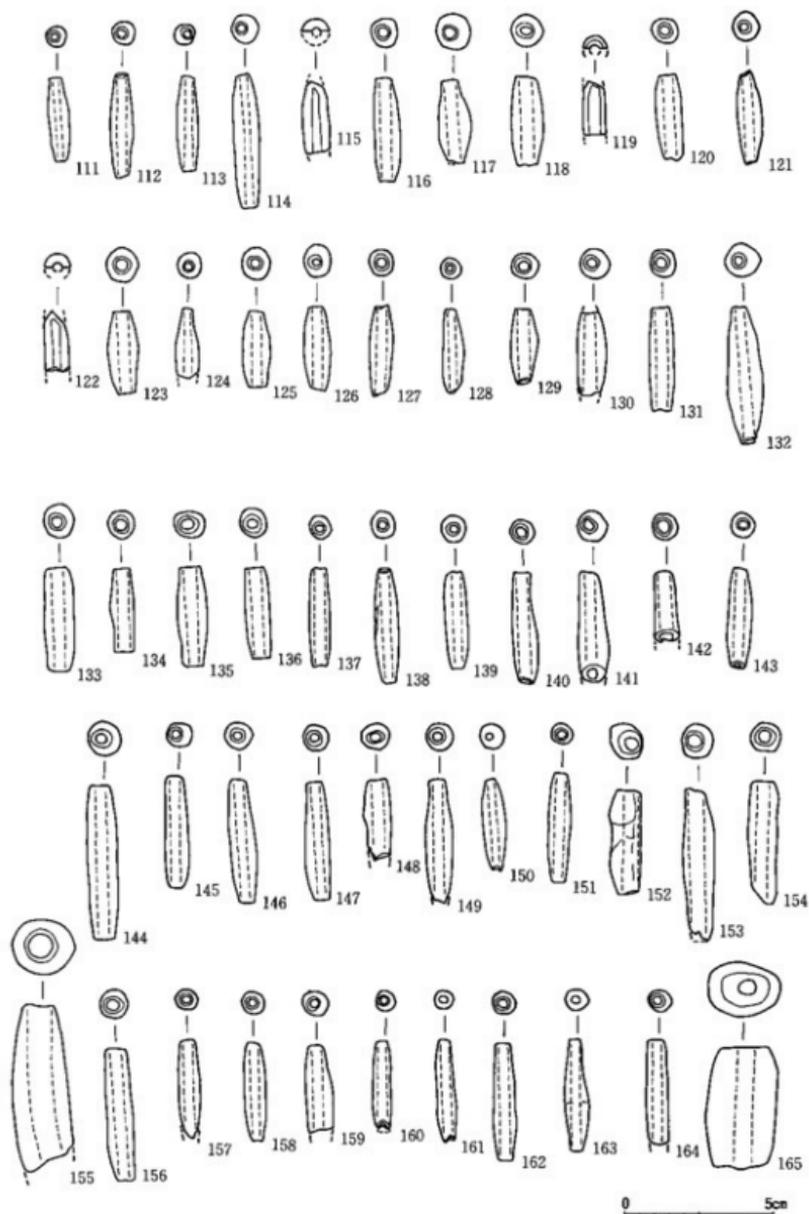
第29図 土鍾実測図 (1)

第二章 遺構・遺物



第30圖 土鏟実測圖 (2)

第2節 中世の遺構と遺物



第31図 土鏃実測図 (3)

(ア)は66%、(イ)は26%、(ウ)は8%の割合で出土した。

また、長さ3.00cm～4.00cmまでは全体の69%の出土があり、この1.00cmの範囲が土鍾の法量の大部分を占めている。

129は、長さ2.53cm、最大外径0.95cm、重量1.5gを測り、長さでは最小である。

144は、長さ5.30cm、最大外径1.10cm、重量6.4gを測り、長さでは最大である。

165は、長さ4.30cm、最大外径2.55cm、重量22.7gを測り、最大外径、重量は群を抜いている。これに匹敵するのが欠損をしているが、155である。

155は、長さ(5.80cm)、最大外径2.00cm、重量(17.8g)を測り、この2点は網のポイント的な部位に用いられていたものと考えられる。

孔径は0.25cm～0.40cmの範囲が大部分を占めている。

(重量)

0g～1.0g	2%	4.1g～5.0g	0%
1.1g～2.0g	47%	5.1g～6.0g	2%
2.1g～3.0g	33%	6.1g～7.0g	2%
3.1g～4.0g	13%	22.7g	1%

上記のような割合になっている。1.0g～3.0gまでで全体の80%を占めている。長さも3.0cm～4.0cmまでが大部分を占めているのと同じよう割合になっている。

色調も褐色系を中心とした土師質素焼きである。

第12表 土鍾一覧(1)

遺物	出土地点	形態	法 量 (cm)			重量 (g)	色 調
			長 さ	最大外径	孔 径		
1	B、-9	B	(2.70)	0.95	0.23	1.5	赤褐色
2	C、-7	A	3.21	0.85	0.20	2.0	赤褐色・一部灰褐色
3	C、-6	B	4.52	1.00	0.30	3.2	赤褐色・一部灰褐色
4	B、-5	B	4.52	1.27	0.32	5.8	淡黄褐色・一部淡赤褐色
5	A、-3	A	(3.28)	0.82	0.32	1.6	淡赤褐色
6	A、-3	B	3.47	0.95	0.35	2.1	淡赤褐色
7	B、-3	B	(4.15)	1.20	0.35	4.1	淡黄褐色・一部赤褐色
8	B、-3	B	3.75	1.25	0.40	3.9	淡赤褐色
9	B、-3	B	2.70	0.73	0.27	0.9	淡赤褐色
10	B、-3	B	(2.87)	0.75	0.35	1.3	#
11	B、-3	C	2.95	0.90	0.29	1.6	淡赤褐色・一部黄褐色
12	B、-3	B	4.00	1.05	0.30	2.8	淡赤褐色
13	B、-3	B	4.02	1.05	0.25	2.9	黄褐色・一部赤褐色
14	B、-3	B	2.75	0.75	0.23	0.9	黄褐色
15	B、-3	B	(2.40)	0.75	0.23	0.9	淡黄褐色・一部灰褐色
16	B、-3	B	3.50	0.91	0.30	2.4	淡赤褐色・一部灰褐色
17	B、-3	A	3.87	0.95	0.20	2.9	赤褐色・一部淡赤褐色
18	B、-3	B	3.50	0.97	0.22	2.1	黄褐色
19	B、-3	B	3.42	0.91	0.32	1.7	赤褐色
20	B、-3	B	4.11	0.88	0.25	2.3	黄褐色

第2節 中世の遺構と遺物

第13表 土錫一覽(2)

遺物	出土地点	形態	法 量 (cm)			重量 (g)	色 調
			長 さ	最大外徑	孔 徑		
21	B、-3	A	3.57	1.13	0.37	3.8	淡赤褐色・一部赤褐色
22	B、-3	B	(2.98)	0.83	0.20	1.8	赤褐色・一部黄褐色
23	B、-3	C	4.22	1.10	0.38	3.6	赤褐色・一部黒灰色
24	C、-3	C	(3.80)	0.92	0.35	2.6	黒灰色
25	C、-3	C	(3.87)	0.95	0.27	2.5	淡黄褐色
26	C、-3	B	3.70	0.91	0.27	2.3	淡赤褐色・一部灰褐色
27	C、-3	A	(2.15)	0.78	0.32	1.3	淡黄褐色・一部灰黒色
28	C、-3	B	3.20	0.75	0.23	1.2	黄褐色
29	C、-3	B	(3.20)	0.73	0.27	1.2	黄褐色・一部淡赤褐色
30	C、-3	B	(3.10)	0.90	0.27	2.3	淡赤褐色・一部黒赤褐色
31	C、-3	B	(3.85)	0.97	0.28	2.8	赤褐色・一部灰褐色
32	C、-3	A	4.02	0.90	0.28	2.7	淡赤褐色
33	C、-3	A	(3.12)	0.73	0.27	1.3	"
34	C、-3	B	4.00	1.00	0.25	2.9	黄褐色・一部淡赤褐色
35	C、-3	B	3.17	0.83	0.30	1.4	淡赤褐色
36	C、-3	B	3.10	0.81	0.25	1.4	淡灰褐色
37	A、-2	B	(2.78)	0.72	0.27	0.9	黄褐色
38	B、-2	B	4.00	0.82	0.30	2.0	淡赤褐色
39	B、-2	B	(3.10)	0.97	0.28	2.0	淡黄褐色
40	B、-2	A	3.00	0.70	0.30	1.2	灰黒褐色
41	B、-2	B	3.30	0.82	0.28	1.6	黄褐色・一部赤褐色
42	B、-2	B	(3.32)	1.02	0.30	2.3	赤褐色
43	B、-2	A	3.00	0.75	0.28	1.5	淡赤褐色
44	B、-2	B	(3.05)	1.00	0.27	2.7	"
45	B、-2	B	3.90	0.97	0.20	3.4	黄褐色・一部赤褐色
46	B、-2	B	3.37	0.82	0.30	1.7	淡赤褐色・一部赤褐色
47	B、-2	B	(2.82)	0.73	0.30	1.2	"・一部灰褐色
48	B、-2	B	3.20	0.82	0.32	1.7	灰褐色・一部黄褐色
49	B、-2	A	3.42	0.87	0.30	1.9	灰褐色
50	C、-2	B	3.60	0.90	0.30	2.0	黄褐色
51	C、-2	B	3.25	0.93	0.27	2.3	淡赤褐色・一部淡灰黒色
52	C、-2	(A)	(2.27)	(0.80)	(0.22)	0.6	赤褐色
53	C、-2	(B)	(2.21)	(0.70)	(0.27)	0.5	"
54	C、-2	(B)	(2.80)	(0.95)	(0.20)	0.8	"
55	C、-2	B	3.92	0.90	0.30	2.1	灰褐色
56	C、-2	A	3.22	1.00	0.27	2.6	赤褐色
57	C、-2	(B)	(2.00)	(0.90)	(0.20)	0.6	淡赤褐色
58	C、-2	(B)	(1.90)	(0.85)	(0.20)	0.6	赤褐色
59	C、-2	B	(3.28)	0.80	0.31	1.6	灰黒色と赤褐色
60	C、-2	B	(2.20)	1.00	0.23	1.2	黄褐色
61	C、-2	B	3.65	0.95	0.38	2.4	赤褐色
62	C、-2	A	3.35	0.87	0.30	1.7	黄褐色
63	C、-2	B	2.90	0.97	0.25	1.9	赤褐色と黄褐色
64	C、-2	A	3.50	0.88	0.40	1.8	黄褐色・一部赤褐色
65	C、-2	B	3.30	0.91	0.30	1.9	赤褐色・一部灰褐色
66	C、-2	B	3.95	1.00	0.30	2.6	赤褐色
67	C、-2	A	2.80	0.75	0.38	1.3	淡黄褐色・一部灰黒色
68	C、-2	B	3.90	0.90	0.32	1.8	淡赤褐色
69	C、-2	A	3.75	0.87	0.30	1.9	"
70	C、-2	B	4.03	0.93	0.25	2.4	"
71	C、-2	A	(3.30)	0.95	0.20	2.6	淡黄褐色・一部淡赤褐色
72	C、-2	B	2.85	0.78	0.25	1.2	淡赤褐色・一部淡黄褐色

第14表 土層一覽(3)

番号	出土地点	形態	法 量 (cm)			重量 (g)	色 調
			長 さ	最大外徑	孔 徑		
73	C、-2	B	3.20	0.92	0.30	2.0	淡赤褐色
74	C、-2	A (4.20)	1.00	1.00	0.25	3.1	赤褐色と灰黒色
75	C、-2	B	3.70	0.95	0.35	2.2	淡赤褐色・一部赤褐色
76	C、-2	B (2.60)	0.83	0.20	0.20	1.4	赤褐色と淡黒灰色
77	C、-2	B	3.70	0.82	0.27	1.8	黄褐色・一部赤褐色
78	C、-2	B	3.15	0.90	0.30	1.8	赤褐色・淡赤褐色斑
79	C、-2	B (2.70)	0.83	0.20	0.20	1.6	赤褐色
80	C、-2	B (2.60)	0.78	0.25	0.25	1.3	"
81	C、-2	(A) (1.65)	(1.00)	0.35	0.35	0.8	淡黄褐色
82	C、-2	A	4.33	0.93	0.30	3.0	赤褐色
83	C、-2	B (2.90)	0.91	0.35	0.35	1.6	黄褐色
84	C、-2	B	4.15	1.00	0.25	3.2	淡赤褐色・一部黒灰色
85	C、-2	B (3.70)	0.90	0.32	0.32	1.9	"
86	C、-2	B	3.70	0.88	0.32	1.9	"
87	C、-2	B (2.55)	(0.95)	0.20	0.20	0.9	"
88	A、-1	B	2.87	0.75	0.30	1.1	赤褐色
89	A、-1	B	3.72	0.90	0.20	2.7	黄褐色
90	B、-1	A (3.21)	1.00	0.22	0.22	2.5	赤褐色と淡赤褐色
91	B、-1	A	3.78	0.85	0.40	2.0	"
92	B、-1	A (2.12)	(0.85)	0.32	1.1	1.1	黄褐色・一部赤褐色
93	B、-1	A (3.22)	0.70	0.30	1.2	1.2	淡赤褐色
94	B、-1	A (2.90)	0.82	0.30	1.5	1.5	淡黄褐色
95	B、-1	B (3.00)	0.87	0.23	1.7	1.7	淡赤褐色
96	B、-1	A	4.90	1.32	0.40	6.5	黄褐色・一部赤褐色
97	B、-1	B (3.12)	0.93	0.40	1.7	1.7	赤褐色
98	C、-1	B	2.82	0.90	0.20	1.7	淡赤褐色
99	C、-1	B	3.72	0.89	0.25	1.8	黄褐色
100	C、-1	B	3.78	0.82	0.32	2.1	淡赤褐色と黄褐色
101	C、-1	B (3.40)	1.00	0.30	2.1	2.1	淡赤褐色
102	C、-1	B (4.70)	1.32	0.32	5.1	5.1	黄褐色・一部赤褐色
103	C、-1	B	3.03	0.80	0.32	1.3	淡赤褐色
104	C、-1	B (3.37)	0.85	0.20	1.6	1.6	赤褐色
105	C、-1	A	3.35	0.90	0.32	1.5	黄褐色
106	C、-1	B (3.40)	1.10	0.30	3.4	3.4	"・一部黒灰色
107	C、-1	B	3.70	1.00	0.25	2.8	淡赤褐色
108	C、-1	B	3.72	1.05	0.22	3.2	黒灰色
109	C、-1	B	5.00	0.98	0.30	3.8	灰褐色
110	C、-1	B (3.80)	1.10	0.31	3.1	3.1	淡赤褐色
111	C、-1	B	3.05	0.78	0.28	1.1	赤褐色
112	C、-1	B	3.55	0.81	0.30	1.3	"
113	C、-1	B	3.30	0.73	0.28	1.3	"
114	C、-1	A	4.68	1.00	0.30	3.3	淡赤褐色・一部黒灰色
115	C、-1	(B) (2.37)	(0.95)	(0.25)	0.7	0.7	赤褐色
116	C、-1	A	3.65	0.91	0.35	2.2	"
117	A、0	B	2.97	1.20	0.40	2.4	淡赤褐色
118	B、0	B	3.15	1.11	0.30	2.5	"
119	B、0	(B) (1.87)	(0.95)	(0.30)	0.5	0.5	赤褐色
120	B、0	A	3.00	0.93	0.40	1.6	"
121	C、0	B	3.17	0.90	0.27	1.7	淡赤褐色
122	C、0	(B) (2.07)	(0.90)	(0.19)	0.7	0.7	"
123	C、0	B	2.97	1.00	0.32	1.8	"
124	C、0	B (2.39)	(0.85)	0.30	1.1	1.1	淡黒灰色

第2節 中世の遺構と遺物

第15表 土器一覽(4)

番号	出土地点	形態	法 量 (cm)			重量 (g)	色 調
			長 さ	最大外径	孔 徑		
125	C, 0	A	2.70	0.87	0.32	1.5	黄褐色
126	C, 0	B	2.90	0.88	0.35	1.8	淡赤褐色
127	C, 0	A	3.10	0.80	0.30	1.2	淡黄褐色
128	C, 0	A	2.90	0.78	0.25	1.1	淡赤褐色
129	C, 0	B	2.53	0.95	0.32	1.5	灰褐色
130	B, 1	B	(2.87)	1.08	0.40	1.5	赤褐色
131	C, 1	A	3.57	0.90	0.30	2.3	赤褐色
132	C, 1	B	4.80	1.42	0.35	5.7	淡黄褐色と赤褐色
133	C, 1	A	3.60	0.70	0.31	3.1	淡黄褐色
134	C, 1	A	2.95	0.90	0.32	1.6	淡赤褐色
135	A, 2	A	3.57	1.10	0.35	2.7	赤褐色と黄褐色
136	A, 2	A	3.20	1.00	0.30	2.2	赤褐色
137	C, 3	A	3.40	0.70	0.28	1.2	淡赤褐色
138	C, 3	B	4.00	0.95	0.30	2.2	赤褐色
139	C, 3	A	3.30	0.86	0.23	1.8	淡赤褐色
140	C, 3	A	3.75	0.95	0.40	2.1	黄褐色
141	A, 4	A	(3.75)	1.02	0.38	3.3	黄褐色・一部赤褐色
142	C, 4	A	(2.32)	0.93	0.37	1.3	赤褐色
143	C, 4	B	3.47	0.90	0.27	2.5	"
144	A, 5	A	5.30	1.10	0.40	6.4	灰褐色赤褐色斑
145	B, 6	A	3.90	1.00	0.32	3.2	黒灰色
146	B, 7	B	4.31	0.90	0.33	2.9	赤褐色・一部黒灰色
147	B, 8	A	4.10	0.90	0.30	2.8	淡赤褐色
148	B, 11	A	(2.80)	0.92	0.33	1.6	赤褐色
149	B, 11	B	(4.20)	1.03	0.30	3.1	黒灰色・一部赤褐色
150	B, 15	B	3.20	1.00	0.28	2.1	黄褐色
151	C, 16	B	3.82	0.90	0.25	1.9	赤褐色
152	D, 28	A	3.65	1.10	0.50	3.2	黄褐色
153	E, 28	A	5.12	1.20	0.28	5.4	赤褐色・一部黒灰色
154	E, 31	A	4.12	1.05	0.30	3.6	赤褐色
155	E, 34	A	(5.80)	2.00	0.70	17.8	淡黄褐色
156	E, 36	A	4.60	0.95	0.42	2.8	淡赤褐色
157	F, 36	A	(3.41)	0.90	0.30	1.7	"
158	F, 36	A	3.40	0.85	0.31	1.8	"
159	F, 36	A	(3.12)	1.20	0.30	2.5	黄褐色
160	F, 36	A	(2.95)	0.83	0.30	1.2	淡赤褐色
161	F, 36	A	3.50	0.73	0.28	1.2	"
162	F, 36	A	4.05	0.98	0.32	2.2	赤褐色
163	F, 36	B	3.97	0.95	0.28	1.9	淡赤褐色
164	G, 35	A	(3.60)	0.90	0.25	2.1	"
165	一括	A	4.30	2.55	0.50	22.7	黒灰色・一部灰褐色

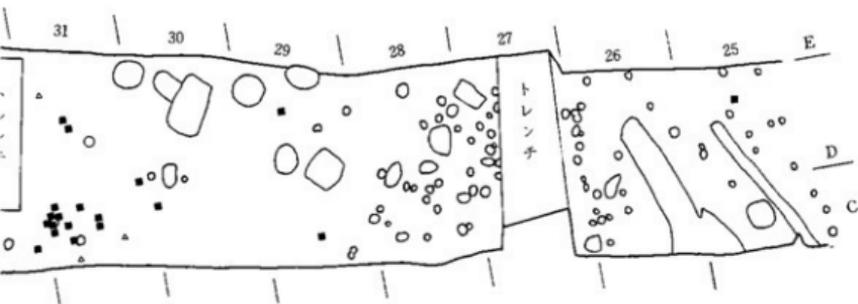
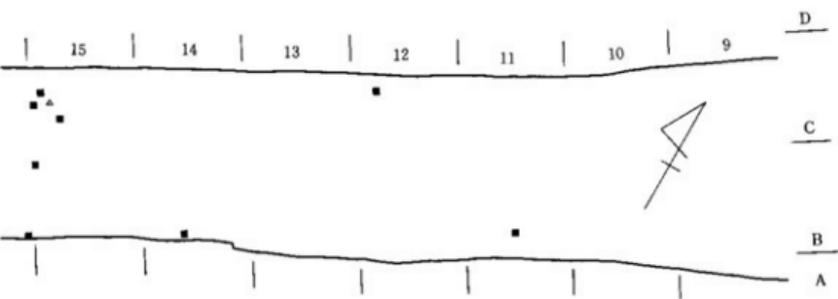
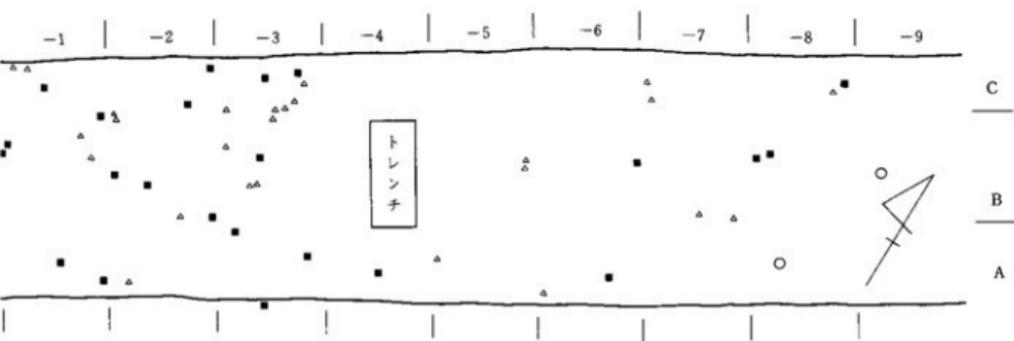
※ () は現存の値、形態の () は推定

※形態はA 断面長方形、B 断面紡錘形、C 断面三角形



■鉄製品 △スラグ ○銅銭

第32図 鉄製品・スラグ・銅銭出



6. 鉄・銅製品（第33図～第36図）

鉄製品は多量の出土があり、あわせて銅製品の出土も数点あった。この銅製品のうち3点は銅銭である。また、スラグの出土も多く、鉄滓、銅滓の付着した取瓶、フイゴの羽口の出土もあり、当道跡内で小鍛冶が行なわれていたと考えられる。近接地で大鍛冶が行われ、そこで生産された鉄塊を搬入し、当道跡では建築部材の製造として小鍛冶が行われ、角釘、棒状の鉄製品、鏝、刀子、鉋などを生産していたと考えられる。

また、当道跡では銅銭（鳩目銭）や銅製品なども製造されていた可能性も考えられるが、これは、出土品の成分分析を待たなければならない。

これら鉄・銅製品の出土土層はIV a 層（中世層）からであった。

出土した鉄・銅製品のうち作図掲載したのは105点で、そのうち銅製品は5点であった。

1～46は角釘で、出土鉄製品の約半数がこの角釘である。断面方形か隅丸方形である。

47～64は棒状の鉄製品である。この18点は釘としての用途ではなく、まだ用途は不明である。現存の長さで最も長いものは9.0cmを測り、ほとんどが欠損しているものばかりである。断面は不定型なものもおおく、幅0.3cm～0.7cmである。64は現存長さは9.0cm、幅0.3cm×0.7cmで、ゆるやかなカーブを描くように屈曲している。58、62もやや屈曲しているが、他の棒状の鉄製品には見られない。

65～68は鏝で4点の出土をみた。

65は現存長さ8.3cmでく字形に屈曲するやや長めの鏝である。断面隅丸方形である。66は長さ5.8cm、幅1.5×1.0cmの断面隅丸方形の肉太い鏝である。

67は長さ5.0cmでく字形に屈曲する鏝である。断面楕円形である。

69～80は刀子で12点の出土をみた。78～80以外は刀子の茎片である。

69は刀子の鋒部である。現存長さ5.0cm、幅1.3cmを測る。

79は何度も研いで使用しているようである。細身の刀子である。

80は刀子の完形である。長さは23.1cm、幅1.7cmとやや幅広である。

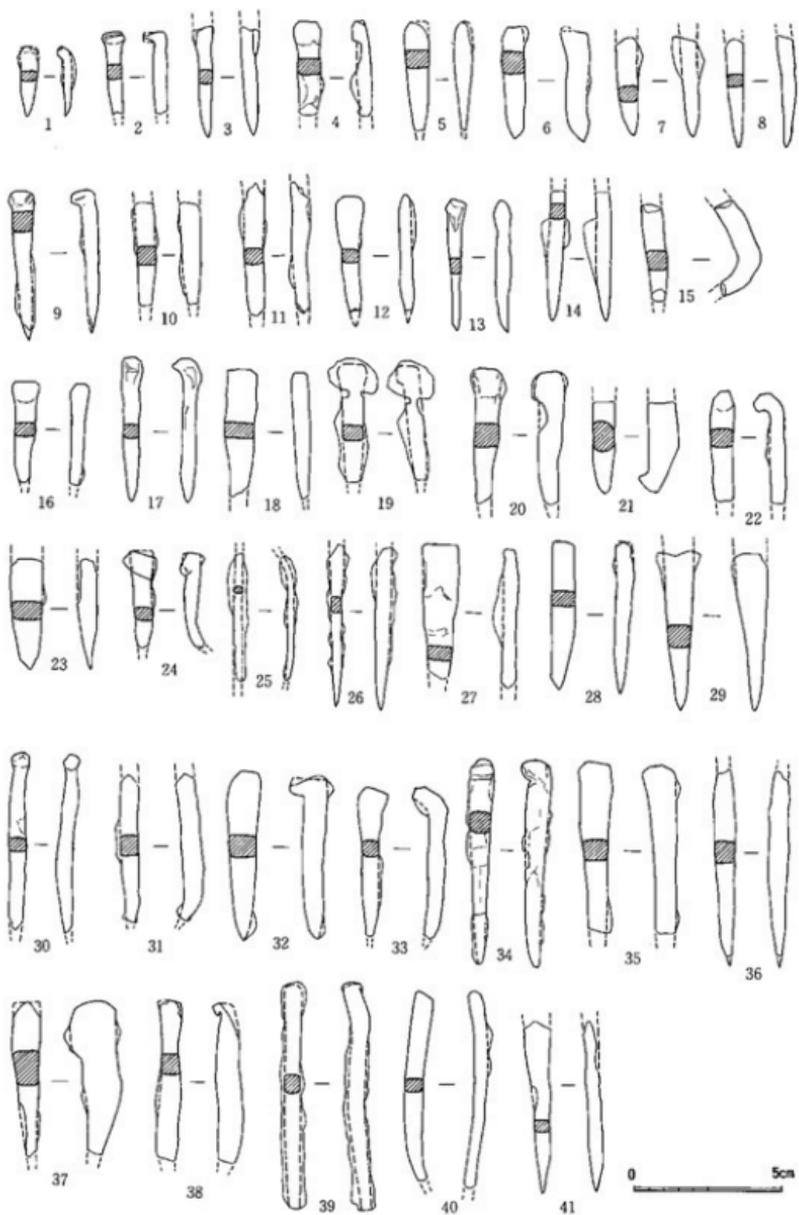
81は小刀の茎片である。現存長さ7.3cm、幅1.7cm、厚さ0.3cmを測る。

82は小刀の鋒部である。元は小刀として使用していたものを鋒部のみ意図的に折って使用していたものと断面から考えられる。長さ11.1cm、幅2.5cmを測る。

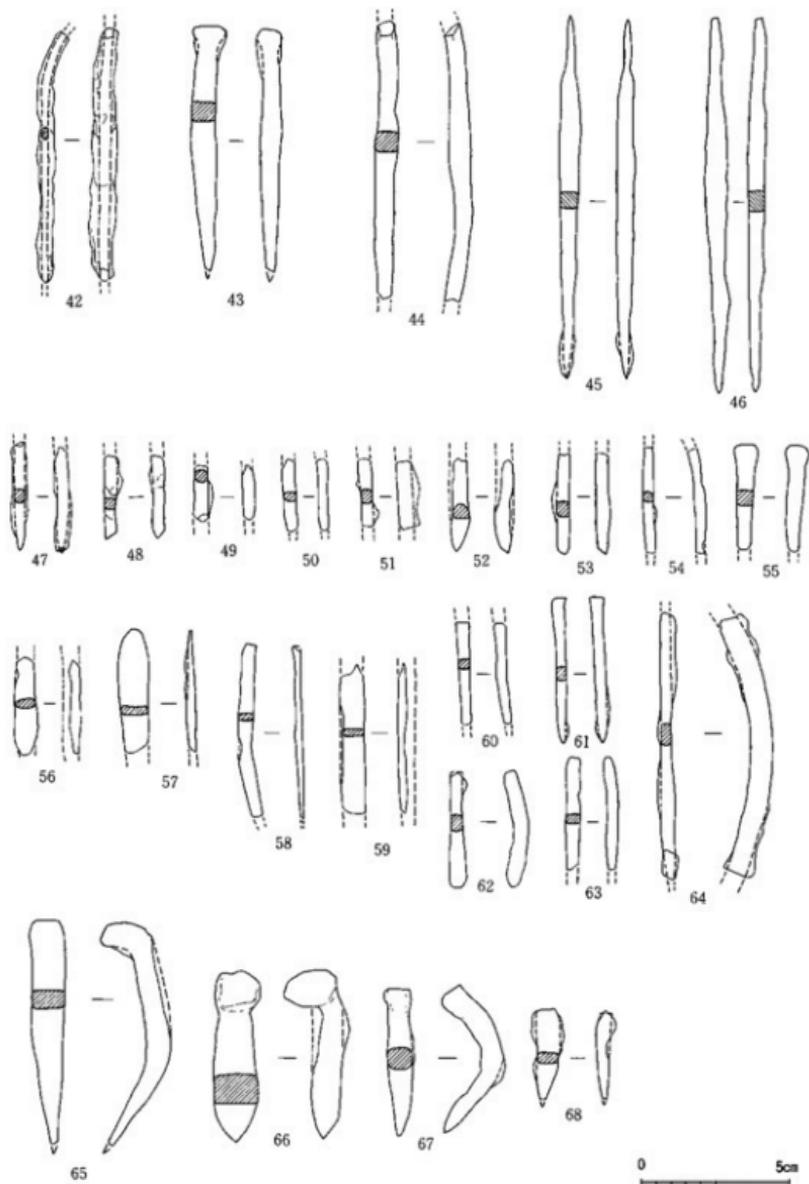
83は小刀で茎の一部を欠損している。一枚の鉄の板を折り曲げて鍛造している。現存長さ25.8cm、最大幅2.7cm、厚さ0.4cm、刃渡り長さ21.0cmで、茎部は現存長さ4.0cm、最大幅1.6cm、厚さ0.6cmを測る。刃の部分に鋭さが残る。

84は紡錘車軸である。長さは8.1cm、断面は径0.4cmの円状をしている。頂部が長さ0.5cm、幅0.3cm突き出たカギ状になっている。

第2節 中世の遺構と遺物

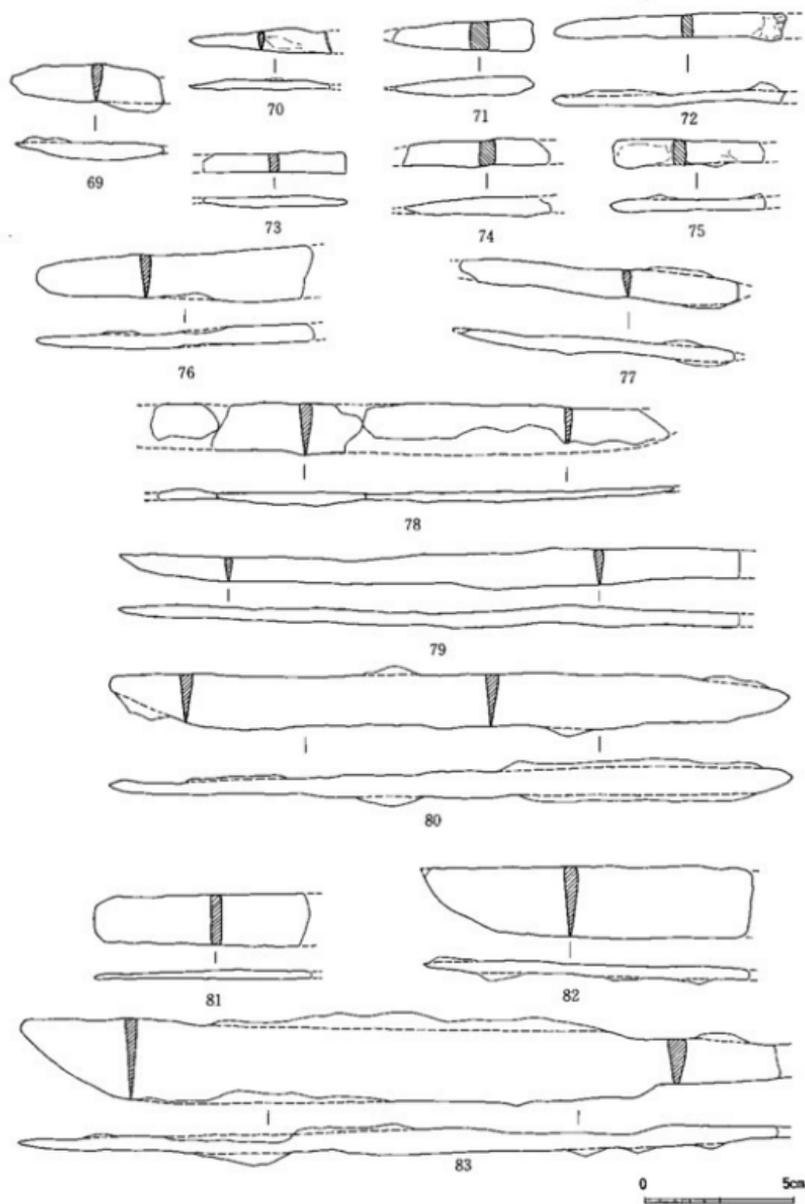


第33図 鉄・銅製品実測図(1)

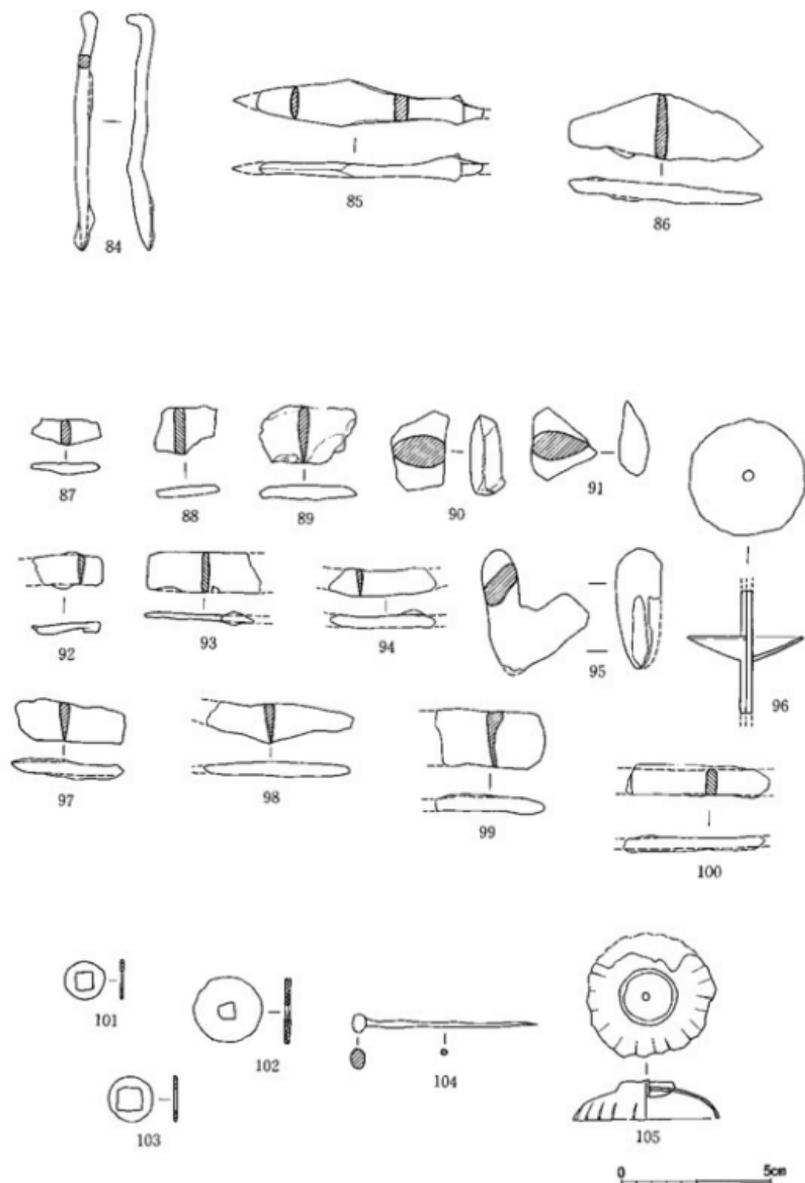


第34図 鉄・銅製品実測図(2)

第2節 中世の遺構と遺物



第35図 鉄・銅製品実測図(3)



第36図 鉄・鋼製品実測図(4)

第2節 中世の遺構と遺物

85は鉋である。現存の長さは7.5cm、鉋身の最大幅1.6cm、厚さ0.3cmを測る。茎部分の幅は0.7cm、厚さ0.4cm木片の付着が若干みられたが、図に表すほど明確なものではなかった。両刃に鋭さが残っていて図に表現できた。

86は火打ち鉄である。形状は、頂部を丸くした三角形をしている。底辺が6.5cm、他の2辺は3.5cmを測り、最大幅は2.2cm、厚さは0.3cmである。

87～100は不明の鉄製品で14点の出土をみた。

101は鳩目銭である。径1.3cm、孔径0.6cm、厚さ0.1cmで無文の薄手の銅銭であるが、小形で大変に脆く一般に通貨として使用するのは困難であると考えられる。

102は2枚重ねの銅銭である。厚さが多少異なる。0.1cmと0.04cmで、径は2.2cm、孔径0.8cmの方形である。

103は鳩目銭である。径1.5cm、孔径0.9cm、厚さ0.08cmを測る。

104は銅ピンである。長さ6.3cm、頭部0.5cm×0.7cmの楕円球である。

105は銅製裝飾品で外面は金メッキを施している。口径5.0cm、高さ1.4cmで突出部は1.8cm、高さ0.3cmを測る。口縁に刻み目がはいる。

第16表 鉄製品一覧(1)

番号	製品名	出土地点	法量 (cm)			番号	製品名	出土地点	法量 (cm)		
			長さ	はば					長さ	はば	
1	角釘	A、0	2.3	0.5	0.3	18	角釘	C、19	(4.2)	1.1	0.5
2	"	E、35	(2.8)	0.5	0.5	19	"	C、21	(4.2)	0.7	0.5
3	"	B、-2	(3.6)	0.5	0.5	20	"	C、17	(4.6)	0.9	0.8
4	"	B、20	(3.2)	0.8	0.5	21	"	D、29	(3.0)	0.8	1.0
5	"	C、-8	(3.6)	0.8	0.6	22	"	E、32	(3.7)	0.8	0.6
6	"	C、0	3.7	0.8	0.7	23	"	E、35	(3.7)	1.0	0.6
7	"	C、-1	(3.3)	0.7	0.5	24	"	F、40	(3.2)	0.6	0.4
8	"	E、32	(3.6)	0.6	0.4	25	"	A、-1	(4.2)	0.4	0.2
9	"	A、3	(4.8)	0.6	0.7	26	"	A、3	(5.4)	0.5	0.5
10	"	B、-9	(3.5)	0.6	0.6	27	"	B、4	(4.6)	0.9	0.5
11	"	B、-8	(4.4)	0.6	0.5	28	"	D、29	5.1	0.8	0.5
12	"	B、0	(3.9)	0.6	0.4	29	"	C、-1	(5.3)	0.8	0.8
13	"	B、8	4.4	0.4	0.5	30	"	B、5	(6.0)	0.6	0.5
14	"	C、-2	(4.3)	0.5	0.5	31	"	C、15	(4.9)	0.7	0.7
15	"	C、19	(3.3)	0.7	0.7	32	"	D、31	5.6	0.9	0.7
16	"	E、34	(3.4)	0.7	0.5	33	"	E、35	(5.1)	0.5	0.5
17	"	C、16	4.9	0.5	0.5	34	"	A、3	7.0	0.8	0.7

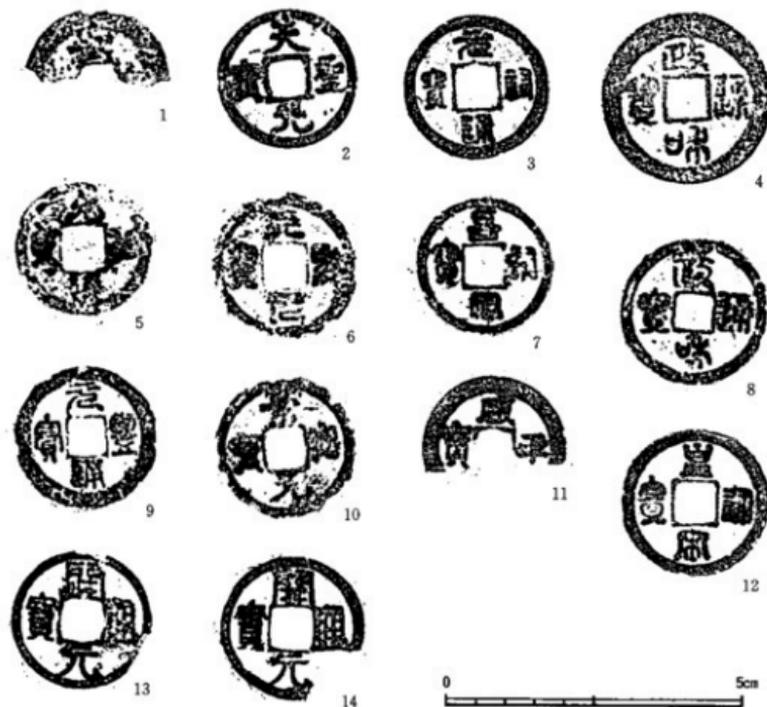
第17表 鉄製品一覽(2)

番号	製品名	出土地点	法量 (cm)		番号	製品名	出土地点	法量 (cm)	
			長さ	はば				長さ	はば
35	角釘	C、4	(5.7)	0.8 0.7	68	鏡片	C、-3	(3.1)	0.7 0.4
36	"	D、31	(6.2)	0.7 0.7	69	刀子鋒部	D、33	(5.0)	1.3 0.4
37	"	D、20	(5.2)	0.8 1.2	70	刀子茎片	B、-2	(4.7)	0.5 0.2
38	"	D、33	(5.3)	0.6 0.7	71	"	C、-3	(4.8)	0.9 0.6
39	"	A、-1	(7.8)	0.5 0.6	72	"	B、-1	(7.7)	0.8 0.3
40	"	E、31	(6.7)	0.6 0.4	73	"	D、31	(4.8)	0.7 0.3
41	"	E、31	(5.8)	0.5 0.4	74	"	E、31	(5.0)	0.9 0.5
42	"	A、-4	(8.5)	0.2 0.4	75	"	B、-1	(5.1)	0.8 0.4
43	"	B、3	(8.2)	0.8 0.6	76	"	D、31	(9.3)	1.3 0.3
44	"	D、31	(9.3)	0.7 0.7	77	"	D、25	(9.2)	0.8 0.2
45	"	D、32	12.2	0.6 0.5	78	刀子	E、29	(17.5)	1.3 0.3
46	"	C、24	12.7	0.7 0.6	79	"	D、24	(21.0)	1.2 0.3
47	棒状の鉄製品	A、1	(3.5)	0.5 0.4	80	"	D、31	23.1	1.7 0.6
48	"	B、-3	(2.8)	0.4 0.4	81	小刀	B、11	(7.3)	1.7 0.3
49	"	B、-3	(1.8)	0.4 0.4	82	"	C、15	11.1	2.5 0.4
50	"	D、31	(2.4)	0.4 0.4	83	"	D、31	(25.8)	2.7 0.4
51	"	C、0	(2.3)	0.4 0.4	84	紡錘車軸	C、21	8.1	0.4 0.4
52	"	B、14	(3.0)	(0.5)0.5	85	鏡	D、30	(7.5)	1.6 0.3
53	"	E、33	(3.3)	0.5 0.5	86	火打鉄	C、15	6.5	2.2 0.3
54	"	D、31	(3.5)	0.4 0.3	87	不明鉄製品	B、-8	2.3	1.0 0.3
55	"	F、33	(3.5)	0.5 0.5	88	"	F、36	2.1	1.5 0.3
56	"	F、33	(3.3)	0.7 0.3	89	"	B、8	3.3	1.9 0.4
57	"	F、34	(4.2)	1.0 0.3	90	"	B、-2	2.7	1.8 1.0
58	"	D、26	(5.8)	0.5 0.2	91	"	F、33	2.5	1.5 1.0
59	"	E、31	(5.0)	0.8(0.3)	92	"	B、4	2.4	1.0 0.2
60	"	C、-2	(3.4)	0.4 0.4	93	"	A、-3	(3.6)	1.5 0.2
61	"	A、-3	4.9	0.4 0.4	94	"	C、17	(3.0)	0.8 0.2
62	"	D、31	3.9	0.5 0.5	95	"	E、33	4.0	1.4 0.6
63	"	E、29	(3.8)	0.5 0.3	96	"	D、31	(4.1)	-- --
64	"	A、-6	(9.0)	0.3 0.7	97	"	C、15	3.8	1.3 0.3
65	鏡	E、32	(8.3)	1.0 0.6	98	"	E、29	(4.9)	1.3 0.4
66	"	C、12	5.8	1.5 1.0	99	"	F、36	(3.7)	1.9 0.5
67	"	C、25	5.0	0.9 0.8	100	"	A、1	(4.7)	0.8 0.3

※ () は、現存値

7. 銅銭 (第37図)

今回の調査で、14枚の渡来銭が出土した。一枚は解説不可能で、銭種が判明したのは8種13枚であった。その内訳は天聖元寶2、元祐通寶1、政和通寶2、元豐通寶2、皇宋通寶2、景德元寶1、咸平元寶1、開元通寶2であった。銅銭の鑄造の上限を示すのは、開元通寶(初鑄は621年)で下限を示すのが政和通寶(初鑄は1111年)である。ただし、開元通寶は北宋時代の鑄造と考えられる。出土銅銭13枚(1枚解説不能)は北宋時代の渡来銭と考えられることができる。これらの銅銭はいずれも磨滅度が高く、十二分に通貨としての機能をはたしていたものと思われる。墓壇内からの出土は一枚もなく、中世後期からの埋葬習俗として知られる六道銭(銅銭の副葬)ではないと考えられる。銅銭の出土地点は西側に多く、遺構出土地と重なりあう。これには何らかの関係性があるものかと考えられる。また、これらの銅銭の出土土層はIV a 層(中



第37図 銅銭拓影図

第18表 銅銭一覧

拓本 番号	出土地点	銘	法量 (cm)			初 鑄
			直 径	孔 径	厚 さ	
1	A、 - 8	解説不能	—	0.50	0.10	— —
2	B、 1	天聖元寶	2.40	0.65	0.09	1023年 北宋
3	B、 4	元祐通寶	2.45	0.70	0.09	1086年 北宋
4	B、 11	政和通寶	3.00	0.60	0.14	1111年 北宋
5	B、 14	元豊通寶	2.25	0.80	0.08	1078年 北宋
6	C、 17	天聖元寶	2.45	0.75	0.10	1023年 北宋
7	D、 25	皇宋通寶	2.35	0.65	0.11	1038年 北宋
8	D、 30	政和通寶	2.50	0.60	0.11	1111年 北宋
9	E、 31	元豊通寶	2.40	0.60	0.12	1078年 北宋
10	F、 30	景德元寶	2.40	0.65	0.09	1004年 北宋
11	F、 38	咸平元寶	2.45	0.70	0.09	998年 北宋
12	F、 40	皇宋通寶	2.50	0.70	0.10	1038年 北宋
13	— 括	開元通寶	2.35	0.70	0.09	621年 唐
14	— 括	開元通寶	2.45	0.75	0.10	621年 唐

世層) からである。第37図4の政和通寶は直径3.0cm、孔径0.6cm、厚さ0.14cm、重量7.5gを測り、他の銅銭は直径2.45cm、重量3.0gを測る。約2.5倍の重量である。

この政和通寶は「折二」といわれる銅銭で、これ一枚で他の銅銭二枚と兌換できるのである。南宋銭、明銭の出土は見られなかった。

ここでは渡来銭のみを掲載した。今回の調査では、鳩目銭の出土も見た。これは第14図、第36図鉄銅製品実測図(4)に掲載しているのでその項を参照されたい。

8. その他の遺物 (第38・39図)

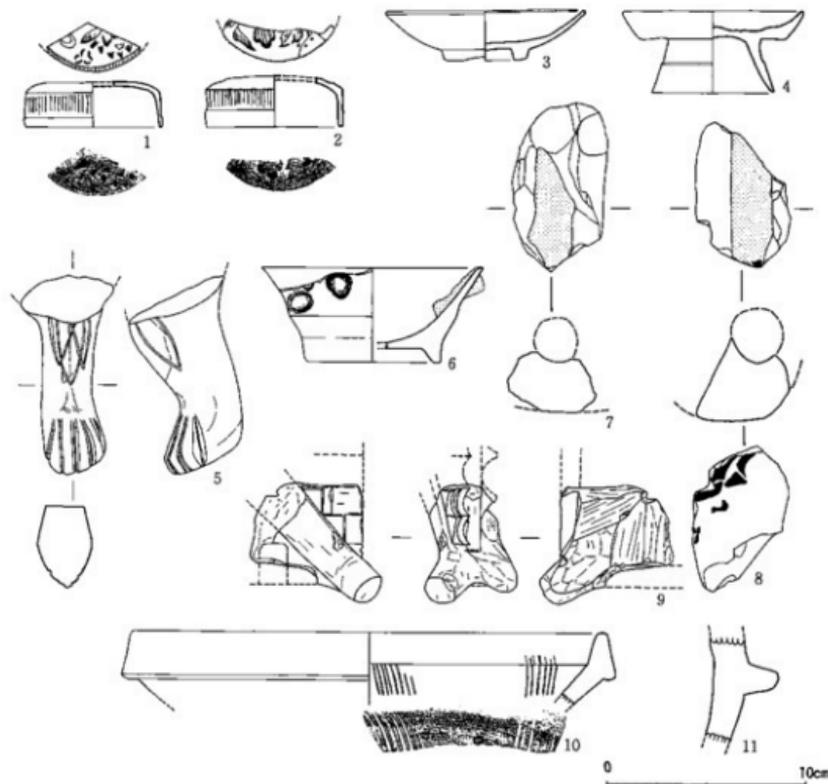
(1) その他の中世遺物 (第38図)

1は、合子の蓋で口径6.8cm、器高2.2cmを測る。頂部に花文スタンプが押され、胴部は1cm長さの簾状があり、口唇部外側に脹らみがめぐる。軸はこげ茶色を呈する。

2は、合子の蓋で口径6.8cm、器高2.5cmを測る。頂部に葉文スタンプが押され、胴部には簾状がある。胎土は精選され、器壁は薄い。軸は淡青灰色を呈する。

3は、切高台の白磁皿で口径10.0cm、高台径4.3cmを測る。器壁は薄く、大変に軽い。体部はなだらかに外傾しつつ立ち上がり、口唇部は尖ってとじる。

4は、脚付土師皿で口径9.0cm、器高4.1cm、脚高2.7cmを測る。皿部底部はロクロ回転による渦巻条痕を呈する。内面に煤付着が著しく灯明皿として使用している。



第38図 その他の中世遺物実測図

5は、獣足で高さ2.5cm、巾2.7cmを測る。土師質で赤褐色を呈する。火舎か浅鉢の脚として使用していたものと考えられる。

6は、高台付坏で高台径6.9cmを測る平安期に製作された坏であるが、中世では取瓶として使用している。内面には鉄滓、銅滓の付着が見られ、小鍛冶ないしは鋳造を行っていたものとかんがえられる。外面には径1.3cm、高さ0.6cmの鉄滓が付着している。

7は、ふいごの羽口の破片で孔径2.2cmと推定される。

8は、ふいごの羽口の破片 外径7.0cm、孔径2.5cmと推定される。内外面の一部にスラグの付着が見られる。

9は、瓦塔の隅棟の部分である。鳥舎、尾垂木、瓦部分の土師質製品である。

10は、備前焼のすり鉢で口縁部の破片で口径23.4cmを測る。口縁外面は下脹れ状に出っ張をもつ。内外面ともに横なでされており、内面には数状の節目をつけている。胎土には細砂粒を含む。色調は赤茶褐色を呈する。室町時代のものである。

11は、滑石製石鍋で胴部の破片である。1.5cm高さの凸帯を造りだしている。全体的に良く研磨されている。外面には煤が付着している。

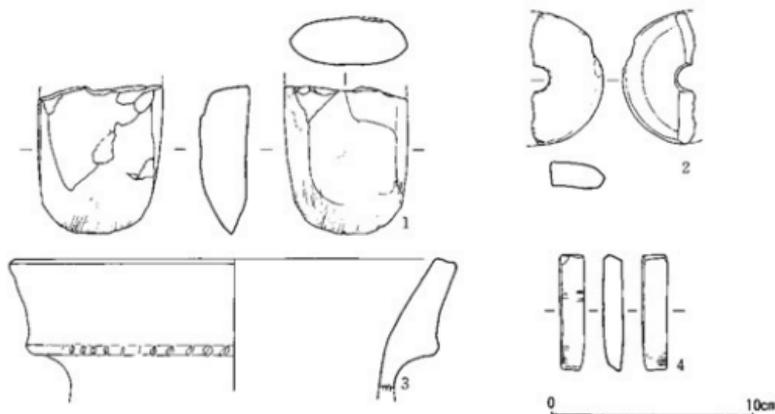
(2)その他の遺物

1は、磨製石斧で巾5.9cm、厚さ2.32cmを測る。両面を使用している。

2は、石製紡錘車で直径6.7cm、孔径1.2cmを測る。

3は、壺の口縁部の破片で口径22.4cmを測る。凸帯を貼付て二重口縁状にしている。

4は、石ノミで長さ5.8cm、横巾1.2cm、縦巾1.0cmを測る。



第39図 その他の遺物実測図

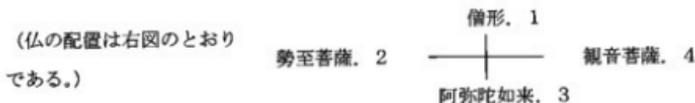
第3節 金石関係（第40図～第42図）

当遺跡出土の宝塔軸部と近接地の宝塔軸部を比較してみると当遺跡出土の宝塔軸部はあまりにも特異的なものであるために比定することはできない。

表土剥ぎ作業時にⅢ層の最下部よりバックフォーの爪にかかって宝塔軸部が出土した。その際、軸部の上部の首部がわずかに欠損した。

この宝塔軸部の断面は円形で首部をもっている。最大横幅×最大縦幅×高さは(25.5×25.5×47.8)cmである。首部は一見すると二段になっているが、上部はホゾを造り出したものである。一段目は、径14.4cm、高さ3.6cmと径9.6cm、推定高さ2.5cmを測る。軸部上部に0.2cm深さの2本の線刻がまわる。軸部下部にも0.2cm深さの1本の線刻がまわる。仏は長方形に彫り込んだ部分に浮き彫りにして、その外側を二重に大きい長方形の線刻で画している。

第40図が宝塔軸部である。軸部には四面に像を浮き彫りにしている。



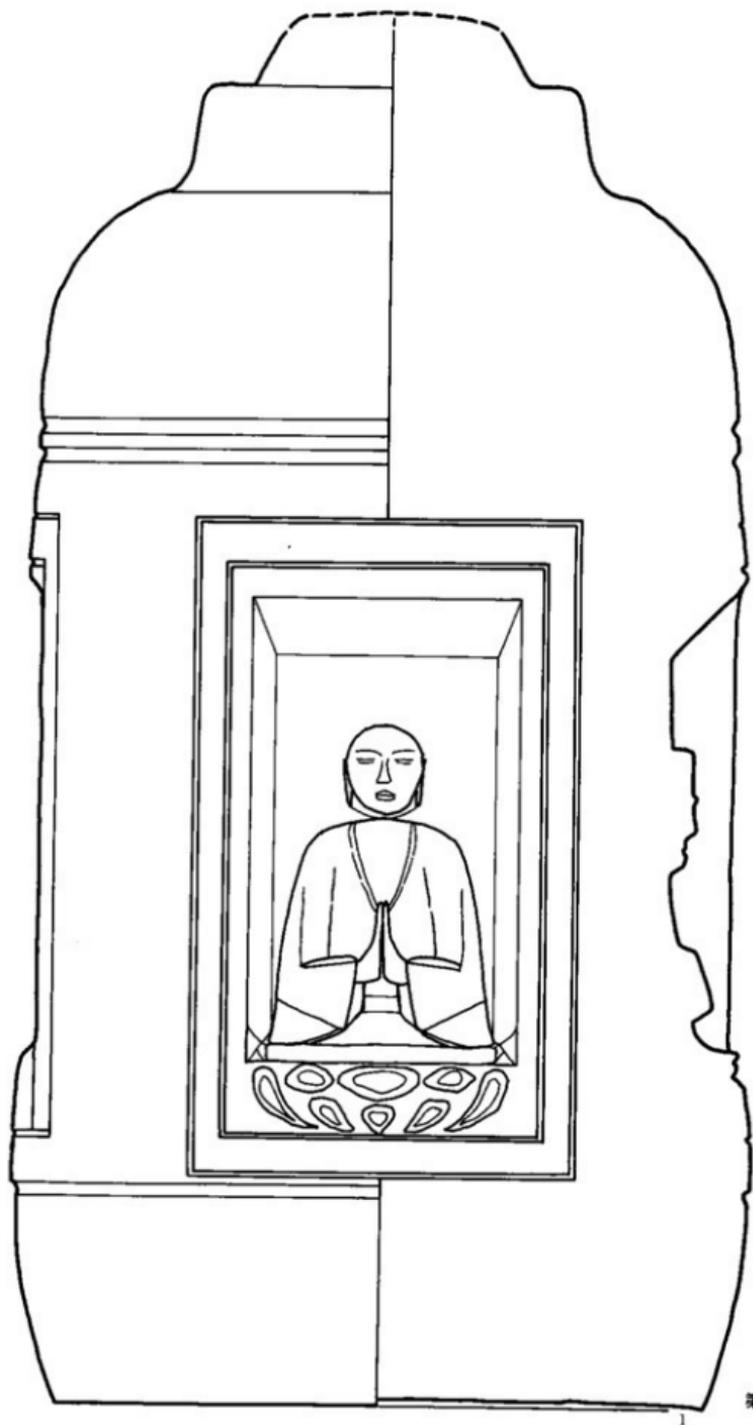
備形の他は阿弥陀三尊の仏を配したものである。備形の真裏には阿弥陀如来が座す。阿弥陀如来の左には勢至菩薩、右には観音菩薩を配している。

材質は大変に脆いが加工の容易な阿蘇溶結凝灰岩（馬門石）で、一般的に阿蘇ピンク石と言われるものであり、この種の軸部に用いられることは稀である。

1は2.6cm握り下げた部位に備形姿の仏を浮き彫りにしている。丸顔で頭髪はない。身には薄い衣をまとい胸前で合掌している。仏は蓮華座に着座している。座高は10.8cm、頭長2.8cm、肩幅5.4cm、手のひら長さ2.4cmを測る。蓮華座は幅8.8cm、高さ2.1cmを測る。深さ0.3cmの大変丁寧な彫りをしている。彫込み長方形の周りを二重の長方形線刻で囲む。2、3、4も同じ造りなので以下は説明を省く。この僧については不明である。

2は勢至菩薩である。3.0cm彫り下げたところに浮き彫りにしている。頭部には冠を頂き、額の中央部には白毫がある。薄い衣をまとっているが図にあらわすほど明確ではない。仏は蓮華座に着座している。座高は11.4cm、頭長4.4cm、肩幅4.4cmのかかりなので肩である。手は指部がわずかに欠損していて、胸前で合掌をしている。蓮華座は雑な彫りをしていて、幅9.8cm、高さ1.7cmを測る。

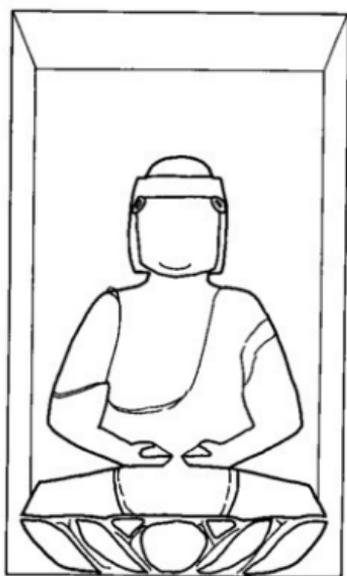
3は阿弥陀如来で三尊の中央に座す。4.7cm彫り下げたところに浮き彫りにしている。頭部は内髻、螺髪があり、耳は福耳で垂れ下がる。顔面部は欠損していて不明であるが、ふくよかさが伺える。左肩から腹部にかけて薄い衣を身にまとっている。左手の指部の一部が欠損してい



第40图 宝塔实例图



2



3



4



たが、阿弥陀定印を結んでいたと考えられる。蓮華座に着座し、座高は12.2cm、頭長4.2cm、肩幅5.2cmを測る。蓮華座はやや雑な彫りをしている。

4は観音菩薩である。2.7cm彫り下げたところに浮き彫りしている。四仏のなかで最も小さいサイズである。頭部には勢至菩薩の冠より長い宝冠を頂いている。左肩から腹部と薄い衣を身につけている。手は腹前において、その上に蓮華をのせている。蓮華座部分は全く彫り込みが見られない。

この付近には中世からの色々な石造物が見られる。当遺跡で出土した宝塔の軸部も近接地に類似したものがあるが、年代については不明である。

嘉島町下仲間神社 宝塔、五輪塔 (凝灰岩)

嘉島町犬淵薬師堂 宝塔 (安山岩)

嘉島町下仲間小堂宇 宝塔 (安山岩)

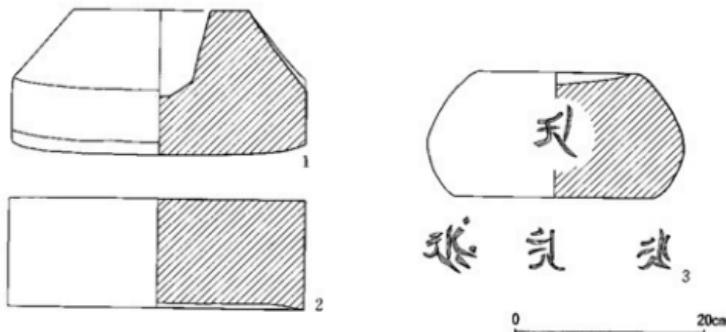
上記の宝塔軸部の仏の配置、種類、軸部の形態、石質などについては異にする部分もあるが年代については大きなずれはないように考えられる。

この宝塔軸部は浄土教の色合いが大変に濃いもので、宝塔に阿弥陀三尊を刻むものは非常にめずらしい。この備形は、宝塔を安置していた寺院の開祖か、高僧か、或いは施主ではないかとも考えられる。

第41図、第42図は五輪塔である。

1は火輪である。底部(31.2×31.0)cm、上部(18.5×18.3)cm、

脚穴上部径10.8cm、深さ9.2cmに将棋状に尖った割りである。軒幅5.6cmで軒隅は反り上がる。軒先下は1.4cm、屋根流れは直線である。全体的に安定感がある。様式は鎌倉後期～南北朝時のものと考えられる。石質は阿蘇溶結凝灰岩である。



第41図 五輪実測図(1)

2は地輪である。時代は不明で、最大幅(31.5×31.5)cm、高さは11.6cmを測る。下部にわづかな削りが入っていて安定感がある。石質は阿蘇溶結凝灰岩である。

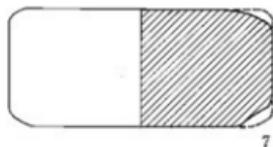
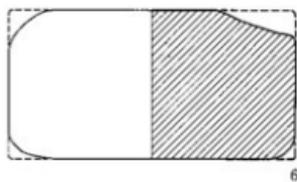
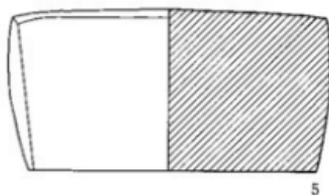
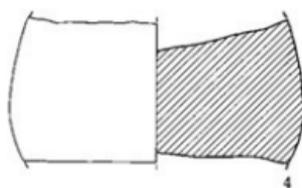
3は水輪である。梵字などから戦国時代のものと見られる。下部径21.2cm、上部径17.2cmを測る。中央部の最大径は27.2cmを測る。上部にわづかに削りがはいつている。また、四面には胎藏四佛の梵字がはいる。梵字は基の字を大きくくずしている。東は(𑖀)、南(𑖀)、西(𑖀)、北(𑖀)である。石質は阿蘇溶結凝灰岩である。

4は水輪である。最大径32.8cmを測る。欠損がひどく、表面の風化がはげしく梵字の有無は確認できない。石質は阿蘇溶結凝灰岩である。

5は地輪である。最大幅(31.5×31.5)cmを測り、高さ11.6cmである。石質は阿蘇溶結凝灰岩である。

6は地輪である。最大幅(29.5×29.2)cmを測り、高さ13.0cmである。欠損部分がかなりある。石質は大変に脆い阿蘇溶結凝灰岩である。

7は地輪である。最大幅(26.5×28.8)cmを測り、高さ12.6cmである。石質は阿蘇溶結凝灰岩である。



0 20cm

第42図 五輪塔実測図(2)

第三章 調査のまとめ

当遺跡から発見された中世の遺構は、井戸1基、墓墳1基、集石土坑1基、溝5条、土坑12基、ピット多数等からなっている。

遺物は多岐にわたり土師器、須恵器、瓦質土器、土錘、鉄・銅製品などがある。特に土師質土器、中国陶磁器の豊富さは他の遺跡を圧するものがある。また、五輪塔、宝塔軸部も発見された。

(1) 遺構について

C16区から井戸が発見された。掘方上面は1.7m×1.6m、深さは0.9m+αmである。内部から青磁碗片(鏡蓮弁文)、角釘、五輪塔の火輪、地輪の各1個が出土した。青磁片は13~14世紀に中国でつくられ輸入されたものであり、火輪の形態は鎌倉末期の特徴を呈する。埋土も中世層のものであった。

F34区から墓墳が発見された。掘方上面は1.0m×1.2m、深さは0.2mである。内部から刀子茎片、小刀の完形品、白磁碗片(玉縁)、人骨(男性、30歳代後半)が出土した。白磁片は12~13世紀に中国でつくられ輸入されたものである。埋土も中世層のものであった。

E27区1号土坑は掘方上面0.6m×1.1m、深さ0.3mである。瓦質土器・碗の胴部が1点出土した。碗は中世のものであり、埋土も中世層のものである。

C25区1号集石土坑で、掘方上面は0.9m×1.0m、深さ0.4mである。遺物の出土はなかった。礫は拳ふたにぎりの大きさで、埋土は中世層のものであった。

他の土壇も浅いものが多く、埋土はいつでも中世層のものであった。遺物は発見されなかった。

ピット群は直径20~40cmの平面形が円形で、建物の復元はできなかったがかなりの数を検出した。69ヶ所のピットの埋土の中から土器片が出土した。土師質土器片、瓦質土器片、須恵質土器片等の混入物がみられた。

溝は5条発見され、2号溝から白磁碗片(玉縁)が出土した。これは12~13世紀に中国でつくられ輸入されたものである。類例の少ないものとして、鳩目銭2点が3号溝から出土した。円径1.7cm、孔径0.6cmの方形、厚さ0.1cm、0.05cmを測る。通常貨幣よりやや小さく、流通したのではなく、祭祀などに用いたものではないかと考えられる。5条の溝の埋土はいつでも中世層である。

(2) 遺物について

土師器、須恵器は少量出土した。回転へら切離しの土師器2点、黒色研磨土器、坏、高台付坏、蓋等である。器形、高台の形態等から最古のものは7世紀後半であるが、量的には8世紀

代のものが多い。黒色研磨土器は12世紀前半のものである。いずれもIV b層（古代層）からの出土である。

青磁・白磁は120点の出土をみた。因にできたものは84点で、青磁54点、白磁30点である。中国の宋代につくられ輸入されたものがほとんどである。青磁碗（鏡連弁文）の出土が20点を数えた。時代ごとの出土割合は、12～13世紀48%、13～14世紀35%、14～15世紀14%、15～16世紀3%である。

須恵質土器は5点の出土をみたが、いずれもIV a層（中世層）からのものである。

土師質土器は多く出土した。作図掲載できたのは60点である。これらは3形態に分けることができるが、皿43%、坏41%、大型坏16%の割合である。皿には煤の付着するものが多く、灯明皿として使用されていたものと考えられる。袖珍土器の無形壺、土師質鉢各1点ずつが出土している。これら土師質土器はIV a層（中世層）からのものである。

瓦質土器・碗は11点出土した。高台の断面形は三角形、長方形等と多種である。色調は黒色、灰色系である。内面には暗文風のヘラ磨きが顕著にみられないので瓦質土器とした。IV a層（中世層）からの出土である。

瓦質土器はすり鉢、こね鉢、湯釜、火舎等が出土しているが、いずれも使用された痕（煤の付着や磨耗など）があった。

土鍾は165点の出土があり、形態は紡錘型が約6割を占める。これらの管状土鍾は目の細かい網につけられ付近の河口等で、刺網漁法か定置漁法に用いられたものと考えられる。材質はすべて土師質であり、IV a層（中世層）からの出土である。

鉄・銅製品もかなりの出土があり、鉄滓、フイゴの羽口などから当地区で小鍛冶を行い建築部材を製造していたものと考えられる。角釘、棒状の鉄製品、鋸、刀子、小刀、紡錘車軸、鉋、火打鉄等の鉄製品の出土があり、角釘が約5割を占めた。また、銅製品として鳩目銭、銅銭、銅ピン、銅製装飾品の出土があり、当遺跡から銅滓の付着した取瓶が発見されたことにより当地で製造されていたものもあると考えられる。

中国の輸入銅銭は14枚出土した。ほとんどが北宋で鑄造されたものである。

合子、獣足、瓦塔、備前焼のすり鉢、滑石製石鍋（長崎県に生産地あり）も出土している。

金石関係では宝塔輪部が出土し四面に阿弥陀如来、勢至菩薩、観音菩薩（阿弥陀三尊）、僧形を配して浄土教の色合いが濃い。材質は赤色をなす阿蘇溶結凝灰岩（馬門石）である。13世紀後半～14世紀初頭頃の製作と考えられる。五輪塔の火輪、地輪も発見された。材質は阿蘇溶結凝灰岩である。

(3) 遺跡の性格

最後に遺跡の性格について考えてみたい。

当遺跡の近接地に津留めがあり、加勢川を利用する近世の水運が考えられるが、このような

水運は歴史的に遡上すると考えられる。出土遺物（大量の輸入陶磁器や他国製品等）もその事実を裏付けている。

この一帯は中世には河尻荘に属すると考えられるが、平安末期頃から木原氏が木部あたりを行動範囲としている史料がある（「肥後国訴状写」）。さらに鎌倉期以降になると、北条氏のもとで徐々に後退していった木原氏に代わり河尻氏が力を伸ばしている。

本遺跡の考古資料は主に、この河尻氏の活動にかかわる資料だと考えられる。今後の分析によって木原氏および河尻氏の対外交渉を知ることができるであろう。

参考文献一覧

1	平原・野中遺跡調査報告書	高木正文	熊本県教育委員会	1980
2	興善寺Ⅰ調査報告書	野田拓次	熊本県教育委員会	1980
3	興善寺Ⅱ調査報告書	江本 直	熊本県教育委員会	1980
4	天道ケ尾遺跡（1）調査報告書	西住欣一郎	熊本県教育委員会	1989
5	高橋南貝塚調査報告書	松本健郎	熊本県教育委員会	1978
6	江津湖苗代津遺跡調査報告書	緒方 勉	熊本県教育委員会	1974
7	赤見前田遺跡調査報告書	豊崎晃一	熊本県教育委員会	1981
8	川尻旧藩時代船着場調査報告書	今村勝彦	熊本市教育委員会	1982
9	大慈寺記	小山 正	大慈寺記刊行会	1968
10	徳力遺跡調査報告書	栗山伸司	北九州市教育文化事業団	1984
11	博多17調査報告書	大庭康時	福岡市教育委員会	1991
12	有田・小田部調査報告書第5集	井沢洋一	福岡市教育委員会	1984
13	山内石塔群調査報告書	岩永哲夫	宮崎県教育委員会	1984
14	原色陶器大辞典	加藤唐九郎	淡交社	1972

写真図版

図版 1



調査区をのぞむ



1号溝

2号溝

3号溝



E29区

1号・2号・3号土坑

D29区

1号土坑

图版 2



1号溝



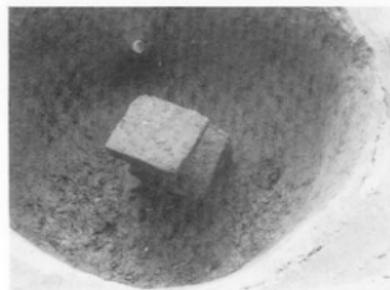
2号・3号溝



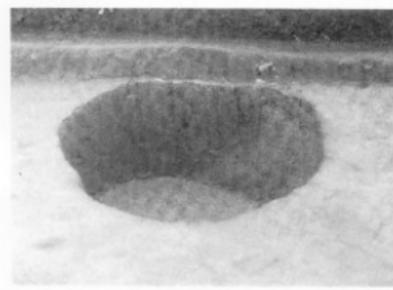
4号溝・集石土坑



5号溝



井戸 (C16区)



井戸完掘 (C16区)



墓塚 (人骨・F34区)

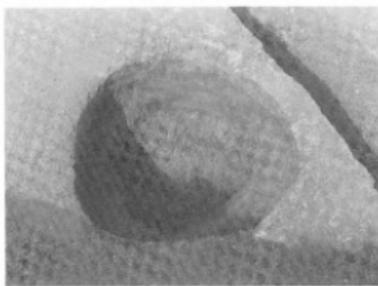


墓塚 (F34区)

図版 3



集石土坑 (C25[K])



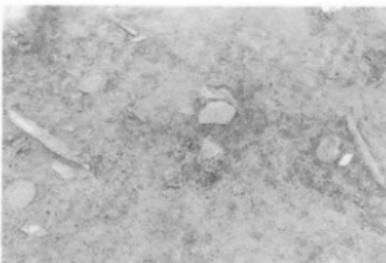
集石土坑完掘 (C25[K])



E30区 2号・3号土坑



D29区 1号土坑



遺物出土状況 (D31[K])



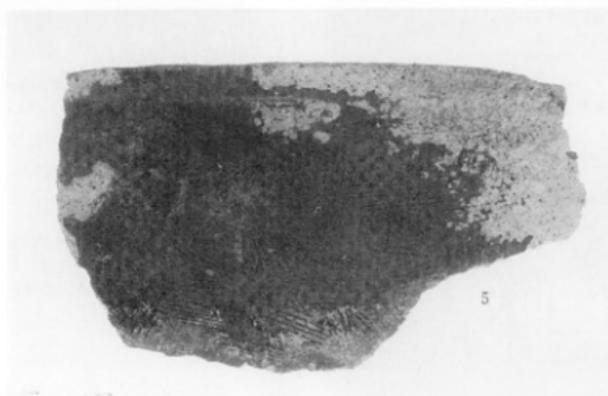
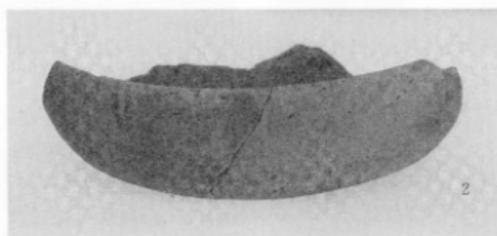
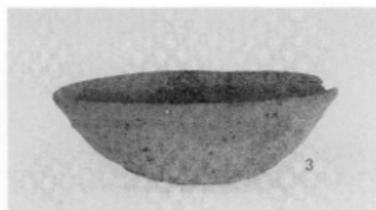
遺物出土状況 (D24[K])



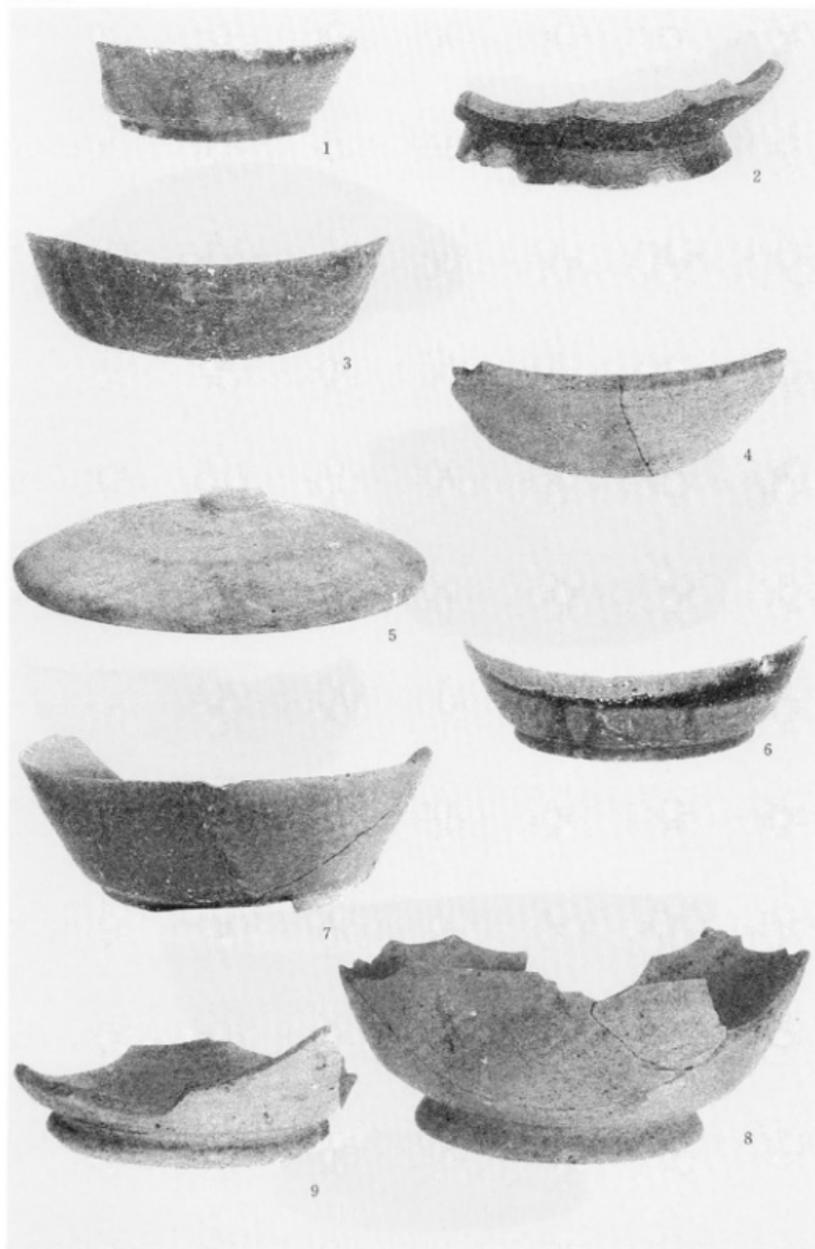
作業員の皆様

発掘作業員の皆様ありがとうございました。
整理作業を経て、本報告書が完成しました。
携わってこられた皆様方に深く感謝いたします。

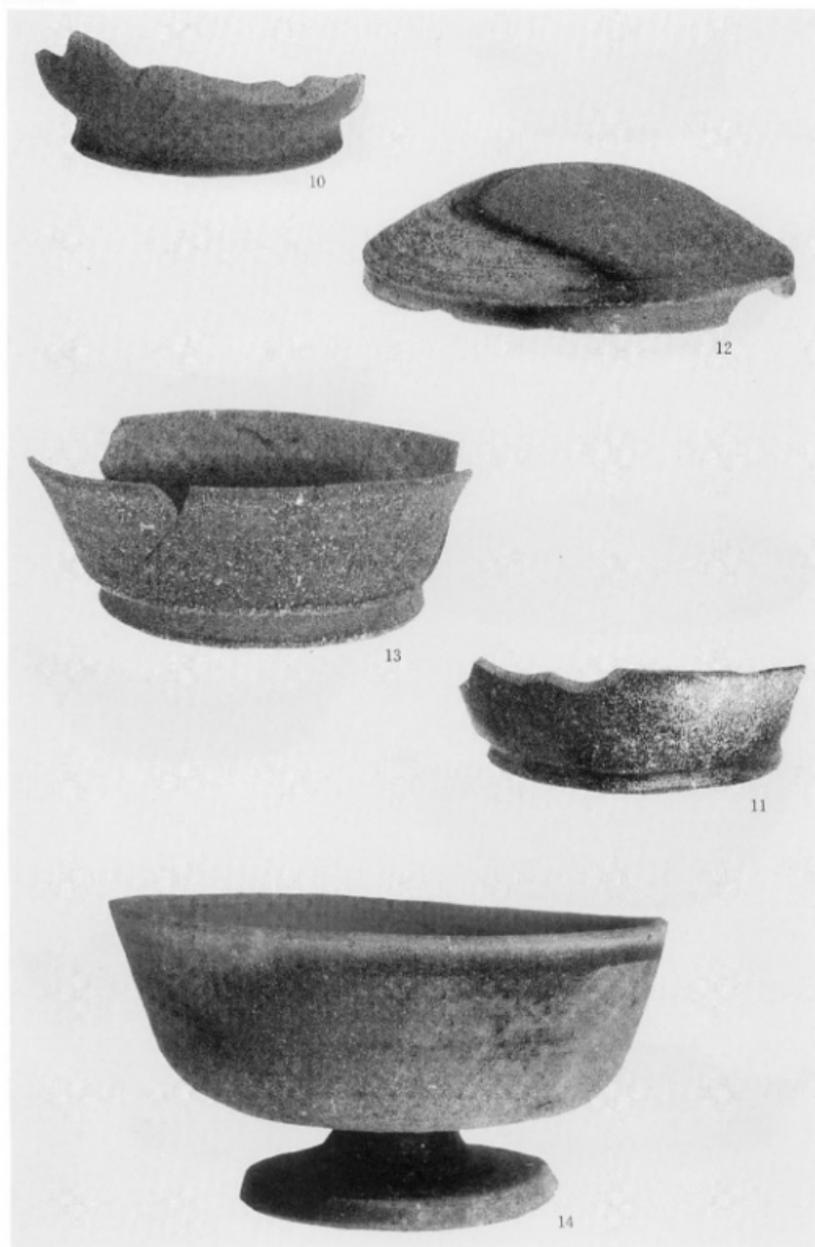
図版 4



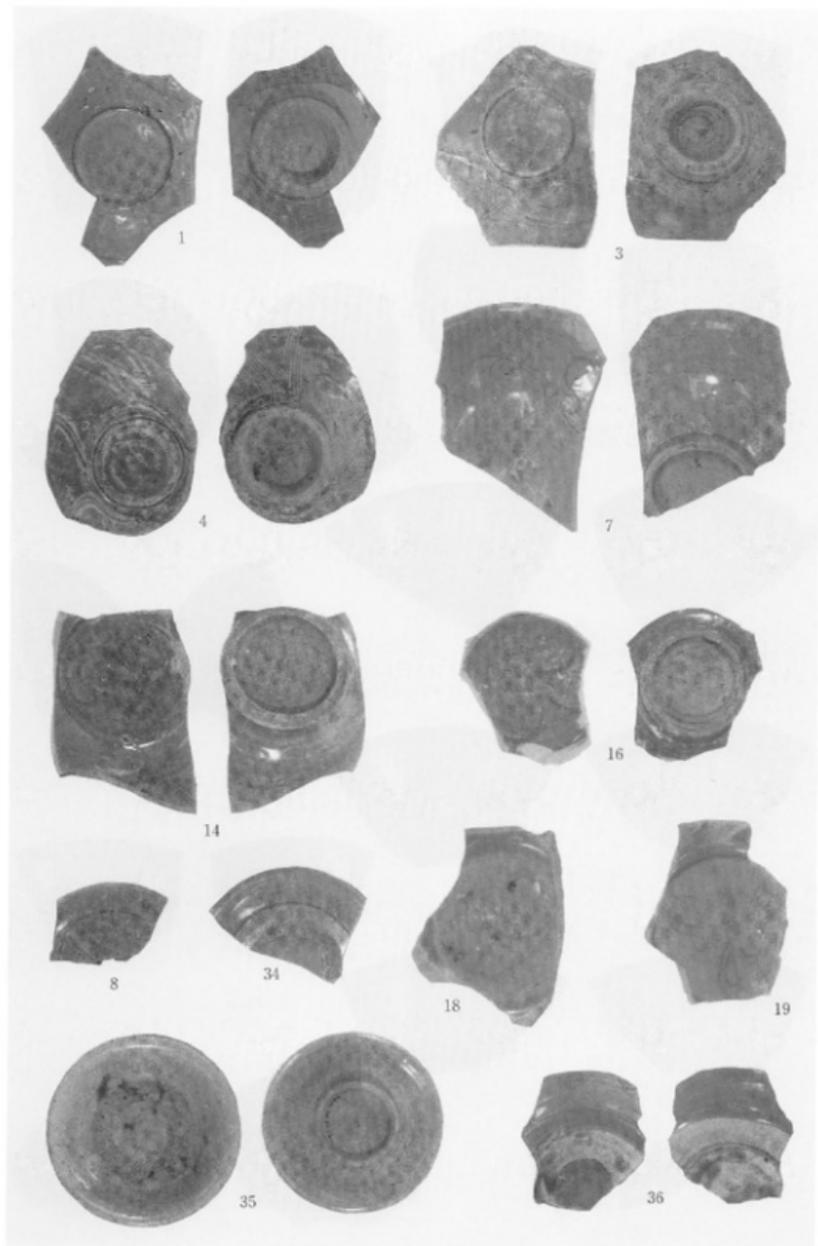
土 師 器 (第 7 図)



図版 6



須惠器 (第8圖)



图版 8

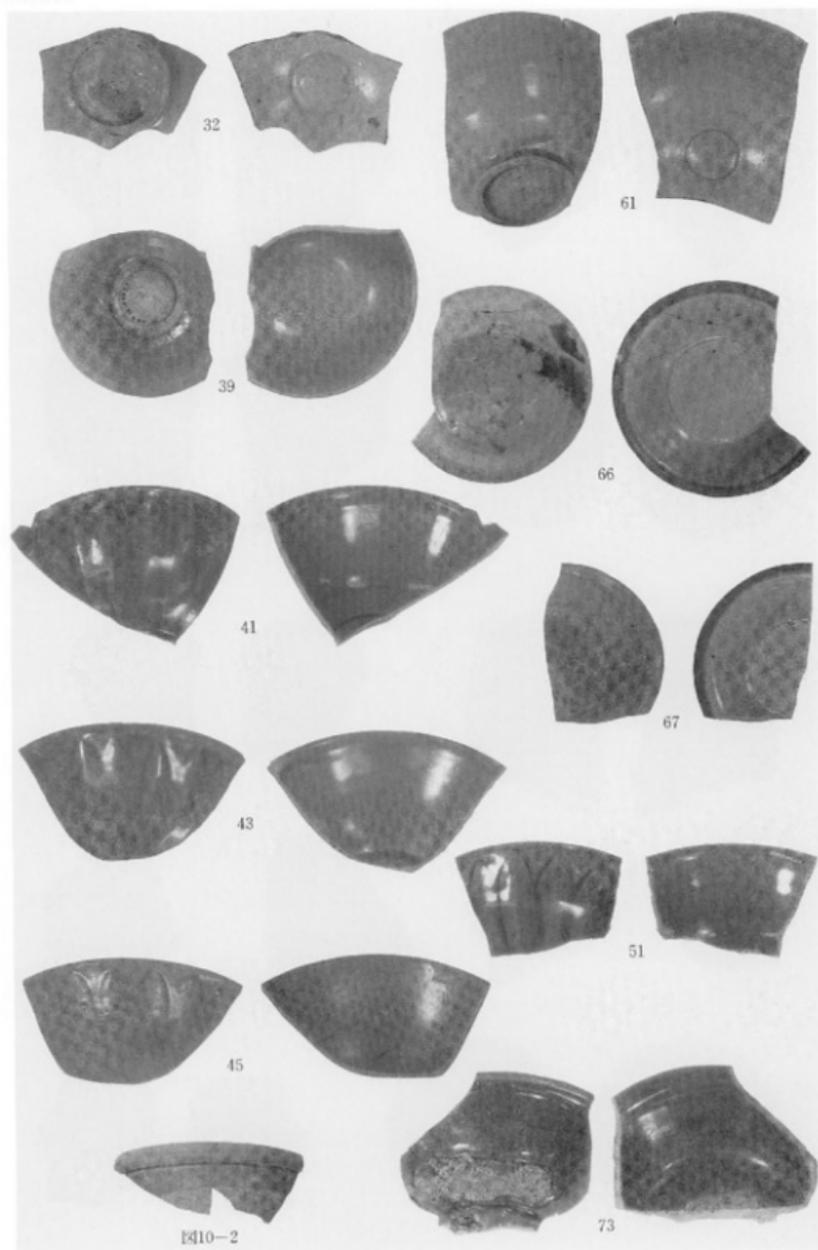
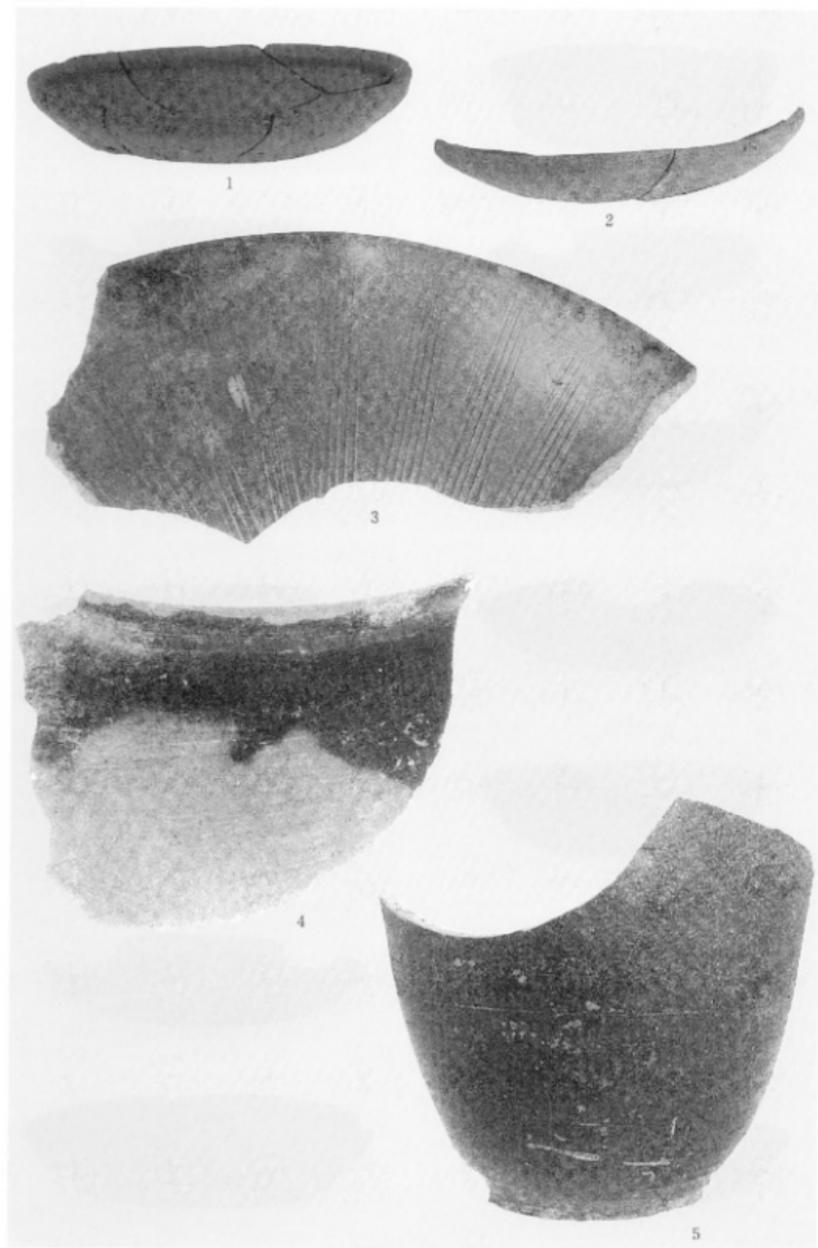
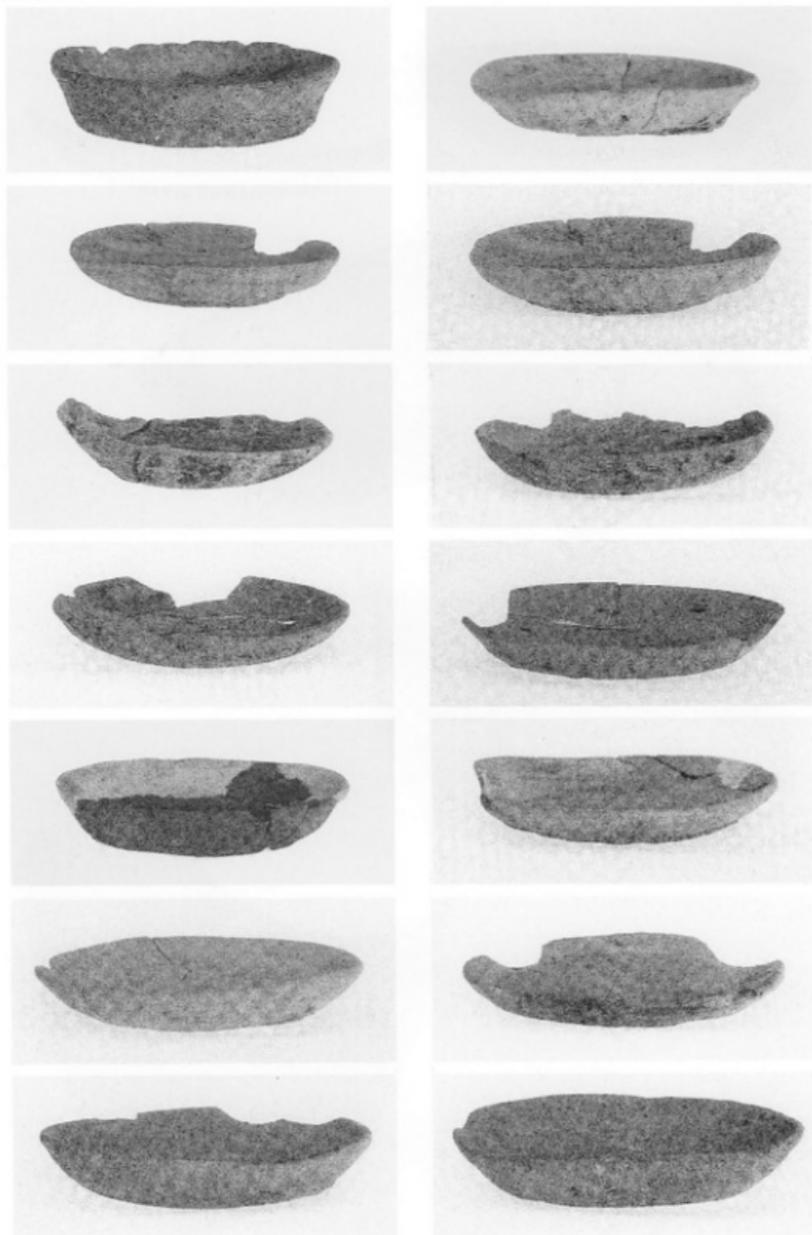


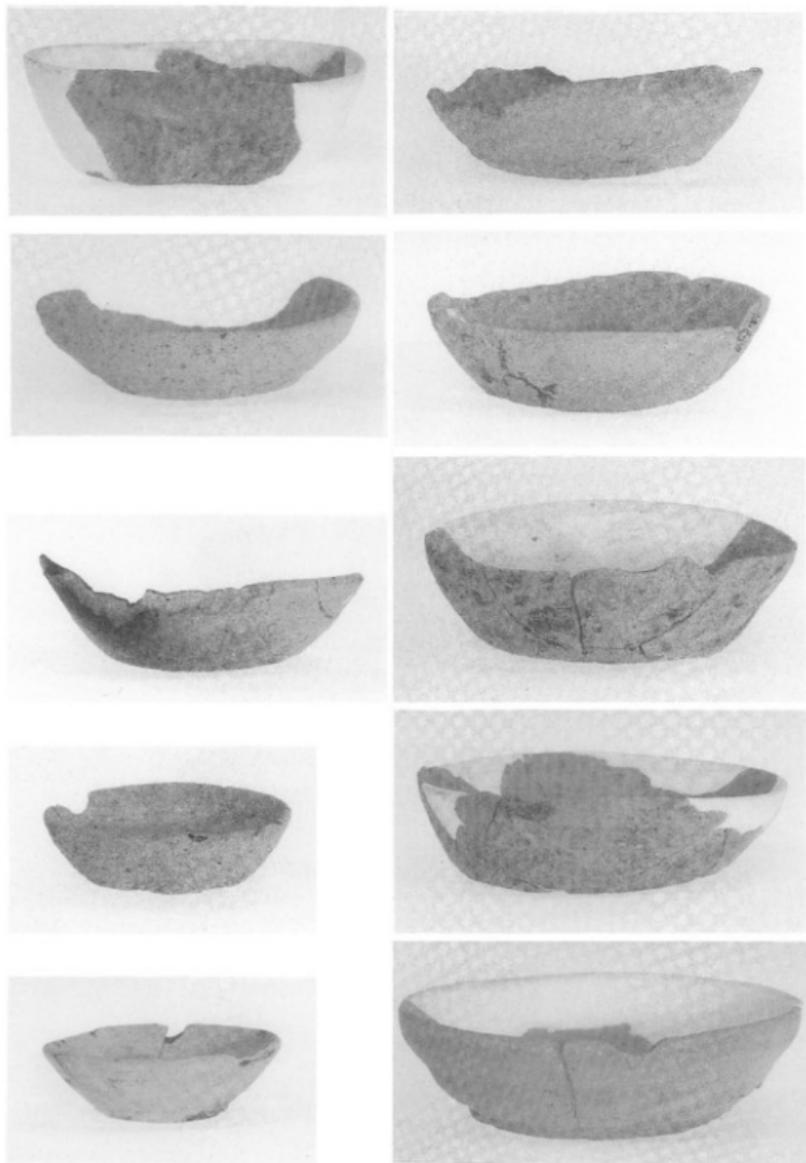
图10-2



須恵質土器 (第20図)

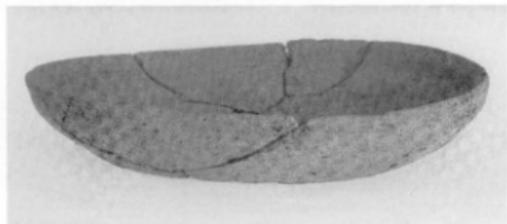
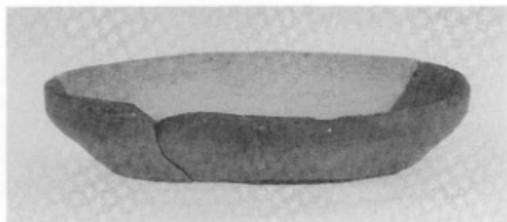
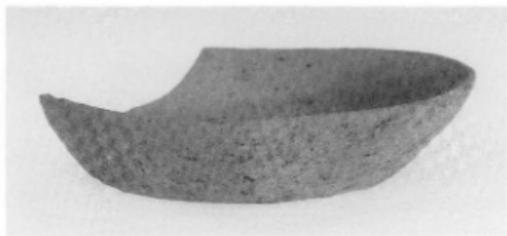


图版11

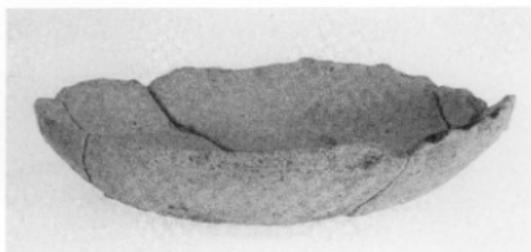


土師質土器・坏 (第22图)

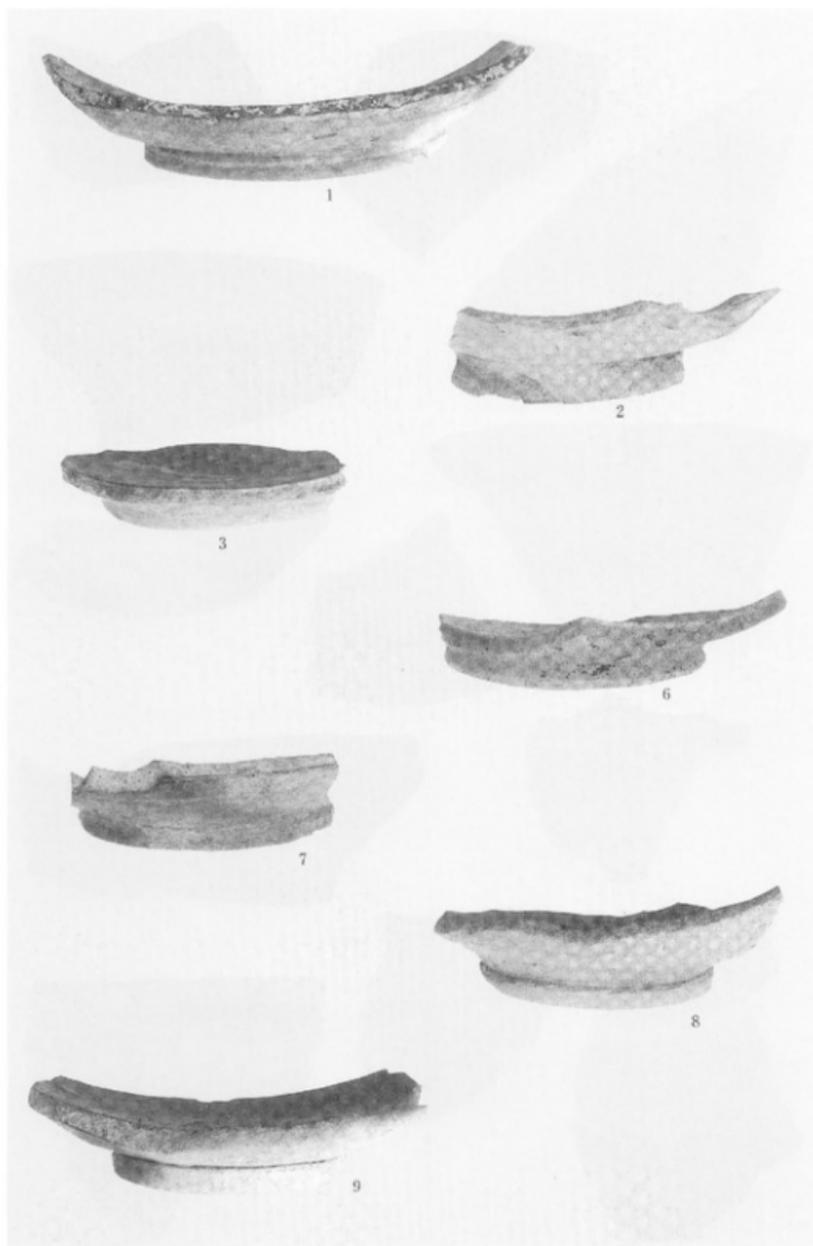
图版12



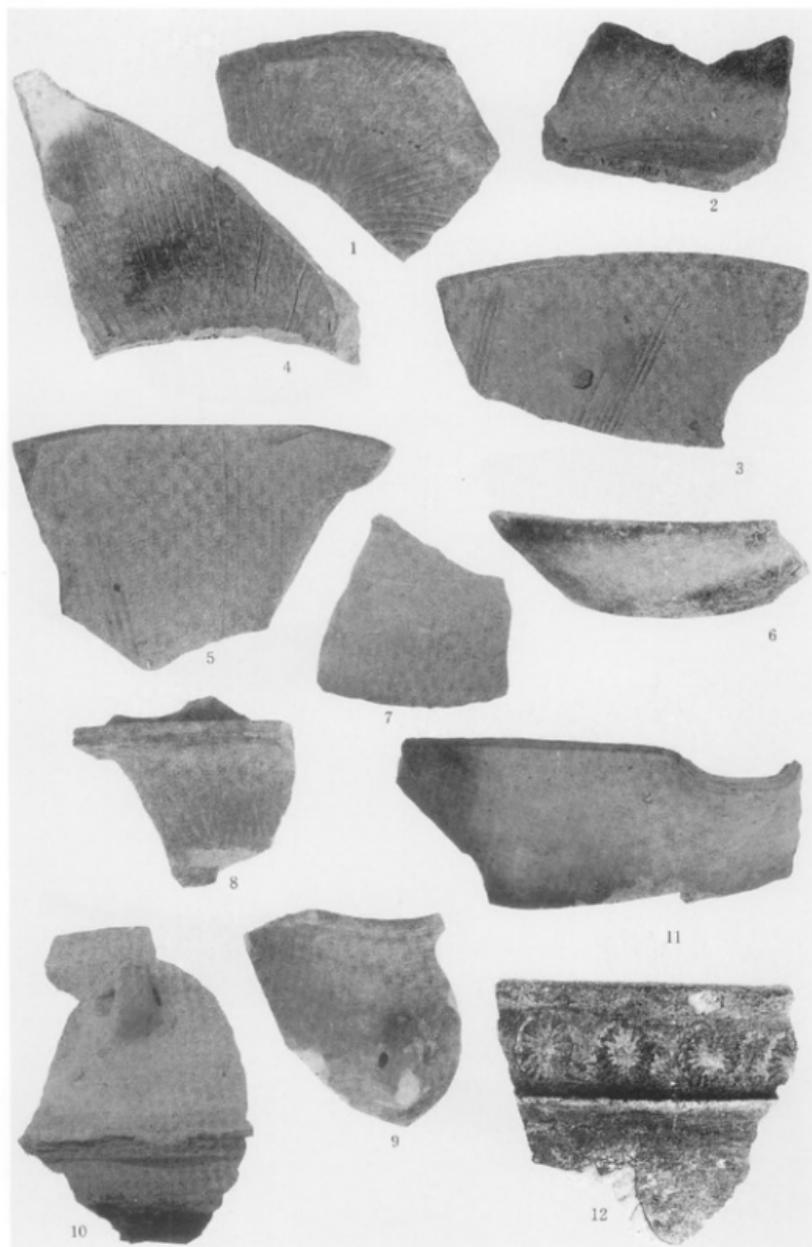
無頸壺

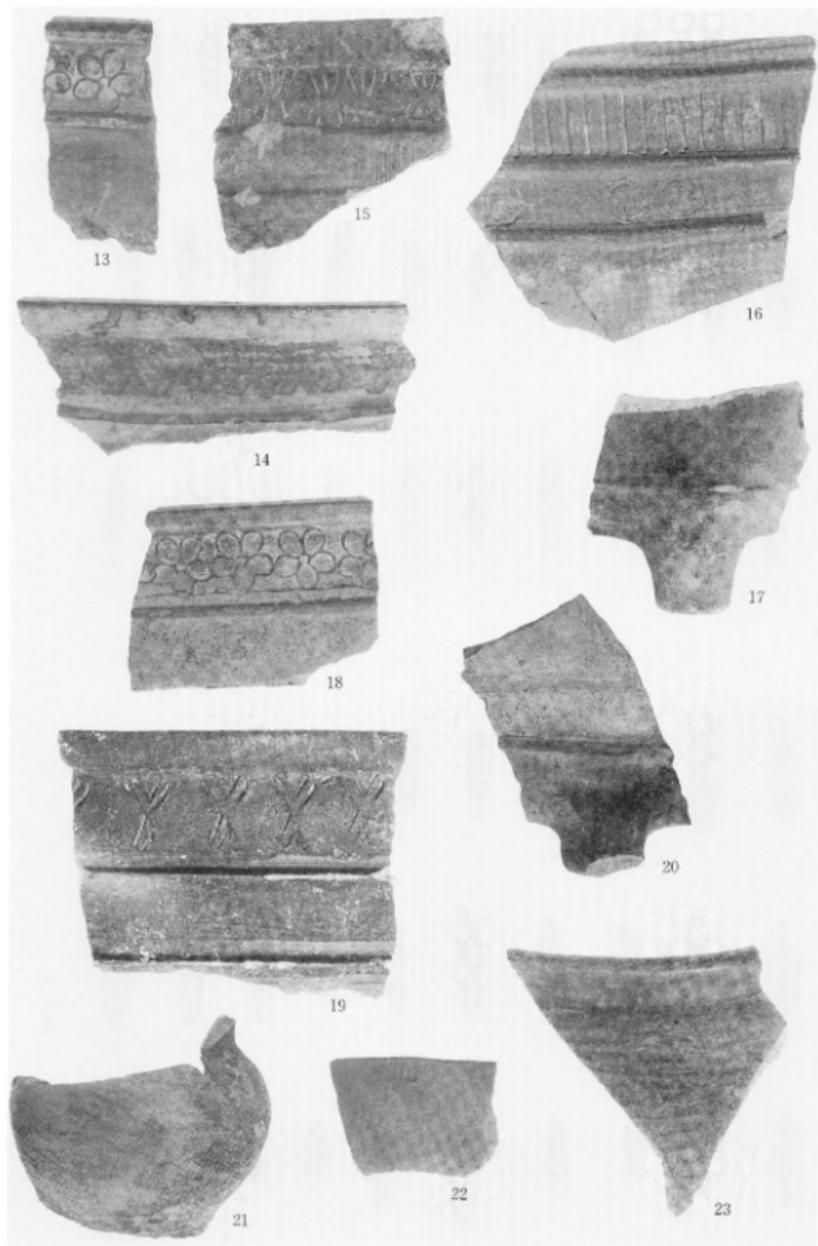


土師貫土器・大型坏 (第23・24图)



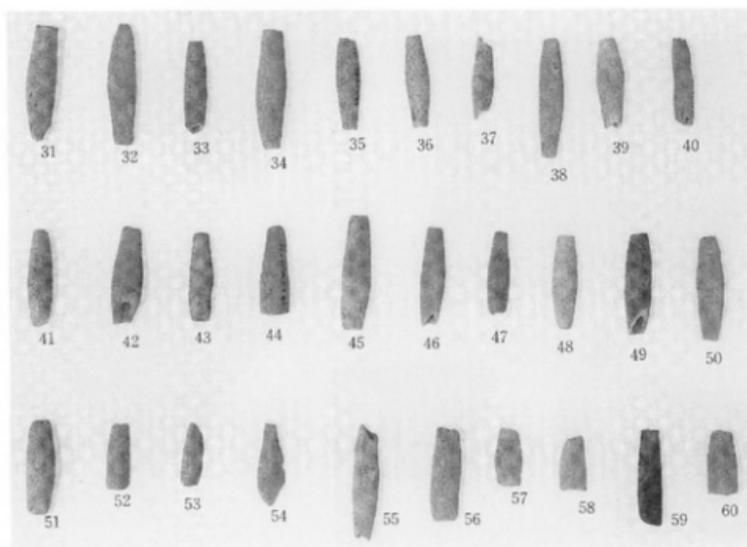
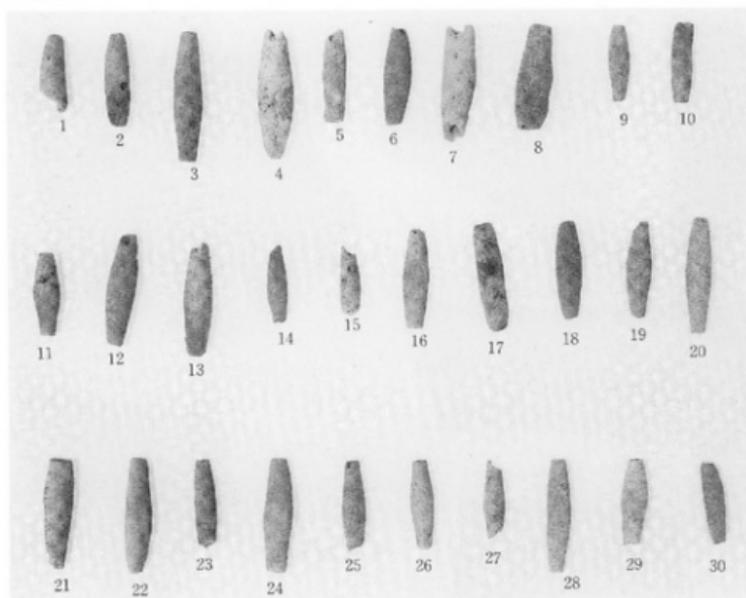
瓦質土器・碗 (第25回)





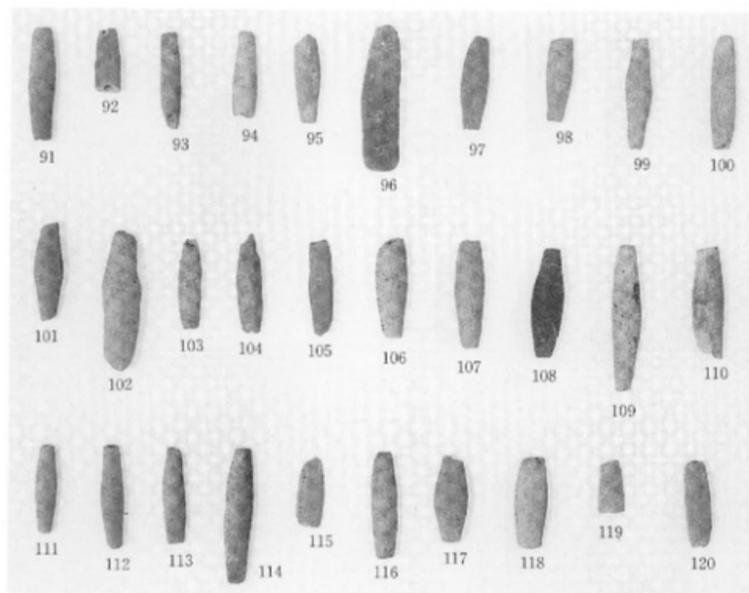
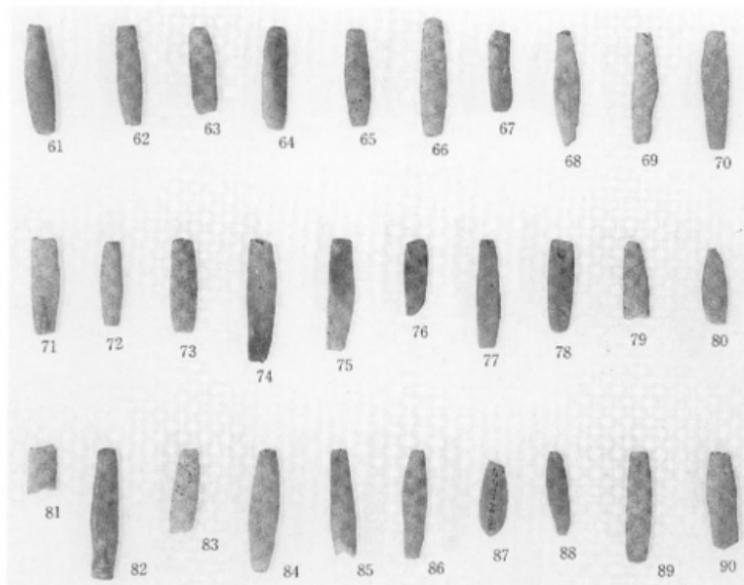
瓦質土器 (第27圖)

图版16

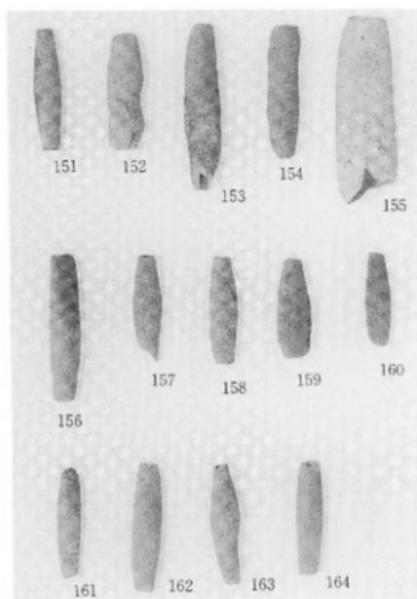
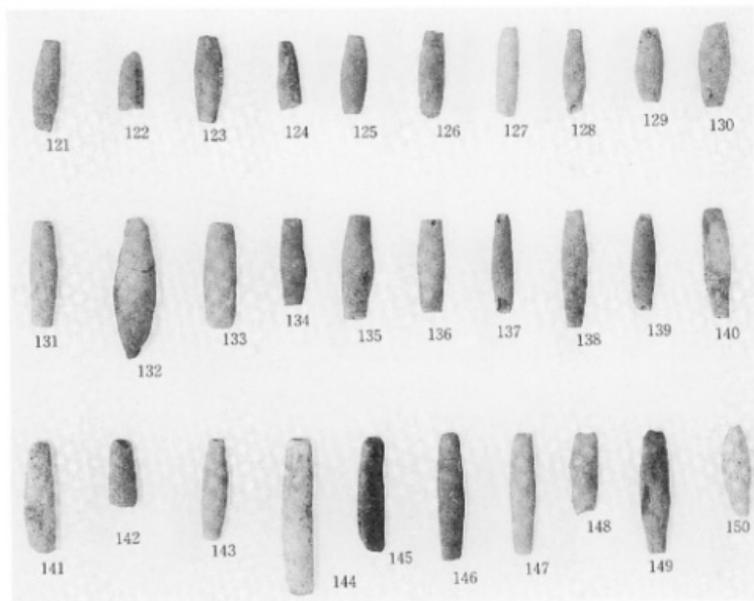


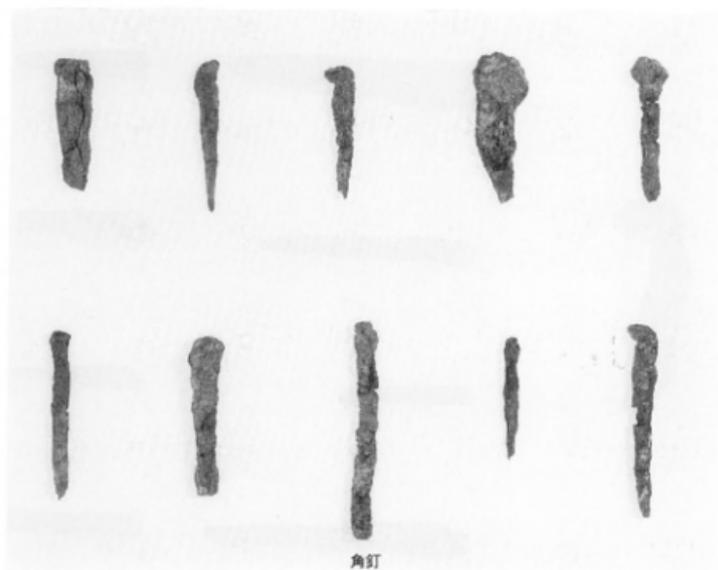
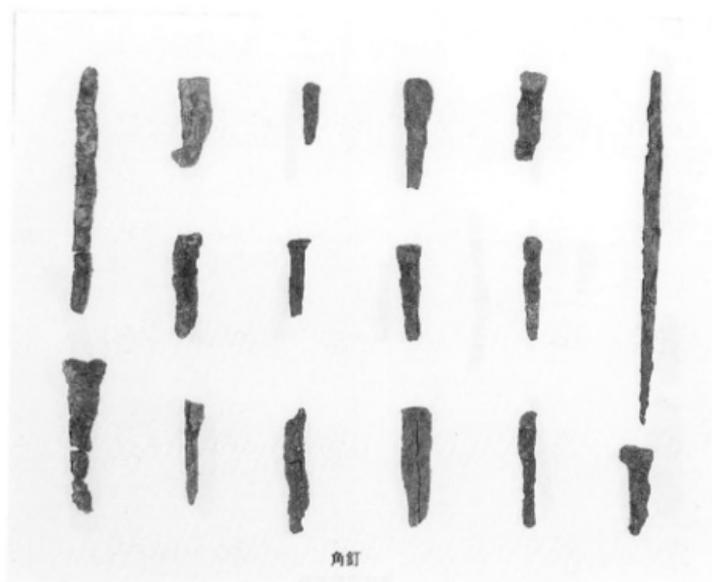
土 錘 (第29・30圖)

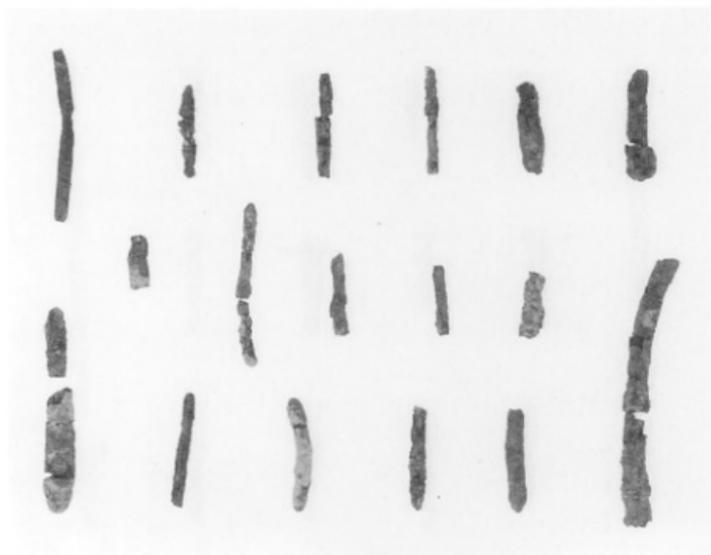
图版17



图版18







棒状の鉄製品



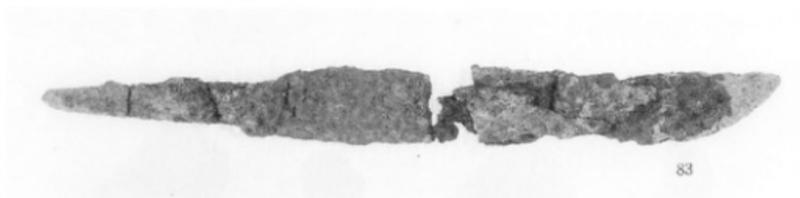
66



刀子茎片

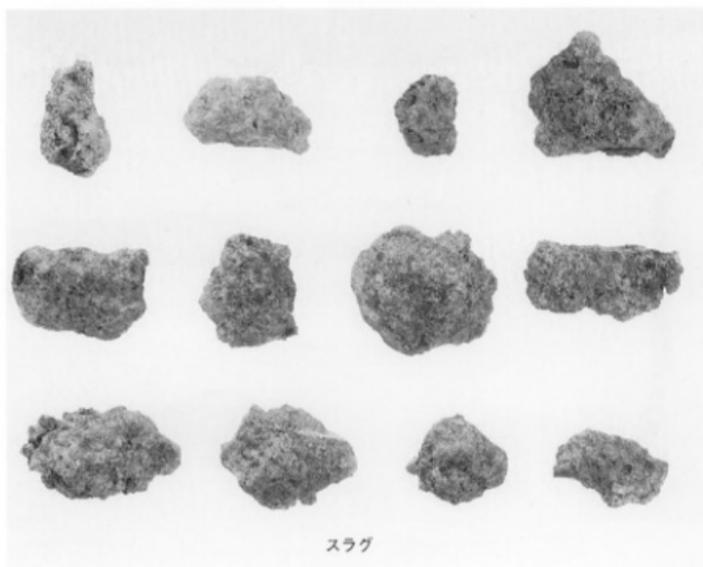
鉄・銅製品 (第34・35図)

图版21





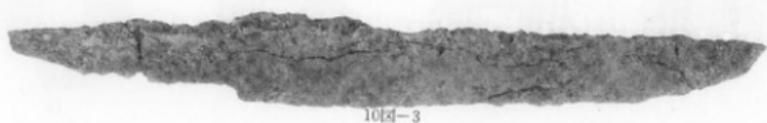
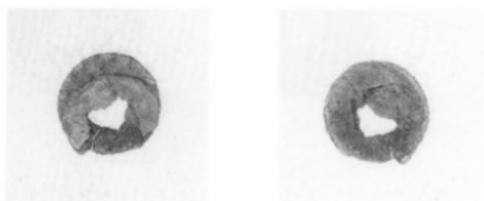
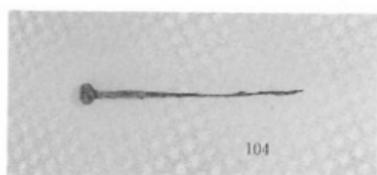
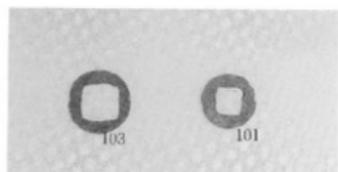
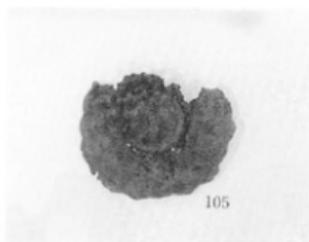
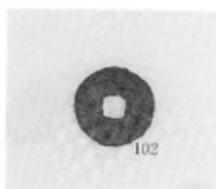
不明の鉄製品



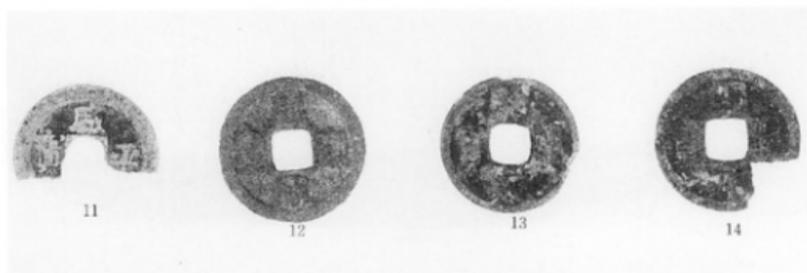
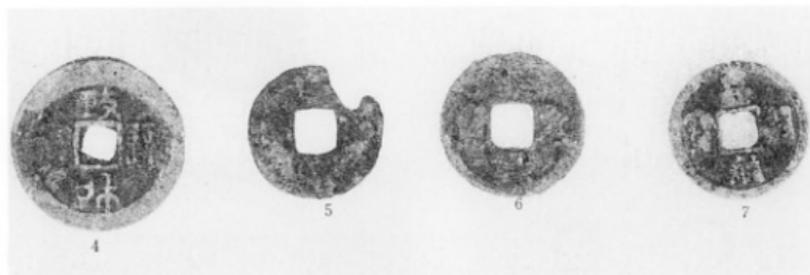
スラグ

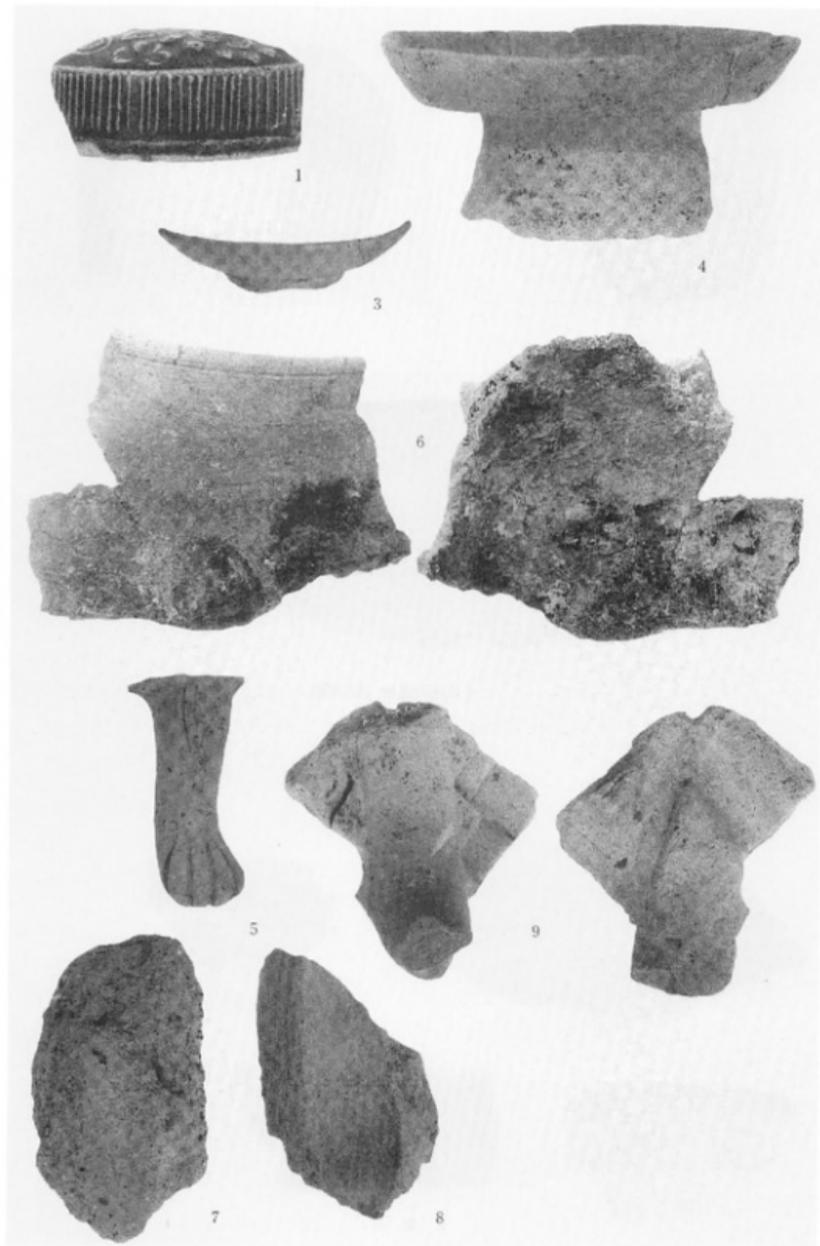
鉄・鋼製品 (第36回)

图版23

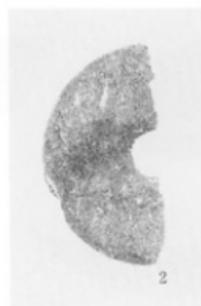


图版24

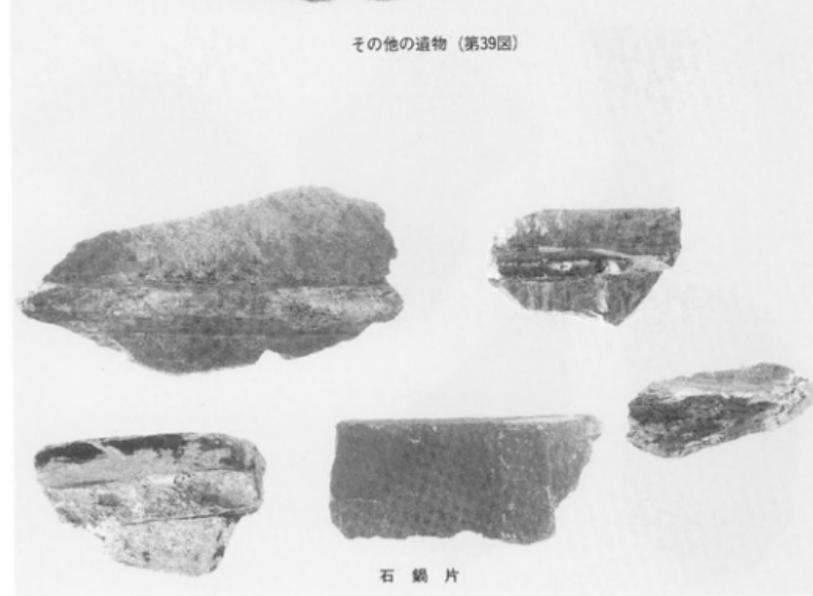




その他の中世遺物 (第38回)



その他の遺物 (第39図)





1



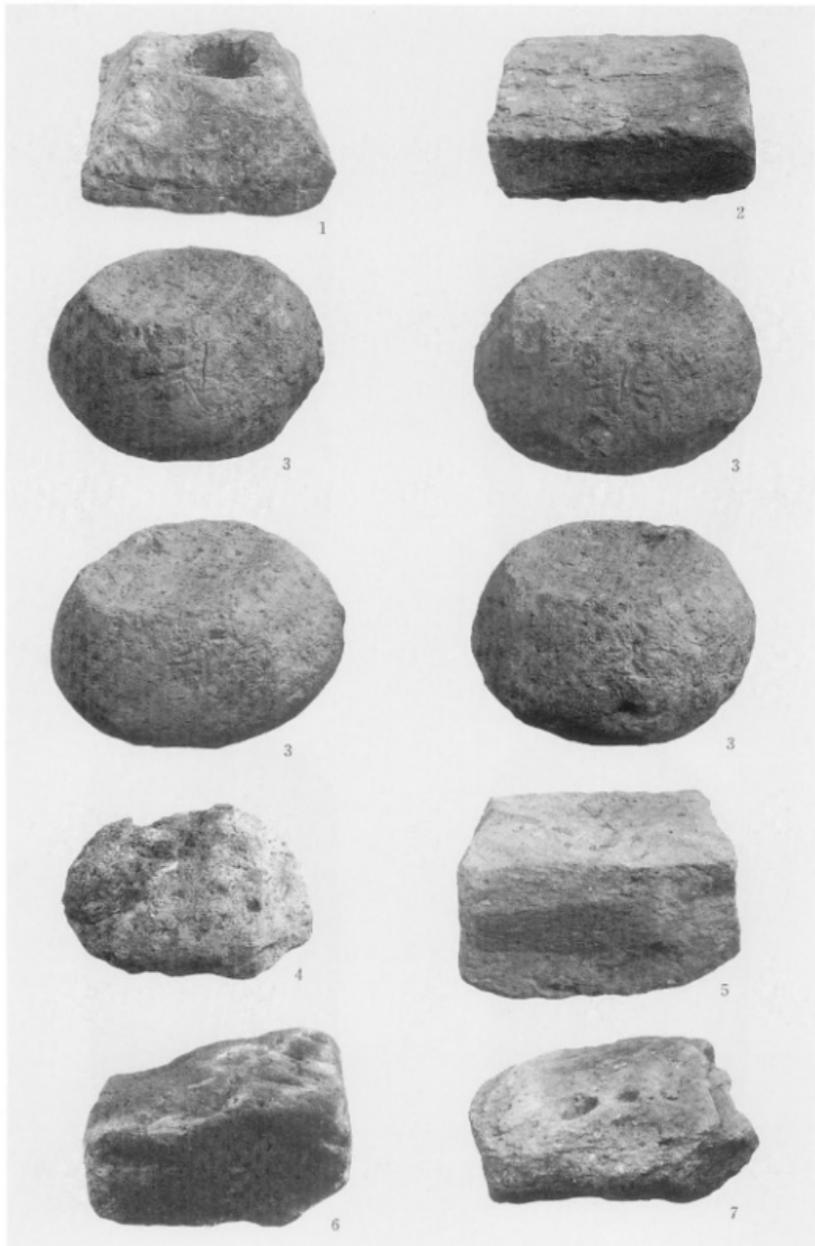
2



3



4



五輪塔(第41・42圖)

報 告 書 抄 録

フリガナ	ミュキキベ フルヤシキ イセキ
書 名	御幸木部古屋敷遺跡 I
副 書 名	加勢川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
巻 次	
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第129集
編 著 者	磯野 雄二
編 集 機 関	熊本県教育委員会
所 在 地	〒862 熊本県熊本市水前寺 6 丁目18番 1 号
発 行 年	1993年 3 月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
御幸木部	熊本市御幸木部町	432016				1990.5~ 1991.2	3000㎡	河川改修

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物	特 注 事 項
御幸木部 古屋敷	集落	中世時代	掘立柱穴	青磁・白磁、土鍾	熊本県でも数少ない中世遺跡調査である。 中国陶磁器（青磁・白磁）の多量の出土をみた。 低湿地集落で鉄製品が多く小鍛冶の跡がある。 集落に伴う墓地がある。
			土坑	須恵質土器、銅銭	
			溝	土師質土器、鉄・銅製品	
	井戸	瓦質土器、鞆の羽口			
	墓地	中世時代	土坑	宝塔、五輪塔	
	散布地	古墳時代		人骨、青磁・白磁	
	散布地	弥生時代		鉄製品	
	散布地	古墳時代		須恵器、土師器	
	散布地	弥生時代		石斧、石ノミ、壺	

熊本県文化財調査報告 第129集

御幸木部古屋敷遺跡 I

1993年3月31日

発行 熊本県教育委員会

〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

TEL 096-383-1111(代)

印刷 株式会社 秀巧社

〒861-22 上益城郡益城町古閑106

MIYUKIKIBE
FURUYASIKI SITE I

— Archaeological Monographs, Kumamoto Prefecture —

NO. 129

1993

Kumamoto Prefectural Board of Education

04 教委教文

② 008

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第129集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：御幸木部古屋敷遺跡1

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2016年3月31日